

川柳塔

平成十六年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三二号

日川協加盟



No. 931

十二月号

全日本川柳誌上大会のご案内(柳多留第10集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(柳多留第10集)を開催します。日川協下次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞ「ご参加ください」。

課題と選者(各題2句・連記)

「ヨーロッパ」 辻 晩穂 撫尾 清明 共選
 「年 金」 山倉 洋子 土田 欣之 共選
 「力」 照沼 智 角本 華峰 共選
 「離れる」 島田 駱舟 森 東馬 共選
 「ベッ ト」 齊藤由起子 中原 諷人 共選

第二次選者

會田規世児 磯野いさむ 大木 俊秀
 佐藤 岳俊 吉岡 龍城

参加費

2000円(投句料)・『平成柳多留』第10集代
 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・
 (社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞

賞

全日本川柳誌上大会賞・秀作賞(予定)
 全日本川柳誌上大会賞(予定)

締切

平成17年1月20日(木)〈当日消印有効〉
 第29回全日本川柳広島大会(平成17年6月)

発表表彰

参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210
 FAX (06) 6352-2433

寒中見舞募集

○ 本誌平成十七年二月号掲載

○ 締切 十二月二十三日

川柳塔社事務所宛

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時。二月に限り会場が異なりますのでご注意ください。

平成十六年(二〇〇四年)

十二月七日(火) アウィーナ大阪

平成十七年(二〇〇五年)

一月十二日(火) アウィーナ大阪

二月七日(月) たかつガーデン

三月七日(月) アウィーナ大阪

第十一回川柳塔まつり

十月十日(祝) アウィーナ大阪

ジュニア川柳

鹿野中学校の活躍

河内 天 笑

本年度国民文化祭は十一月十三日、福岡県柳川市柳川市民会館で開催され、当日参加者が七〇〇名という盛況との報告を受けた。年ごとに前年を上回るという傾向が今年も立証された訳で、今や川柳活動の輪が全国的に拡大の傾向にあることの証明でもある。

行事が重なって私は残念ながら参加ができなかったが、川柳塔社からは事前投句、小中高校生の部に西出楓楽さん、当日投句一般の部に鳥取の新家完司氏が選者として参加した。一次選者の特選句の中から二次選者の投票により、和歌山の川上大輪氏が文部科学大臣奨励賞（受賞句・蟹食べる時の私が

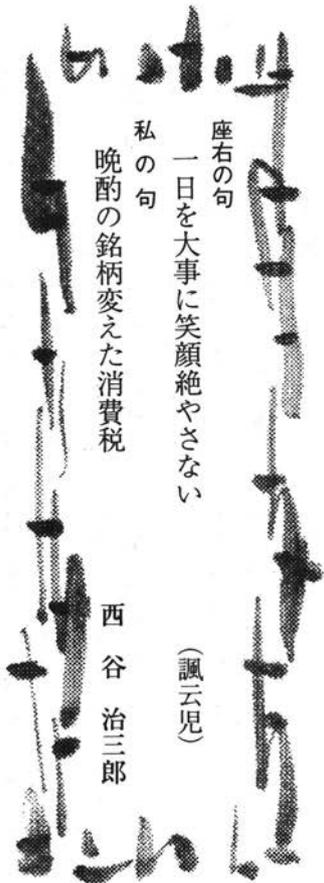
私です）、広島の小島蘭幸氏が（社）全日本川柳協会会長賞（受賞句・揺れて揺れて男になった樹になった）受賞という輝かしい成績であった。

これは去る六月十三日の全日本川柳二〇〇四年埼玉大会での青森の高瀬箱石氏の文部科学大臣奨励賞（受賞句・背景はいつも青空です敬具）に引続いたの快挙で大いに鼻を高くしている。

なお、特筆すべきは鳥取の中原諷人氏指導のもとに全校あげて川柳に取り組んでいる町立鹿野中学校の活躍である。今回、同校二年生の安井剛甫君が文部科学大臣奨励賞（受賞句・蟹の目も僕も何かを探してる）を獲得した。平成十六年六月十三日の、第28回全日本川柳二〇〇四埼玉大会でのさいたま市長賞を大井津祥君（受賞句・まごころを配ると笑顔満開だ）、平成十五年十月十二日の第18回国民文化祭・やま

がた二〇〇三での山形県教育委員会教育長賞を長岡優布美さん（受賞句・人生をゲームのようにあやつられ）を受賞、まさに川柳名門校の様相を呈している。

以前から川柳活動の盛んな鳥取県中の鹿野町が、二〇〇二年十月二十六日第十七回国民文化祭・とっとり二〇〇二の開催地として町をあげての協力で成功裡に導いたことは記憶にあたりしいと思う。ジュニア川柳との取り組みも実はこの大会を成功させるための一環としてはじまったものであるが、大会終了後も全校百六十名の生徒と先生方のたゆまぬ尽力で、今や十数人の部活として諷人氏の指導のもとに続いているという。こうしてジュニア川柳の芽が育つてゆくことは大変頼もしくうれしいことで、心からの声援を送りたい。



座右の句

一日を大事に笑顔絶やさない

(諷云児)

私の句

晩酌の銘柄変えた消費税

西谷 治三郎

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ジュニア川柳 鹿野中学校の活躍	河内 天笑	……	(1)
竹の灯りと川柳と	小島 蘭幸	……	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	……	(4)
自選集	奥田みつ子選	……	(54)
水煙抄	波多野五楽庵選	……	(58)
第19回国民文化祭・ふくおか2004	波多野五楽庵選	……	(79)
愛染帖	波多野五楽庵選	……	(80)
川柳塔80年のあゆみ(増補版)	波多野五楽庵選	……	(83)
誹風柳多留二四篇研究	波多野五楽庵選	……	(84)
73	波多野五楽庵選	……	(86)
茴香の花	政岡日枝子選	……	(86)

竹の灯りと川柳と

小島 蘭 幸

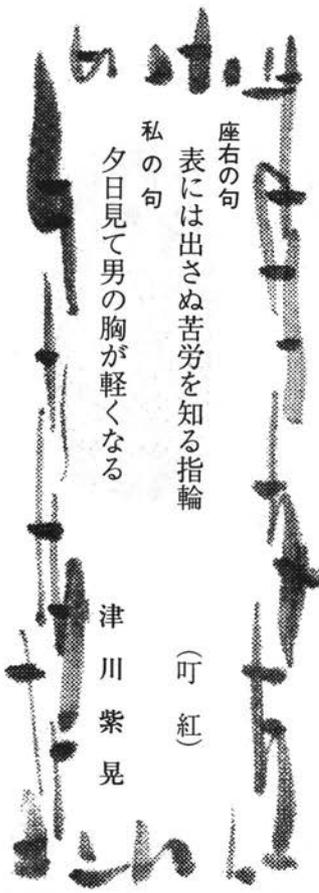
我が町竹原には、古い町並みがあります。この古い町並みと竹と灯を組み合わせた祭り、たけはら憧憬の路[®]が昨年の9月27日、28日に初めて開催されました。

竹原駅から町並み保存地区まで総延長三〇〇メートル、五〇〇本の竹灯りが一斉に点灯、かくや姫列車で来竹された尾道市長をはじめ各地から多くの人が訪れ、とても好評でした。とても好評でしたが私は一回だけのお祭りだと思えました。五〇〇本あるいはそれ以上の竹を毎年準備するのは大変だし無理だろうと思ったのです。

ところが多くのボランティアを支えられて今年も10月9日、10日、たけはら憧憬の路[®]は開催されたのです。たけはら竹灯りストリート。竹と光の幻想オブジェ。うまいもん屋台・味的路。まちかどアートギャラリー。あいふるシネマパラダイス。酒蔵コンサート。照蓮寺・雅楽演奏の夕べ、伝統音楽の夕べ等々。楽しい催しが溢れていました。

竹灯籠ゴッホ 太郎どようしゃがむ 不朽
竹楽器でオーケストラを竹の町 千代美

「算 数」	小白金房子選	88
一路集「うろたえる」	塩満 敏選	88
「ラ ス ト」	宗 水笑選	89
初歩教室「やがて」	三宅 保州	90
秀句鑑賞「同人吟」	古久保和子	92
「水煙抄」	杉澤 汀	94
■エッセー 父のこと	久保田千代	95
追悼 月原宵明元相談役		96
十一月本社句会	黒川 紫香・越智 青園・宮尾みのり	98
各地柳壇（佳句地十選／今 愁女）		102
柳界展望		116
十二月各地句会案内		118
■編集後記	楓葉・希久子	120



座右の句
表には出さぬ苦勞を知る指輪
私の句
夕日見て男の胸が軽くなる

津川紫晃
(町 紅)

音を消し竹のとうろう人を恋う 寿枝
竹灯りふっとひとりになっていた 蘭 幸
竹原川柳会は今年もまちかどアートギャラリーに川柳作品二十八句を展示しました。格子窓四ヶ所に三宅不朽さん手作りの短冊掛けに七句ずつ、短冊への揮毫は会員で書道家の古田太虚さんにお願ひしました。
10月9日の夜、私は妻と娘とカメラを持って町並み保存地区を散策しました。展示された川柳作品を撮るために。
頼惟清旧宅の格子窓の作品を撮っていると、若いカップルが作品を指で差しながら嬉しい会話が聞こえて来ました。
「ねえねえ私の作品が好き、夕焼けこやけ」字もとても素敵だわ」そこへ父親だろうか年配の人が来て「そりゃあそうよ。こういうところへ展示される作品はええのに決まってるわい」。
夕焼けこやけここは何番浜だった 力
古い格子窓、手作りの竹の短冊掛け、古田太虚さんの書、竹灯り。まちかどアートギャラリーの川柳作品展は多くの人の心を今年も捕らえたと思います。
さて来年はと私の思いは大きくふくらんでいきます。

憧憬の路あの人に逢えそうだ 万年
竹原の山川海も空も好き 節夫
町並みを歩く頼山陽の影 半覚



河内天笑選

鳥取市 春木圭一郎

うれしいね人を通したほめ言葉
幸運は笑顔の方へやって来る

どうせなら人の喜ぶことをする

ありがとう惜しまず皆へ声かける

思いやりあれば忠告効いてくる

測れない大きな心持ちたいな

竹原市 小島蘭幸

歯科医の椅子で眠ってやろうかと思う

頑固親父に私もなつてきた 笑う

栗ご飯亡父よどろんどろんと出て来なさい

旬という響きがいいね秋刀魚焼く

鉄棒をするおじさんがいる夕陽

松茸一本暫く飾ることにする

大阪市 古今堂蕉子

飽いた人と飽きない米を食べてます

何一つ不自由のない不幸せ

おっとまた輪のまん中でしゃべってる

あきらめた途端に道が見えること

身体の声聞かずバタバタしてダウン

オレオレ詐欺わてには子ない孫もない

京都市 都倉求芽

着飾った風が山から降りてくる

力関係なんと悲しい言葉だろ

国境を裸足で命がけレース

飴玉も踏絵もカネに結びつく

街角に美徳忘れたゴミ袋

同窓会紳士もいれば主夫もいる

羽曳野市 三好専平

ハンナンの裏で政治家甘い汁

アテネにもナシヨナリズムの花が散り

ほどほどがやはりまだまだわかりかね

何年も読まない本が積んであり

育てるといふ楽しみは捨てがたい

飛車よりも歩を大切にしたい

八尾市 内海 幸生

球根も植えた手も春疑わず
彼岸花慌てて咲いたミステリー
教養の差と言われそう口噤む
知らなんだことにしとこか楽だから
性懲りも無く買つて来た日記帳
色々な病氣と仲良く年を越す

堺市 和田 つづや

手のひらが合うのは感謝できるよう
ほのぼのと呑む酒かぎりない葉
夫婦にもしばしば愛はかくれんぼ
人生はいつも迷路を往くごとし
問いつめてしまえば愛が軋みだす
不器用なぶん真つすぐに愛してる

鳥取市 近藤 佳子

片親で育つた夫子煩惱
うつし世の淵をふらふら生きる日日
曼珠沙華母が微笑むように揺れ
わたしより頑丈だった友が逝く
手も足も普通に動く有難さ
先生を平気で殴る子に育ち

八尾市 生嶋 ますみ

ひとりぼち甘えることを許されず
どんぐりの背比べ悩むことはない
髪を梳くただそれだけでしゃんとする

そのけとばかりチャリンコ縫う歩道

優しいと言われて頼りないお人

贅肉とたたかっているスニーカー

岡山県 大石 あすなろ

口答えだんだん自我の芽が伸びる

三分咲きぐらいの恋でほほえまし

果てるまで女でいたいコンパクト

若くなる葉かくれて飲んでいる

箸二膳今日も変らぬ朝が来る

スーパリーのチラシと遊ぶ五割引き

広島県 福島 万年

恐いのね気付かない振りなんかして

何かある今日のあなたはよく喋る

はらはらり嘘のつけないチューリップ

こんな時なんで勝てないタイガース

近頃の犬みな同じ色の糞

台風一過瓦礫の上の青い空

米子市 白根 ふみ

まぎらわし茸はぼんぼん捨てること

新米を研げばわくわく光るもの

集団の渡り鳥に実りを奪われる

適量はいいと健診通過する

記念切手貼ると手紙がご機嫌だ

コスモスのゆらりゆらゆら強靱な

河内長野市 加島 由一

メモ通り買物をする十二月

やさし過ぎる位で男ちようどいい

真ん中に口八丁の車椅子

ストレスに貴重な髪が枯れていく

金持つと男は急に光り出す

妻の靴ついでに磨き職安へ

橿原市 居谷 真理子

みどりこのあくびこの世を疑わず

申しぶんなく上品で少し野暮

懐の金の匂いを嗅いだハエ

野良猫と同じ目付きをしてしまう

縄暖簾ちよつとお寄りという匂い

ハルシオン明日の元気を信じよう

鳥取県 新家 完司

神さまのせいで殺し合いが続く

野良猫が君は誰だと問いかける

園長はアヒル村立保育園

私の臍が世界の中心だ

持った本パタリと落ちて目が覚める

清く正しく生きて行くのは難しい

和歌山市 木本 朱夏

道の辺の道祖神さえ二人連れ

子を連れて神の言葉を売りに来る

神さまに尋ねたいことたとある

うしろ手に神が隠している答え

譲らない神ばかりいて血の大地

声囁れるまで神さまを呼んでいる

和歌山市 堀畑 靖子

かけおりて来た秋に会うハイキング

これはもう恋かもしれぬヨン様に

わたくしの源泉にある好奇心

和服着て自惚れひどくなる鏡

天高しゴール間近のダイエツト

ユーモアを枯らさぬように聞く落語

堺市 志田 千代

お祭りがはや見せ物になつてゐる

卒業後母校訪ねたことはない

子猫飼う話や三毛の三回忌

飼うまでは動物好きと言つていた

運針のうまい主治医の手縫いかな

長生きを嘆いた母も一周忌

鳥取市 田中 瞳子

背負いすぎ軸足の揺れ止まらない

悩む子の駆け込み寺になれぬ親

母を見る笑みに時々うそがある

野の花も咲き時ずらし楽しませ

一回転すればと思う人の首

家族四人ちがった医者に通つてゐる

砂川市 大橋 政良

弘前市 岡本 花匠

いい知らせ受話器伝ってくる鼓動
余命表ソロバン玉を一つ足す
貧しさに知恵も貧しくなってくる

戦時中憂さ晴らしてた かまえ節
子は宝きずなをたく母が繕る
手酌酒母の鳴焼き懐かしむ

腰掛けの椅子と切れないフリーター
息切れのはじまる僕のボールペン

一等米農夫微笑みこぼれ菽
木枯しの静寂戻り雪の町

弘前市 櫻庭 順風

弘前市 今 愁女

白神へ御出でおいでという役所
応募する焼け棒杭に火が付いて

熊もまた人に近づき危ぶまれ
ダイエー敗れ特売品をあきらめる
セミナー多彩錆びた脳でも濯ごうか

落雷で素直に下山するリュック
年寄りの冷水なんて去なされる

秋の夜もひそかに楽し温め酒
カラーゲン煮こごりでとり和食党

弘前市 富士 慕情

弘前市 宮崎 ヒサ子

娘の胸の膨らみ虫が気にかかる
地番だけ書いた手紙がボンとくる

急な寒波鳥肌立ってくる夕べ
ストープ出す猛暑の夏を振り返る
茶柱に凭れてみよう靴を履く

リストラの風には遭わぬ天下り
歯の治療終えてりんごが齧れない

友からの電話暫く笑い合う
りんごたわわ もう台風はこないはず

弘前市 高橋 岳水

弘前市 相馬 銀波

生と死が絡む病舎の非常灯
亡き人を偲ぶよすがの色紙展

村は過疎合併論が届かない
雨続く思考回路も水浸し
待たされた煙草二本が潮時に

うっかりと洩らした語尾が太り出す
切り捨てたはずの尻尾がまといつく
人間が信じられない鍵の束

冷静な声で好きとは薄い愛
買物に小銭ばかりの無職です

弘前市 須郷井蛙

青森県 小寺花峯

変身のと金じりじり攻めてくる
夏休み蛍がいると孫を呼び

どの石もほめて育てる教師の目

湯の街は川も下水も湯の香り

軽石に生きた何でも出来る母

弘前市 高瀬霜石

手帳から消える忘年会の文字

冬至の日古参の首を斬りにけり

経を読む和尚が風邪を引いている

悪役に徹する魅力的な人

コンセント抜けばほんとの日曜日

黒石市 相馬一花

下馬評に上がらぬ人の金字塔

カルチャアのダンスでいつも男役

念入りに美肌を撫でている既合

アツアツの二人を狙う倦怠期

住んで見て初めて知った安普請

十和田市 阿部進

言いたいこと言えば心が軽くなる

台風が東へそれてホツとする

何ごとも熱中すれば道開く

働いてもらうためにはほめてやる

嬉しい時さびしい時も飲んでる

いいことがありそう鏡笑つてる
ボンカレー食べて独りの誕生日

心に咲いたバラには棘などない

散り際の花も微笑む寒椿

雨となら会話が出来る朝を待つ

さいたま市 八田敏

介護十年あとは寿命の続くまで

何れ入る己れの墓へ花供え

年金に合わせ無理せぬ老いの日々

かけることない携帯をお守りに

執拗な台風列島傷だらけ

佐倉市 岡井やすお

対等に米と話せる力欲し

核疑惑韓はやっぱり南鮮か

蕎麦食って半分空けた屠蘇の酒

元気でと子から本年終電話

毎日をガラスのように生きる古い

武蔵野市 亀井円女

イチローに燃えヨン様に酔う平和

揉めるも楽し母と娘のけんか四つ

足の爪この手で切れるありがたさ

攻めないでガラスは真っ直ぐ生きている

女より男の涙信じよう

八王子市 播本充子

のぞみ号小さな羽根が生えてくる

一人また一人と熱い人が寄る

年下の男で脇を固めよう

今だから話すと友情が沁みる

欠席を決める小さなわだかまり

東京都 岸野 あやめ

国道で転んでからの弱気です

つんのめり転びましたが打ち身だけ

身代りのように壊れたジャンプ傘

十二月用のないのも物足りぬ

過ぎ去ったことは悔やまぬDNA

東京都 清原悦子

温かい鍋に定員などはない

汽車を待つ時間惜しまぬ旅行先

いつまでも夢追いかけてボケ防止

胸の内見抜かれそうなレントゲン

幾山も越えて優しい顔になる

横浜市 菊地政勝

スタミナを小出しに百を目指して

ベストセラー読んで時代を研ぎ澄ます

味付けをされて噂が飛び回る

古里の貌が集まるこけし棚

イチローが世界に放つサブライズ

横浜市 小野 句多留

泥酔の昨夜の粗相気が減入る

相続が済んでホントの一人の身

寄港する空母に基地の夜が沸く

私利私欲失せて見えてく黄泉の道

住職も男はずみの罪もある

富山市 島 ひかる

方言で必死に弁護する仲間

古傷を笑って話すクラス会

老木と根っこ共有する若木

豆煮えるワルツ踊っているように

十二月振り向くことが多すぎる

静岡市 安本晃授

妻の画布素直に虹を描いて秋

秋風にあてどなく翔ぶシャボン玉

夏の絵の影で少年恋ごころ

美しく生きよう恋のセレモニー

蟬シグレ バツタリ消えて彼岸花

静岡県 園田 猿杏

ちゃんとした戸籍を持った粗大ゴミ

日米に荒れる台風ハリケーン

海の青忘れていない秋刀魚たち

読めずとも墨の彩どり書道展

読みかけの本で机が片付かず

可児市 板山 まみ子

ひと芝居うって和解の道さぐる

正義感だけとはいかぬ紺背広

簡単な旨い料理が我家流

卵かけ御飯があれば御満悦

バラードのプレスリー聴く熱いモカ

愛知県 早川 盛夫

雨もまたよし萩の道歯染の道

様ざまなドラマ見てきた貸衣裳

練習をしてきた技が掛からない

作業衣に替えて鬨う顔になり

定年を癒してくれる山野草

大津市 中 宗明

野球狂一家で競う敵味方

あれこれと思案長過ぎ福逃がす

メリットがあるから耐える休肝日

話し合い損得からみややこしい

省エネにサファリールック幅効かす

京都市 高島 啓子

ここだけの掃除ですまぬ年の暮れ

お互いと思うが謝まっておこう

行き慣れておく方が良い歯医者さん

褒められた日は念入りに髪洗う

忘れたことが茶筌筒に溜まる

亀岡市 井上 森生

ど忘れの言葉もリストに電子辞書

百均を活かす自慢のアイディア帳

腹立ちをその都度書いて置くノート

シニアの時空自由な有難み

お笑いのパワーが遺伝子に効くという

京都府 稲葉 冬葉

あの男もこの女も去りセウシナイ

核心にふれるととぼけ顔になり

眠剤の代りに置いてある雑誌

辛口のされどタブーはさけている

客足が引きホツとしているバイトさん

京都府 丹後屋 肇

スタンドバーつづける厚化粧の皴

境界線はみ出したがる癖がある

自首をして高軒かく指名犯

神はとけ危機の時だけ呼び出され

リュウマチに両手を貸してくれるヨメ

大阪市 西出 楓 楽

外反母趾ガラスの靴はもう履けぬ

三男も三女も稀少価値がある

日の丸にグッドデザイン賞上げる

DNA無駄な努力を嘲笑う

小春日へ片付けものあれやこれ

大阪市 前 たもつ

真正面から妻を眺めたことがない
首から下検査はみんな正常値
死に際の立派な人に憧れる
輝いてたくて朝の一万歩
雑草が好きで選つてる土の道

大阪市 川原章久

おおきにが口では言えぬ犬の顔
他所者が化ける牛肉野菜まで
露天風呂湯気をふるわす佐渡おけさ
調子よいおだての風が吹いてくる
年寄りの暮らしに合わぬフルコース

大阪市 川端一步

菊花展ここは日本いい秋だ
交際貧乏サンマ一匹分け合つて
時々はきれいな空に身をおこう
改憲の流れに小さい拳ふる
九条講演外にあふれて座す木陰

大阪市 鶴田遠野

指切りの指が知つてた別れ道
妻の愚痴頷きながら聞いてやり
妻子には言えぬ哀しい恋がある
孤軍奮闘追い風待つている会議
へそくりは無く通帳は妻が持ち

大阪市 神夏磯典子

台風に追いかけられて十二月
いらいらを鎮める薬つくつてる
介護士の免状夫にもらいたし
柿みかんりんごと私慰める
脱北者のように子を連れ熊が出る

大阪市 板東倫子

怖いもの地震台風飢えた熊
イチローは古武士バットが剣に見え
掛軸の草書を読んで見直され
人間を馬鹿にしている鳥の眼
尼寺を尋ねる老人会ツアー

大阪市 本間満津子

神さまは誰の胸にもすみ給う
七転び八起き初心を忘れない
無理せずに優しい嫁と姑の幸
お目当てがあつて散歩を欠かさない
手品師の失敗拍手鳴りやまず

大阪市 津村志華子

里は好い月見団子に煮ころがし
湯めぐりへ誘い上手な旅冊子
今日も無事沈む夕陽に手を合わす
冷凍でひとりの夕餉チンですむ
ドンヒヤララ笛も太鼓も呑んだダム

大阪市 中田 あい子

表より裏にこるのが江戸の人
上よりも下が一番親孝行

プロ野球試合中止はドライすぎ

七五三 五歳の神妙豆紳士

満腹のあとのねむりは子の世界

大阪市 川久保 睦子

夕焼けこやけカラスが帰る森がない

古希まじか骨の軋みに悟る年

ねぎらいの言葉は無いがお茶がでる

傘ぐらい買えばいいのに濡れてはる

ダイエット スリムになった日捲りよ

大阪市 町田 達子

秋風を待っているのにまた台風

招かざる客は早く帰ってほしいな

これからの事などふっと考える

いつの間にこんな歳を取ったかな

台風一過月に送られ帰り道

大阪市 安達 はじめ

騙される橋も一度は渡る義理

私小説夢の色事少し入れ

捨てられて夫は自分に立戻る

五十年我慢くらべが実を結ぶ

大晦日鐘は悠々百八つ

大阪市 渡部 さと美

一人旅家の戸締めて風になる
自転車と縁が切れないこけながら

サバみそ煮作っておけば上機嫌

敬老日過ぎると老いてること忘れ

金木犀昔まつたけよう食べた

大阪市 小糸 昭子

お互いを磨く気が合うバッテリー

結びつくユーロが強いヨーロッパ

地続きで狩猟民族絡み合う

濃いコーヒ脳のストレス落ち着かせ

失った愛の深さは量れない

大阪市 清水 絹子

旅の空富士の気品にただ見とれ

相部屋に束の間だけどいいご縁

階段を無事に降り得た白い杖

金持ちも貧も素直に二十四時

清張の才知に浸る秋夜長

大阪市 大川 桃花

古顔になって雑用寄ってくる

少女からレディになってお辞儀する

街路樹も役所の都合引き抜かれ

木像に仏師の顔が透けて見え

温暖化秋がどんどん減ってくる

大阪市 奥村 五月

運動会へソ出し走る若いママ
土産屋で買う気になった国なまり
色々な薬が俺をもて遊ぶ
ランク下げ屋台で飲んで午前さま
定年後ベンチで犬と缶ビール

大阪市 玉置 英子

二日なら三十品目料理出来
水道水よくはなつたが浄水器
非常用飲み水取り替え時期になり
戦争の絶えない星で生きている
帰りにも同じ女性と乗り合わせ

大阪市 小泉 ひさ乃

七転び八起きが出来てまた転ぶ
諦めをやさしくなつたと勘違い
肩書も誇りも捨てた古財布
縫い上げて今日一日が満たされる
アルバムに夫婦青春物語

大阪市 岡本 久峰

忌憚なく話を交わす生き残り
世におもね生きる気のないへそ曲がり
象牙の塔抜けてペラペラよう喋る
崇神陵秋の陽受けてキラキラと
自叙伝を早くと娘急き立てる

大阪市 近藤 正

九条とイチロー国の名を高め
定年になって混み合うスケジュール
ただ一人男の乗った専用車
笑われた悔しさが有り今がある
川の字に六本の足日曜日

大阪市 岩崎 公誠

こだわりを棄てた無策で生き残る
五年日記三日だけ書き五年過ぎ
ライバルに本音の本音語らない
ウイルスを連れたメールが顔ならべ
鼻ピアス十七歳の自己顕示

大阪市 杉澤 汀

こおろぎを耳近かに聞く露天風呂
生れたは銀木犀の匂う家
酔芙蓉朝から酔うてどないする
銀行へボクもせかせか年金日
十二月八日暦になにもなし

大阪市 中村 叡子

善人がベントリムジン霊柩車
イチローが松井が日本盛り上げる
イエスマン舞台に揃え政治劇
五本指履けば冷えぬと語る友
銀杏が見事に実り息苦し

大阪市 津 守 柳 伸

被災地へ申し訳ない昼の風呂
山頂に有料トイレ待っている
あきらめが優先します体脂肪
現職はわたし一人のクラス会
紙質も耐えた積年サイン帳

大阪市 津 守 なぎさ

千メートル揺られ風雨の駒ヶ岳
霧晴れた束の間せわしかメラアイ
気入りのドレスを指すダイエット
仲間割れずけずけ話すツケがくる
冷たさが殊更うまい山の水

大阪市 松 尾 柳 右子

ぜいたくな旅行に欲しい梅茶漬
夏雲と秋雲見せる宇宙の妙
陽光は男 夕日は何故女
万華鏡回しあしたの夢を見る
イチローのニュースけんかは後回し

大阪市 榎 本 日 出

教えたら本当ですかと辞書を見た
若さとはいいな昨日を忘れてる
賞味期限されて優しくなるふたり
馬子に衣裳カーテンだけを替えて見る
寝たまんまテレビ体操見でして

大阪市 榎 本 舞 夢

中立を保つてるのに疎まれる
嫌われていると知っても好きは好き
凜として菊一輪が客を待つ
母さんのエプロン朝の顔になる
地震来て棒立ちしてただけのこと

大阪市 伊 藤 博 仁

穀と身が五個ずつあったしじみ汁
筋肉が落ちた口数慎もう
つわりの娘励ましながら心待ち
ソロバンと聞いた右手がしゃしゃり出る
敬老会招待席に僕もいた

大阪市 西 川 更 紗

手の合図マナー触れ合う対向車
菜園で両手いっぱい幸もらう
信念を貫く友に肩がこり
振り出しに戻り気持を締め直す
落ちりんご台風ジュースに名を変えて

大阪市 熊 代 菜 月

里山を秋が誘って下りて来る
古希祝旅で踊った佐渡おけさ
笑うより仕方なかった勘違い
この道を行くよりはなし喜寿近し
鍋と蓋夫婦の絆五十年

大阪市 星野 きらり

ええヒント浮かばぬままにカボチャ炊く

挨拶を交しながらもハテ何方

秋風へ速達便をとどけよう

白桃に思いを馳せる孫の頬

もう寝ろと声がかきこえる仏間から

大阪市 野田 栄呼

日本には台風レール敷いてある

当選後急に頭が高くなり

能書きに魅せられて買う化粧品

化粧室のように車内の高校生

包丁で切らない指を紙が切る

大阪府 桑田 ゆきの

満水のダムに水皺幾何となる

水ゴクリ真夜の厨にちろろ聞く

百歳に秘訣を問えば酒ちよつぱり

カーナビの操作出来ない合併村

沸点に記録の鐘が鳴り出した

大阪府 澤田 和重

食欲の秋へてこずるダイエツト

白状をしなさいキット楽になる

眉かいていつもの妻に戻る顔

生きている今を幸せだと思ふ

喜びを素直に出せぬ苦勞性

大阪府 初山 隆盛

一年の収支を酒に問うている

メルヘンを乗つけていわし雲走る

琴線にふれるやさしい介護の手

十階の踊り場ボクの広っぱだ

古伊万里にてつさが透ける日本の美

大阪府 前田 ゆい

少子化の影だんじりの曳き手にも

手抜き主婦デパ地下人で動かれず

米寿まであと十八年プラン練る

千日前吉本へゆくツアー客

台風と熊におびえて秋更ける

大阪府 米澤 俣子

沈黙と無視ほどつらい刑はない

恥じらいという美しい日本語

秋天が祝ってくれた誕生日

嘘かばう嘘が混線してしまひ

フルートの風に銀杏の落葉舞う

池田市 栗田 久子

年末の多忙を癒やすティータイム

枯れ葉舞い早い眠りに沈む街

向けられた笑顔ほほえみ返しする

こつくりと師走味わう大根炊き

あれこれを先送りして除夜の鐘

茨木市 藤井正雄

運だけで取れたポストとへりくんだり

七回忌彦左の叔父が小うるさい

いい湯だな入浴剤とは露知らず

税務署の椅子喉涸れる喉涸れる

冗談も出て本当の仲直り

大阪狭山市 矢野 梓

居ながら紅葉楽しむ友の家

松茸を横目にしめじ買って来る

やさしさが伝わってくる言葉尻

受話器から悪魔やさしい声を出し

父母の事ふと思いつく虫しぐれ

和泉市 西岡洛醉

カレンダーの一日進む夢進む

裏の顔かくした父に過去があり

友の手の温さに過去が甦る

ひと時の無欲が成せる善の道

煩惱をひとつ捨てよう歳の嵩

和泉市 中川 楓

秋の空昨日のことを早忘れ

嫌なこと背泳ぎをして忘れましょ

女性専用車 歳に関係ありません

台風の目の中について電話する

老人を粗末にすると罰当たる

泉佐野市 山本蛙城

ファッションショー疑似餌の色に見えてくる

スーパーへ赤札ごろと午後八時

バックパスになって待ってた山の神

玄関で靴が教える子沢山

脱皮した形ドレスが脱いであり

柏原市 永浜 加津子

病む夫に寄り添う決意 秋清か

謎解きにしても明日は闇の中

眉間の皺心にもなく深くなり

パソコンの序の口あたり遊び場所

笑い種いっぱい持った人と会う

交野市 森本弘風

今はもう熊野三山街の中(熊野三山詣で)

観光で世界遺産が泣いている

死ぬまでにはばれない嘘はよいと亡父

エスカレーターいろんな乳房運び上げ

妻が画く絵手紙みんなほめておく

交野市 山川 日出子

飛行機で天国に行く東雲さん(甲元航空兵東雲氏)

真善美川柳塔の米寿待つ

日本の野球小僧が世界一

創作の和合奏指揮玉三郎

風船が風に頼んだ宇宙行き

交野市 田岡九好

いざ赴かんオイローパーへ老い二人(中欧の旅)

朝霧の大平原にドナウ川

旧市街尉と姥とが手を取って

教会と古城ばかりのヨーロッパ

中世の民家の土間の赤ワイン

河内長野市 山岡 富美子

晩学へシーズンオフを華にする

燃え尽きるまでがシーズン女の譜

ほろほろの辞書からもれる青春譜

心音に背を向けている失語症

逃げ腰になると絡まる恋の糸

河内長野市 井上 喜 醉

豊漁のさんまスーパー持てあまし

朝露が荒れた山肌なぐさめる

極楽を開く巡礼遍路バス

ドクターに妻の心臓看視され

高原の小鳥が唄う大自然

河内長野市 村 上 直 樹

なぜひとつ解けた向こうになぜの山

アングルを変えて掴んだ逆転機

本棚に渴く心の常備薬

ふっ切れてああ旨いめし青い空

ゆったりと生きてあつさり雲隠れ

河内長野市 植村喜代

今日も坂下りて登って買物に

電話で会うだけの自由は残ってる

そしたらね言って話はまだつづく

テレビ見て一人で笑う健康法

一度では悲し過ぎますこの人生

岸和田市 岩 佐 ダン吉

いつだって独り男にある凄味

満場の一致は拒む手を上げる

群れるのは不得手ひとりの空を見る

生も死も裸なんにも怖くない

面目が立ったらお腹空いてくる

岸和田市 原 さよ子

入院で心を結ぶ夫婦愛

最高の笑顔で覇者のお立ち台

無事な顔見るまで母は起きて待つ

別人になった花嫁わが娘

別人に私もなれる酒二合

岸和田市 亀 井 皎 月

牛に草刈って与えた少年期

風紋を消して風紋書く砂丘(鳥取にて)

危険物五十名抱く課長職

激動の昭和を生きて来た絆

鬼瓦わたしの過去を知り尽す

岸和田市 雪本 珠子

人生の節目ポリシー変えて見る

お望みの色に染まって生きてます

何時までも貴方と共に歩きたい

気負わずにたまには弱音吐いてみる

あわてないピンチの後にチャンス来る

岸和田市 宮野 みつ江

九体仏誰かが往生させてくれ

ひとやすみして人生を考える

別れ話出来ないように鍋料理

夢語るのに遠慮などいらぬよ

アルゼンチンタンゴの恋に狂いたし

岸和田市 井伊 東吉

町は今金木犀の香が満ちる

お礼肥待っていますと蘭の鉢

ルールだが釈然とせぬプレーオフ

東北に火花を散らす新球団

母遺品捨てるかどうか迷う夜

岸和田市 土橋 房枝

乗る気ない娘の免許ゴールドに

抜け目ない保険のCM聞き飽きる

宝くじ欲望過剰人の列

突然に反抗起こす少年期

子のこころ理解出来ない親が増え

堺市 河内 月子

菊日和菊愛でながら飲んでいる

ばあちゃんの出番いちにち子守唄

按摩器に座るとすぐに寝てしまう

バス停がうちの近くへお引越しまし

弱いこときょうさんあるが気にしない

堺市 柿花 和夫

転勤は土地の祭に慣れた頃

ご先祖の意地のごとくに彼岸花

風神の怒り招いた温暖化

果物にべつ腹を貸す秋の夜

ここからは自己責任のはしご酒

堺市 山本 半銭

煽てられ若い仲間に従って行き

芝に寝て空の広さは天下人

木洩れ日のチロチロ風の息遣い

台風に神木だつて慌ててる

朱の神殿に情け容赦もなき嵐

堺市 矢倉 五月

コメントは辞書ひいてから致します

びつたりの服を捜せば3L

決断を下す早さは母譲り

病室へ幾度運んだ御神木

玄関は一緒に出たが右左

堺市西村りつえ

新幹線四十周年おめでとう
猛暑去りなかなか取れぬ怠け癖
地震台風宇宙の怒り続く秋
焼き松茸韓国産でお茶にごし
文化国熊も町へとやってくる

堺市宮本かりん

だんだんと美化されてくる過去の人
胸の底セピアの恋を眠らせて
三面鏡の中のひとは魔女だらう
老いてゆくみな経験のない世界
ながながと喋って少しだけ理解

堺市齋藤さくら

お日様が包んでくれるウエディング
嫁ぐ日は涙見せぬと決めていた
里帰り待っているのはおとうさん
台風の度にメールで安否問い
物分りいい顔してるから油断

堺市神原文

絵手紙の葡萄はいつも青信号
電磁波が迫ってくるぞ黄信号
牛肉のたたきで今日は雨になる
手入れせぬ庭 森林浴をせよと言う
台風の庭に訃報の電話鳴る

堺市國見蘭香

サプリメント飲んで元気を足している
ぴょんと跳び思案顔する雨蛙
しばらくは痛み忘れるはしやぎ声
退屈な時は良からぬ血が動く
潮ざいのやさしい宿で命足す

堺市石堂潤子

悲しみは背中に溜まる笑わねば
宇宙飛ぶ世に煎じ薬飲んでます
ぼつねんと惚けて仕舞えば極楽か
秋灯下一人の夜は淋しくて
譲られた席嬉しくて侘しくて

堺市村上玄也

生き方のスタイル変えた定年後
満ち潮もやがては引いて行く定め
記憶にはございませんと二日酔い
無駄口は叩くが本音明かさな
腰痛の診察券が五枚ある

四條畷市吉岡修

なぜと言うことはないけどどうまが合う
八ツ目は雲を霞と逃げる癖
空だ無だ説いた和尚の奉加帳
飲むときはとても無心な顔してる
超高層倒れるまでは伸びる気か

吹田市 大谷 篤子

神様にそつといつでも見守られ
種チラリ孫の手に拍手する
コスモスに埋もれ犬と行く散歩
このブームはくそえんでる仕掛人
万策をつくして後は笑うのみ

吹田市 山本 希久子

余生の暮し重心低くして耐える
いつもの朝が来ると信じて早寝する
飯の世の飯の姿のまま昼寝
もう一緒に歩いてくれぬ孫十五
待つ人がいる喫茶店恋もどき

吹田市 太田 昭

夜になると何故かおしゃれがしたくなる
食偏の敵に見える血糖値
こだわりを捨てて焼酎でも飲むか
現役の媚びた仮面を脱ぎ捨てる
勾配に合わせ余生の荷を担ぐ

吹田市 瀬戸 まさよ

怖いけど熊にも生きる権利あり
前職のくせどんぐりをつい拾う
お誘いのある今が華秋来る
辛いから漫才聞いてワッハッハ
ためらわずピアスをつけて活き活きと

吹田市 木下 敏子

もう一度ジャンプしたいと竹を踏む
ジャンプするつもりで打てばミスショット
健康が財産だよと言う笑顔
古稀すぎてまだまだしたい欲を張る
呑み込んだ言葉心でさわがしい

吹田市 岩屋 美明

隅っこが気楽で好きに生きている
しみじみと古里思うハーモニカ
釣人と話し込んでる旅靴
青春ははるか東京ラブソデイ
仏壇の中までさがす忘れもの

吹田市 野下 之男

禁じても手招きしてる棚の酒
良い嘘は家内平和の隠し味
古い二人物忘れまで仲が良い
よう言うよ一億円を忘れてた
柿の実が熊を哀れむ里の秋

吹田市 早川 棲世

尖塔が見えて木立の先に町(旅の墨索 その八)
石材の奥に神々棲むギリシヤ
フィレンツェで見る神の画は美男美女
パリに住みいきなり隣家から訴状
日本てよい国ですぞメディア殿

吹田市 須磨活恵

ずぶぬれになって迷いがふつ切れた

悲しゅうておもろて人生切のうて

見送った後の淋しさ糞ふる

大海で溺れて見たい好奇心

やせ蛙なれどジュラシーもブライドも

高石市 浅野房子

オンリーワンひとりに馴れて煩わし

説得にすぐに崩れて行く決意

捌け口はない癒されることもない

地震以後揺れに反応してしまふ

朝顔は小さく咲いて幕を閉じ

高槻市 生田義一

まだ男胸のふくらみ気にかかる

明石橋バックに家族はいポーズ

やっときさ日本力士が賜杯抱く

右左打ち分け世界新記録

オレ流の采配見事チャンピオン

高槻市 執行稲子

お彼岸をただ待つことに夏帽子

理屈などさらさら無いとマイペース

エスカレーター関西右へ寄る不思議

まなうらの底で生きてる過疎の里

オーロラの焰と夢の中で会う

高槻市 西谷治三郎

黒い髪茶髪になって今坊主

味噌汁の冷めない所にいる疲れ

老人をたらい回しにする病院

嫁に出す いつでも帰ってこいと言ひ

二階まで上がったけれど降りてきた

高槻市 乙倉武史

日本語を尻目風切るカタカナ語

万全の備えをテロはあざ笑う

公園の砂場野良猫トイレ化す

怪我の子が出てから騒ぐ遊戯器具

おれ流に生きたし余生ロスタイム

高槻市 左右田泰雄

山の端に沈む夕日に足を止め

横道にそれた話が終らない

コスモスを右に左に掻き分ける

かつとなる質で仲間が寄り付かぬ

じりじりと焼け付くような都市砂漠

高槻市 井上照子

胸の差でテープを切った一等賞

若者のキス公然とあ時代

数学が伸びたと親も夢描く

ベストセラー秋の夜長を一頁

この鏡正直すぎて伏せておく

高槻市 瀧本 きよし

スリーダイヤ前にいるので左折する

オーイ酒言える女房はバス旅行

近頃は嫉をせずに遊ぶ親

髪の毛にさいなら言われ買う帽子

脱線の多い授業に人気沸く

高槻市 江原 秀夫

歯を磨く鏡と今日を語り合う

もう何も変える気はない傘寿越え

腕組んで妻の歩幅を確かめる

立場上脱線します踊ります

一日いちにち いとしいいのち秋深む

高槻市 傍島 克治

股火鉢蛍雪時代遠き冬

月に兎がいると信じる祖父が好き

医師許す飲酒に妻がダメを出す

理屈で勝つてもしつこさには敗ける

分相応が分らずいつも背伸びする

高槻市 田中 千莞子

亡夫と会う銀河鉄道白昼夢

誘われてドレスの中に鑑着る

狼がやさしい声で寄ってくる

散歩道犬には犬の恋があり

君だけと愛されてから美女になる

大東市 南原 正和

点字書の紙の白さが目に染みる

秋風に物言いたげに散り行く葉

断ち切った心迷わず甘い文

思いつきの駅通るとき目を伏せる

車中には年増美人の昼下がり

大東市 児玉 蛙

年金に助けられ父背伸びする

意地悪が笑顔いいねと皺かぞえ

心掛け次第人生信しよう

母の笑顔見たく好物買って来る

ふるさとの風に小言を聞かせてる

豊中市 藤井 則彦

ピアスした時代祭のお姫さま

色艶をもう比べてるクラス会

譲られる席で素直になりました

着いてから大阪駅で買う土産

世話になる弱みで今日も皿洗い

豊中市 山門 夕ミ

うす眼開け耳かきいいママの膝

秋便り一足先にテレビから

亡夫恋し心の森に一人住む

足庇いポパイになった私の手

おどろいたススキ三本二百円

豊中市 水野 黒 兎

豊中市 江 見 清

つまずいた入試をバネに世に跳ねる

お茶漬に品格くれた小津映画

合鍵が時々合わぬ妻の乱

針に糸通せぬ歳の目が痒い

筆箱に万年筆が枯れている

豊中市 吉 田 あずき

ノーベル賞ほどの豪華な花の束

ほんのりと酔えばこの世に彩がある

一山を越えた自分にする拍手

山下りる熊も答を探して

死ぬことは美学か耐える図が欲しい

豊中市 安 藤 寿美子

大量殺戮蚊柱に殺虫剤

飲みすぎた夜は誰もが憎らしい

微笑みをいつも絶やさぬ怖い人

ガブ飲みをしても心はずぐ渴く

ガラス戸にハエとハエトリグモがいる

豊中市 岸 田 知香子

秋空にそびえる野間の大けやき

満月に仕事の疲れいやされる

餌求め街中を行く熊御難

痛ましい命の軽さ記事に泣く

スタミナが切れて気力の八十路坂

決心がつかず散歩が長くなる

I Tの工場も地鎮祭をする

年収の欄で止まったボールペン

夕立で走ったことはずっと前

願い事絞って来てと神の声

富田林市 池 森 子

吃水線辺りへ我慢という一字

一人芝居がつづく舞台は四幕目

はにかんで席を譲ったのは少女

ステーキはミディアム愛もそのように

借りてきた勇気で踊るフラメンコ

富田林市 片 岡 智恵子

言いかけた嘘胸底でかみころす

イチローの前に敵の影は無い

影法師いつも無欲でいてくれる

狂ってはならぬとみかん剥いている

割れるまで色を見せない大ざくろ

富田林市 稲 川 恵 勇

貫禄はあるがお金に縁がない

裕福に暮してはるが別居中

あげまんの運で貰うた深い椅子

終電車喜怒哀楽をどつと吐き

運河より食い気にはしる小樽の夜

富田林市 中井アキ

スクラムのひとりが横を向いている
満月に心の髷を覗かれる

ミニバラを飾りひとりのバースデー

向き合えばとても告白など出来ぬ

神様の狼煙に誰も気付かない

富田林市 藤田泰子

無一文夢はたくさん持っている

憎いけど嫌いと思つたことがない

白寿だと言つてもびつくりしてくれぬ

星月夜 銀河に会いたい人がいる

脱ぎ捨てた殻の重さよ日記帳

富田林市 大橋鐘造

何時だつて笑えるように歯を磨く

酸性雨森の嗚咽を聞きのがす

無視される事が怖くて手を上げる

足踏みでまた一日が過ぎていく

絆だと思えば楽し口喧嘩

羽曳野市 吉川寿美

胸奥にまだ華を抱く喜寿の坂

翅のない蝶です寓話の中で飛ぶ

百点に遠い妻です爪を剪る

塀越えて隣の柿の枝たわわ

不発弾握りしめてる妻の乱

羽曳野市 酒井一壺

見る人を主役にさせる村芝居

もうだめと思つた頃に来るチャンス

勝ち見えた時に一番気がゆるむ

受け売りの知恵もとっさの役に立ち

具合よく相手見つかり新所帯

羽曳野市 安芸田泰子

合格に神頼みしたこと言わぬ

待ち侘びた秋があたふた通り過ぎ

盆栽で小さい秋が紅葉する

鈴虫も雌が長生きするらしい

留守電へためらいながら声を入れ

羽曳野市 徳山みつこ

無口になつた虫籠はもう忘れられ

まだ動く鈴虫きんさんとぎんさん

染めてないヤングの髪に恋をする

コンビニに屯のヤング レジ打つヤング

落葉散る私もストレスを落とす

東大阪市 安永春

安来節おかしな腰で盛り上げる

飯の世を大事に仏お守りする

へそくりの夢を楽しく編んでいます

爺ちゃんの手品もどきが受けている

カルテから若い自信が薄れ行く

東大阪市 笠井欣子

東大阪市 北村賢子

何気なくジョーク交えて言う真理
定年後ゆつくりズムが板につき

我が痕を書いた日記は封をする
生きているうちは励もう遊ぶこと

健康法昼寝第一私流

東大阪市 中岡 妙

弱味など無いけど少し黙つとこ

考えていつも迷路に嵌まりこむ

褒め言葉なら迷わずにいくらでも

正直に鳴いて嘘などつかぬ虫

ごり押しの客に思考を止めておく

東大阪市 指宿 千枝子

盗まれた不運を叫ぶムンクの絵

喜怒哀楽人それぞれの運で生き

コンテストずらり美人がくらべられ

キャベツ抱き散歩帰りはうちの人

村は過疎氏神さまも淋しかる

東大阪市 谷口 義

何事もなくて秋刀魚を裏返す

白々しいことも夫婦なら言える

どうぞどうぞと女が仕切る昼の酒

具体的に言えば大したことでない

無駄だとは思わないから化粧する

八月のこの青空へ鎮魂歌

スッピンの心で神様に祈る

バブル崩壊貧乏神が舞い戻る

私なら心配ないと母の嘘

トレンチコート似合う男性によわい

藤井寺市 中島 志洋

堅物を守り通した肩の凝り

善人の財布が軽い年の暮れ

草臥れた顔を鏡に叱られる

珍しく男勝りの愚痴を聞く

いろいろとおましたなあと晦日蕎麦

藤井寺市 高田 美代子

風が動いて真つ新な秋が来た

美しく咲くのも神の思し召し

やんわりともつてくるから断われぬ

屑籠を何処へ置こうか思案中

字余りと字足らず寄せて二で割ろう

藤井寺市 太田 扶美代

わたくしのやる気をいつも危ぶまれ

人生の中ほど粘ねばの坂がある

真心と真心ときどき喧嘩する

パン跳ねて朝の小言はひかえ目に

踏み外してばかり軸足に深手

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

新しいドアへノックをした鼓動

いつの間に熱がさめたかペアカップ

打楽器は足の裏から打ちのめす

砂時計落ち急ぐ訳ありそう

薬にも毒にもなれぬ意気地なし

転倒しMRI撮り一安心

家計簿の鉛筆書きが見づらくなり

美容院病院へ行く日の丸じるし

要支援から介護Ⅰに変わつて

猛暑のおかげで甘い秋の果物

枚方市 安達 忠央

飲んだ時だけのつよさとみくびられ

むつかしくなったら妻にまかせます

しのび逢いこのときめきに歳はない

理屈ぬきくにの松茸この旨さ

孫の弾くピアノが聞けるようになり

枚方市 宮川 珠笑

本心はすべて消去をしたメール

台風を迎えに雲が走つて

挨拶をとちり本音で締めくくる

さあ今日も新しい修羅整える

日めくりと一緒に昨日の傷を消す

枚方市 二宮 山久

七五三参り詣でる夫婦旅

秋本番味覚が届く宅急便

行く夏をおしむか秋の味覚かな

仕事終え午後三時の缶ビール

パソコンをあやつる我も六十歳

ぬっと飛ぶ飛行船みたいなのが好き

年輪と言われたくない顔の皺

恋も嫉妬も経験しました少年期

十人十色花も葉っぱもみな違う

ミスする度に気配り上手になつてくる

枚方市 海老池 洋

歳月が夫婦の糸に撚りを掛け

落城はさせぬ親父のあばら骨

あくる朝覚める保証もなく眠る

秋風と禅問答の枯れススキ

あだし野で会う極楽の余り風

枚方市 莊司 弘之

万歳のかたちに街の樹が斬られ

日陰でも頑張っているきのこたち

弱そうなふりして人を寄せ付け

真夏日とともに更新ビール腹

老夫婦黙って夕陽眺めて

寝屋川市 江口 度

寝屋川市 平松 かすみ

炎天へ挑む若さに拍手する

マジシャンの背広の裏にある広場

おみこしが暴れ放題神の留守

耐えること教えた母の太い指

つぶれる前に合併をもちかける

寝屋川市 富山 ルイ子

ありがとう数え切れないほどの恩

懸命に生きた証か優しい目

昨日今日悔いを引きずりながら生き

生きている実感何気ないことで

とりかえしつかぬ暴走する子供

寝屋川市 森 茜

流れついた岸でじっくり冬仕度

アラームが割りこんでくる授業中

喘いでた夏を見送るすすきの穂

地下道を上ると街はモノトーン

世の中に怒って目まいしてしまふ

寝屋川市 籠 島 恵 子

人生は雨天決行ズルもある

マイペース崩さないのも疲れるぞ

夫には時々嘘をつきながら

花屋さんの菊には風が吹いてない

三連休わたしひとりが飛んでいる

この地球無限と信じられぬ今日

利き酒で特賞取ったのが自慢

くしゃみ三回お疲れらしい遊び過ぎ

知らぬ間に撮られたママの大欠伸

仏滅も気にせぬ友で恙なし

寝屋川市 坂上 高 栄

民営化簡保の旅の値が上がる

夕焼に影を落した皆無言

ハリケーン大きな国へそれなりに

人類の願う平和を乱すテロ

イチローを絶賛アメリカ国民性

寝屋川市 太 田 とし子

嫁の留守ちゃっかり守る冷蔵庫

ちゃっかりとポツケがお駄賃ほしそうな

副作用だけが答えた置き薬

副知事の指図に知事が領いた

生き残り杖が自慢のクラス会

箕面市 出 口 セツ子

背も心も抜かれて親の退職日

真つすぐに生きると青い青い空

親らしくなくて甘えてばかりいる

幸福と思う淋しいとも思う

愛情の嵐どこかで恋うている

自己不信自虐のメディアも色褪せて
団塊の世代が去れば正常化

金メダル選手の顔に血がかよう
核疑惑韓国までも抽出を
赤白と公園飾る百日紅

守口市 石 森 利 昭

熱爛も冷やでも旨い季節来る
もの頼む時だけ見せる良い笑顔
遊び癖ついたか猫が帰らない
定年になれば旅にと言ったのに
妻と娘の話に入れてもらえない

守口市 結 城 君 子

洗濯日和とテレビの声が追っかける
空はうつりぎ昨日の嵐知らぬよう
グループに電話をすればみな腰痛
お彼岸の墓地一色に紫苑咲く
台風のさなかお産の孫帰阪

松原市 小 池 しげお

金無くて浅い流れで生きている
台湾で道を聞かれたことがある
作戦ができたらずるい事ばかり
手拭で嘘をふいたらまっ黒け
秋深し去年煙草をやめました

八尾市 宮 崎 シマ子

つんどくを一冊減らし秋夜長
階段も改札もない故郷の駅
すだちが済み次には柿が届くはず
度毎に避難先祖の地は捨てぬ
楽しそな顔したら胃軽くなる

八尾市 宮 西 弥 生

一駅が二駅歩く秋ごころ
具だくさん味噌汁秋を深くする
世の中はこんなもんだな平常心
食卓のひとりを癒す産地もの
名水の彩が癒しのお茶にする

八尾市 吉 村 一 風

あらためて思う昨日はもう来ない
逃げ道を示唆してるのか彼岸花
遮断機で心のリズム整える
がらくたに未練やつぱりよう捨てぬ
飾らない言葉あとから身にしみる

八尾市 長谷川 春 蘭

更衣母のしていたようにする
祭りにはきつと帰ると言ったのに
方言に戻る墓参の立話
断ち切れぬ想いが咲かす曼珠沙華
散る紅葉二人で歩くはずの道

八尾市 山本宏至

妻と嫁のまん中へんでうろたえる
兄ちゃんの泣きまねをして叱られる
ふかふかの愛のフトンで寝ています
血糖値酒御法度の喜寿祝い
金婚でやつと夫婦の顔になる

八尾市 村上ミツ子

やさしさに触れてやけどをしよう
とつとけばよかつたとうさんのコピー
納豆の粘りに負けていられない
エリートを見上げて首がだるくなる
ぶらさがるように出来てる父の腕

八尾市 高杉千歩

見せかけの介助は自立妨げる
コスモスと戯れいちにち青春す
恍惚の友と興ずる数え唄
自由とは悲しいものねおじぎ草
賀状三百やっぱりお出しする

八尾市 井尻民

ぶつ切りの男料理の味を食う
やさしさの裏に隠している阿修羅
どっしりと大地踏んでる太い眉
真っ白なドレスが孕む愛の風
あと先の風と話していく散歩

神戸市 池田善守

患ろうて夫婦の味の深み増す
気配りの修業がつづく定年後
ボケだけは先延しをよしとする
もうひとつ山をのぼるぞ古希の坂
人それぞれ人生いろいろまたたのし

神戸市 山口光久

向き合えば自然にとける蟠り
身の丈を超える理想は持っている
精一杯自分の色で立ち向かう
今にして寡黙な父が諭すもの
止り木に今日一日が癒される

神戸市 伊勢田毅

四面楚歌僕からそつと影も逃げ
神様も本音建前使い分け
ある予感預金通帳確かめる
追い風になると味方がどつと増え
老い二人七間の城を持って余す

神戸市 木村貴代子

見ないのも惜しい気がするカタログ誌
本を読むまでに回復したらしい
ストレスをふうわり包む金木犀
教えたい教えられたくない母子
行く末をおそれぬ白紙委任状

神戸市 山口 美穂

鈴虫の声がむかえてくれた宿(飛騨の旅)

自分への土産を一番先に買い

予報外れてルンルン地酒が咽に沁む

自慢のもの並べて朝市の声弾む

わたしの口はすぐに忘れるダイエツト

芦屋市 黒田 能子

患うた耳に聴こえる鈴の音

殻の中コツコツ力蓄える

頃合いを見て座を立つは難しい

まあいいか運にまかせた曲り角

比べない私はわたし一人だけ

尼崎市 春城 年代

秋祭り胸に抱く火を持って余し

山里の緩い風吹く母の声

化粧する氣にいらぬとこ丹念に

晩年をしみじみ生きる芒の穂

火の酒を今は静かに嗜みぬ

尼崎市 春城 武庫坊

台風と猛暑に好かれ戸惑いぬ

秋気配素足の先へそりり寄る

妻と酌む酒は心が満ちてくる

菊花展色花大きい顔をする

沈む陽の向こうの国でテロ続く

尼崎市 山田 耕治

長生きの秘訣いままさら恋という

好きなかたへ顔傾けている写真

原稿があるから答弁すれちがう

噂よと念押す話聞かされる

めくばせをされてだまつて横で聞き

尼崎市 林 昭三

追越して行く人ばかり地下の街

小出ししてその辺のこと聞いてみる

男女とも三人寄れば派閥出来

最終は男でしょうと押し切られ

また来てね またな狸が約束す

尼崎市 田辺 鹿太

阿呆なことばかり言うけど気は確か

一〇〇グラム瘦せた肥えたと騒ぐ妻

広告のタダほど怖いものはない

ガソリンが切れたと父は居酒屋へ

物乞いはしないカラスの虚栄心

尼崎市 松下 比ろ志

餅を搗く兎が月に居たはずだ

変り身が早くて過去が幻に

蟬は今浄土の森か秋祭り

赤トンボ君等も直ぐに群れたがる

時たつと痛み忘れる傷の跡

尼崎市 長 浜 美 籠

川西市 西 内 朋 月

雑念が判断力を狂わせる
どうにでもなれと溶けてる舌下錠

遠のいて行く靴音を聞いている

缶ビール並べ遍歴聞いている

一進一退身に合っているマイペース

尼崎市 軸 丸 勝 巳

川西市 米 原 雪 子

敬老の日に増税の記事も出る

老人が増え敬老も軽くなる

長生きのコツはゆっくり亀の首

ITに取り巻かれてるだけの僕

騙されて咲いた桜がばやいてる

伊丹市 山 崎 君 子

三田市 北 野 哲 男

冷蔵庫満たんにして三連休

おもてなし花が助けるまつり客

栗はぜる音胸にあり亡母の里

今日はデート駅のツバメは旅立ちか

キンモクセイそろそろ匂うとなりから

伊丹市 小 熊 江 美

三田市 久 保 田 千 代

失敗も明日があると気を晴らす

雰囲気が良いから変えぬ美容院

一口のビールにころり気が変わる

人生も四季があるのか秋が来た

親切のつもりで受けた荷が重い

誰からも電話なかった敬老日

雀友がぼろぼろ欠けて囲まれず

街路樹が恋の結末知っている

白骨が落葉の下にある樹海

大木に相合傘が彫ってある

庭のなす拌むが如く収穫す

嫁ぐ娘に泣き笑いする父の愛

道に迷い夕立ちに会う情けなさ

偶然に拾った恋が半世紀

かわいい指折って三歳教えられ

地べたから神様に逢う段昇る

つつかけを履いて出て来るおつき合い

ご高説拝聴出来るのもゆとり

今のとこ行司呼び出し日本人

人の名を忘れ感心しています

冷やかして買った植木がはしゃぐ庭

剪定の枝毎にある自己主張

老木を豊かに染めて柿実る

農に生き余生楽しむ菊づくり

生きたくて好きなお酒も止めている

西宮市 山本義子

待っている返事こなくて月おぼろ

結論はみえているから黙っとく

ああ平和 月が出たから月を見る

アンテナの感度とわたし鈍ってき

テレビ故障すぐ買ひ替える文化人

西宮市 坪井孝一

我が人生幸か不幸かふと思う

見直したバセリの苦味もう嵌る

朝の散歩犬替えてから二往復

ヤキトリの串は今夜も課長刺す

仲間とは嬉しい顔で妻旅行

西宮市 緒方美津子

りんとして生きて金婚菊に酌む

厳格な恩師に先に礼をされ

元将校髭をおとして好々爺

呑み会をいつも役員会という

翔んでばかりで下取りに出されそう

西宮市 井上松煙

旨そうな疑似餌に釣られ懲りもせず

双眼鏡の女へ野球そっちのけ

辛いけど愛しくもある内視鏡

おしゃれして老いの弱みを包んでる

ふところを比べさせない名幹事

西宮市 秋元てる

任せれば頼りない子の眼が光る

草紅葉抱き合う石の道祖神

りんごむく母の手許に集まる眼

時代遅れでもいい好きな暮らし方

眼から落ちたうろこ集めて供養せん

西宮市 菊池トミエ

すすき野の空気さわやか曾爾高原

空気浄む湖北の萩は孤蓬庵

土佐の海波も静かに龍馬建つ

山錦実りの里は祭り笛

糠床の茄子のルリ色しみる朝

西宮市 門谷たず子

一周忌旅に出ようと子が誘う

生流転自由は軽きものならず

いい年をしてもまだ見るショーウインドウ

アングルをどう変えたって年はとし

背伸びばかりしすぎて腰が痛くなる

西宮市 西口いわゑ

うやむやな空気を正す咳ばらい

好きだったひとに似ているから怖い

無表情 裏には深い湖を抱く

朝の水キラキラ花も目も覚ます

一ページもう一ページ夜が更ける

西宮市 亀岡 哲子

プレイオフはない人生をひた走り
残照に炎えて散りたし酔芙蓉
子の部屋に子の空気ありノックする
しあわせの形いろいろ白い雲
母さんの知恵遠い日の主婦の友

西宮市 牧 潤 富喜子

絶え絶えの虫の声にもある異常
熊の悲鳴 人科もやがて轍を踏む
散歩するついでに頼むつま楊枝
残りもの集めて弁当らしきもの
ドクターが測ると血圧高くなる

姫路市 古川 奮 水

並木道猛暑に桜狂い咲き
同期会佳境に入り安来節
二次会へ向かう赤鬼千鳥足
ネクタイが二本に見える二日酔い
北新地真つ直ぐ足が向く二階

兵庫県 大谷 幸次郎

後戻り許さぬという旅哀し
矢印に従うだけの旅にでる
人の子の優劣を言う色めがね
食欲の秋に悲しや熊飢える
墓洗う邪念も洗う水流す

奈良市 天正 千梢

野仏の顔も染めてる彼岸花
兵馬俑中国やはりすごい国
酒五勺許してくれて手を合わし
沈黙の原因甘い汁を吸い
お祭りの影に黒子のあぶら汗

奈良市 米田 恭 昌

どことなく味ある奴で憎めない
三次会野心も萎えた泣き上戸
イチローの謙虚さ学べ朝青龍
東雲機雲の彼方へ消えたきり(東雲氏逝去2句)
あんこ椿の踊り土産に黄泉の旅

生駒市 飛 永 ぶりこ

まさかまさか元気な友が抗癌剤
かやぶきの里が童話を語り出す
銀河ではムンクの叫び包み込む
秋晴に神色冴えるピアノデュオ
試食して御土産増えるバスツアー

香芝市 大内 朝子

熱うなる自分勝手な正義感
今頃になってひとり悔いている
虫けらとちやうのに視線そらされる
恥をかくたびに命の縮こまる
悔しさの泪涌くからまだ元気

檀原市 安土理恵

花の命花は自覚をしていない
足跡を縮尺地図にしておこう
オートロック バリアフリーに護られる
観覧車降りて結論告げました
とりあえず笑ろておきます解せぬこと

大和郡山市 坊農柳弘

借景の夕日に溶ける鳥空港
百態のドラマ演じてきた女神
優柔不断とかく女は泣き上手
ストレスをガブ呑みしてる無礼講
錦秋を彩る画布の筆を選る

奈良県 渡辺富子

鈴の音が行き交う秋の登山道
オレ流を通す男にあるロマン
一戦を覚悟のルージュ血のにおい
リタイアの夫ストレスまき散らす
胸に棲む鬼をやんわり飼いならす

和歌山市 桜井千秀

諦めより憧れやがて背伸びする
予定変更今日は二階の大掃除
一応はお断りする名誉職
終の住処花の砦で飾りたて
ごく稀にあと味のいい渦に遭う

和歌山市 牛尾緑良

働ける明るさで寄る屋台の灯
子の旅を見ている父と母になり
天と地の狭間に生かされる私
もう誉めてもらえぬ母の小さき口
不器用で少し歪な心電図

和歌山市 福本英子

生返事したばつかりに誤解され
さくさくと嵯峨野のロマン踏みつける
古井戸に蛙とメダカ飼うている
眠いからカレーライスを辛くする
家の庭猫には公衆トイレかも

和歌山市 榎原公子

親が耐えてばかりいるから子が外す
金運のピース失くしているパズル
厨房の夫の音は大雑把
大きめのポケット話題ひよいと出る
おばあちゃんの耳学問をあてにする

和歌山市 細川稚代

とりあえず君に知らせることにする
ひとときの幸せでいいモカの香よ
一昼夜台風予報つかれ切り
台風直下気になる人が住んでいる
もう少し粘れば未練ないものを

和歌山市 玉置 当代

和歌山市 武本 碧

読めないがそつと覗いてみるカルテ
明日の命予測できない寿司食べる

スパイスを効かしバランス良く生きる
ライバルへ一步譲った日の余裕

トレードマーク誰にも負けぬ笑い皺
満天の星に姉いる娘いる

鮮やかに纏い心はハングリ
温故知新 門はいつでも開いている

熟れるまで待とうりんごはまだ蒼い

蒼天にいくさを知らぬ鰯雲

和歌山市 山口 三千子

和歌山市 西山 幸

理性ある方がこの世は生きにくい
情に流され逆転劇が待っていた

落書をひとつ残して秋が逝く
従いてくる影もやっぱり老いはじめ

学歴をつけて世間の風知らず

台風を見舞う無口な葉書来る
しょんぼりと隅っこに居る竹人形

さまざまな鼓動聞いている聴診器

空缶が転がる藪を藪として

きょうだいが集いお寺でする法事

食った食った至福の時かばたん荘(古座川町で2句)

和歌山市 古久保 和子

和歌山市 田中 みね

百均の老眼鏡で株価値

朝食も何から食べよ旨おます

スイッチを切つたらただの箱ばかり

親切の域を越えてる御節介

天高しキリンの首にネックレス

たわいない話で柳友と泣き笑い

廃線へ我がふる里を置き去りに

私は巳年そのへんのとこよろしゅうに

椎の実を煎つて二人の秋灯下

親方も都合悪いと知らぬふり

和歌山市 楠 見 章子

和歌山市 宮本 三喜夫

くれるなら一本だけの青いバラ

最近孤独死とかがふえてます

キザな言葉吐いた耳から赤くなり

言い訳は止しなさいよと言いたいね

熟年が寄ると毛染めのヒントなど

政界も落ち着きそうに見えてきた

煌めきがほしくて枕陽に当てる

金メダル個性を生かし手にしてる

レタスさくつサクツ秋のリズムかも

和歌山市 松尾和香

ゆるい籠締めて人生八合目
さわやかに代打神様バット抱く
生活道歩く暮しに一万歩
転々と渡る世界に温い風
蘇る昔むかしのスベアキー

海南市 三宅保州

頑張ったらあかんと言われてる病氣
鉛筆も私も徐々に減ってゆく
大阪へ二時間ほどで行く田舎
タクシーのメーターばかり見て着いた
複製画だから疑うことはない

海南市 谷口義男

核心を外れ雑談ばかり出る
あれこれと妻が保護者になる老後
美しく枯れる以外に欲言わぬ
老斑が出来て長生き出来る貌
ゴミ袋見れば世代が透けて見え

海南市 堂上泰女

赤ちゃんへ歌う私のシューベルト
秋の夜はポール・アンカで立ち上げる
息子への愛が趣味へと走らせる
吠えるほどピエロになってゆく私
一介の働き蜂にある気骨

和歌山県 中後清史

保育所が近所に出来て若返る
横道へ逸れて逃がした男達
野仏のやさしい笑みに諭される
誘われるように小窓の灯が洩れる
あちこちとネジが緩んでくる余生

鳥取市 富山檳榔樹

木枯しに全山落葉恋終る
紅葉散り赤い絨毯添寝する
ボランテア愛の木霊が胸を打つ
自己主張すこし足りないバラの花
叱られた曾孫じじいの膝に来る

鳥取市 有沢せつ子

目覚しを止めてラジオで脳起こす
湯豆腐が一雨ごとに旨くなり
干し物の出し入れ忙し秋の空
無洗米専業主婦に物足りぬ
反対のホームの人を見て飽きず

鳥取市 録沢風花

極楽の季節は早く過ぎてゆく
名月にすすきと団子待ちぼうけ
生きるってハプニングとのいくさです
童心にかえって友と木の実とる
初恋が実って孫はゴールイン

鳥取市 福田 登美

健康の自負に潜んだもの忘れ
病む夫の手中で踊る毬となる
さわやかな友が私の薬箱
味のある言葉ゆっくり咀嚼する
食欲はあるのに心飢えている

鳥取市 美田 旋風

ツクツクボウシ庭で知らせる秋の風
喉元を過ぎれば九条邪魔にする
肩書きが消えても過去に生きる人
忘れない記憶はすぐに思い出す
バランスが崩れてひやり おっとっと

鳥取市 田村 邦昭

カーテンで区切つてしまふ嘘と真
うっかりを笑いに変える術がある
おにぎりの形でわかる母の愛
少年のテルテル坊主晴れになる
どちらかと言うなら妻をたてている

鳥取市 西村 黙光

ひと言へストレス徐々に消えてゆき
孫よりは真面目読んでる漫画本
おしゃべりがとつても好きなペンの胼胝
文学賞夢見て炎える同人誌
ペン先が国境線を塗り潰す

鳥取市 山本 益子

老境の磨く心根終わらない
信じたい男心と秋の空
一万歩の成果に感謝明日がある
どんと来い母さんの手は暖かい
永田町うっかりミス of 言葉浮く

鳥取市 植田 一京

連休へプランばかりが空まわり
川柳のメリット友がたんとでき
自分史を書いて幼き日に戻り
石一つ投げて波紋を確かめる
帰る家あつて放浪重ねとる

鳥取市 夏目 一粹

あちこちの戸を開け風の道さぐる
蟻の列穴まで無事にたどりつけ
柵の棘に触れてるような恋
一斉に木が鳴きだした蟬しぐれ
瘦せこけた猫に非情を垣間見る

鳥取市 永原 昌鼓

メリットがなければ誰も踊るまい
順調に老いて白髪がまた増える
太っ腹の女将ではやる縄のれん
アッハッハッ笑い誤魔化す老いの知恵
薄情な金だ顔見てそっぽ向く

鳥取市 杉本孝男

知恵の輪が解けると急に眠くなる
火葬場の炉にもナンバー刻まれて
受験番号氏神様に見せておく
コスモスと真つ青な空仲好しだ
親の汗知る子はきつとぐれはせぬ

鳥取市 武田帆雀

獅子が傘さして雨天の秋祭
柿の枝幣を残して祭済む
神さまと約束通り松を剪る
満月の雫を浴びて菊開く
共通点合つて熱燗所望する

鳥取市 倉益一瑤

黄昏にあつさり振つた白い旗
大輪が盗める位置に咲いている
メリットはないがまつすぐ歩きます
啄木の手にそっくりなわたしの手
欲張りで風船割れるまで吹いた

鳥取市 徳田ひろこ

辛酸をたくさん舐めて太つ腹
カーナビも起伏に富んだ道が好き
いけずした人にも香華手向けてる
目いっぱい膨らませたいシャボン玉
型破りしてる愉快なポチの家

鳥取市 岸本宏章

関心を持てば何でも面白い
勲章のように生傷抱いている
うっかりと末っ子だけを誉めていた
映像の花火が腹に響かない
偏見のめがねが像を歪ませる

鳥取市 岸本孝子

ころろまで洗つてくれるお湯の宿
しなやかなころろが病寄せつけぬ
簡潔な祝辞だったと喜ばれ
田舎者都会の駅で疲れ果て
一言が過ぎて値打を下けている

鳥取市 加藤茶人

老いを美と見れば小じわにある深み
迷言を名言にする二枚舌
ママの手は魔法料理に菓子ケーキ
死には死を仇討ち出来ぬから死刑
冷や汗か寝汗かあらぬ人を呼び

鳥取市 宮脇道子

老人の日ジタバタしても仲間入り
老いの鬼少し後れて来てくれよ
台風に熊にやられて蜂が刺す
年下の訃報に心臓ドキンドキ
老犬も白内障で身の老いを

鳥取市 中村 金祥

初恋の人は不明がいいのです
大義なき戦の先は不明です
ほどほどに舞って人生面白い
犬猫はメリットなんか考えぬ
ややこしい所信表明三度聞く

鳥取市 山宮 愛恵

愛憎も言葉ひとつで右左
いいご縁きつと誰かに拾われた
人はさまざま濃いめのお茶を入れましょう
手料理も弾む客間の笑い声
民族衣装わたしも少し色っぽい

倉吉市 野口 節子

藪の日に追いつき打ちかける雨が降る
ゴキブリも愛しと思う孤独な夜
産みなはれ育てなさいと太鼓打つ
ばーちゃんがやる気出したらすぐ転ぶ
さらさら星眺めただけの蛍狩り

倉吉市 猪川 由美子

切り換えが下手で一人相撲を取り
物覚え良過ぎ自分の首を締め
大臣が試食でも毒あるかもね
政治屋の営利が民を脅かす
重ね塗りの嘘で結局辞めてゆく

倉吉市 山本 玲子

年々に脳の萎縮がはやくなる
始発バスいつもの席にいつもの客
不意打ちはきつい狭心症になる
一抹の悔いは残るが妥協する
注意力欠けて何やら損をした

倉吉市 最上 和枝

森羅万象遍く受ける陽の光
生花展隅でひっそり姫女宛
手捻りの壺歪でも世界無二
姉妹が揃うと母が生きてくる
世界中異変だらけの空模様

倉吉市 米田 幸子

写真機を持つとポーズを孫がとる
柩の中で葬送曲を聞いている
愛の鞭やつと効果も見えてきた
最後にはやっぱり妻の腕の中
数だけは揃えてみたが雑魚ばかり

倉吉市 松本 よしえ

わけあって刻む年輪ややいびつ
介護保険また上げますという通知
赤ちゃんを抱いてふんわりいい匂い
豪邸でドアの向こうが揉めている
半世紀母を守った桐箆筒

倉吉市 牧野芳光

喉の奥見えそうに鳴く大鴉
生傷が消えることない向こう脛
母さんが食べるおやつを買いに行く
すり傷をつくり大人になっていく
髪抜けただけで人格落ちはせぬ

米子市 林瑞枝

駿馬たちのワルツ始まる霧の奥
おおらかに見る反骨の子の未来
忠霊塔は雨遥かなるハーモニカ
単純に寝てゆつくりと生き延びよ
静脈をときどき通りすぎる影

米子市 野坂なみ

義足とも愛ともなつて赤い羽根
契約の印は攻撃ぐせがある
コンパスの中心点で凜と立つ
出直しに一人の心入れ替えた
經典に極楽地図が載つてない

米子市 澤田千春

少々の損に嘆くな空を見る
にぎり飯食べて大地を踏みしめる
番人のように今でも父の下駄
底ぬけに笑える友よありがとう
河しもに人間くさい杭一つ

米子市 青戸田鶴

二百六十二本の快拳に胸が熱くなる
がむしゃらに生きたと思う私の掌
損は度外視君に尽したい
面白くてあとは哀しい落し穴
その時は黙ってついてゆけばかり

米子市 門脇晶子

古い地図たずねて歩く旅の人
彩褪せた友情の地図塗りなおす
心には残しておこう古い地図
太陽に熟されて柿はうそつかぬ
待合室人の香りの吹きだまり

米子市 木村春枝

カーナビに連れ回されて夕暮れる
四捨五入損と得との綾を織る
不揃いのおにぎりにある温かさ
姉の自負纏れ話に顔利かす
どしゃ降りの雨足眺め小半日

鳥取県 山下節子

七人の中に私もいるらしい
A型の妻がルールを押し付ける
例外という逃げ道もあるルール
三日目は自分の味が欲しくなり
糠床を代々譲り味守る

鳥取県 細田裕花

珍しい料理テレビで食べている
彼岸ですカラスの笑い声がする
毛根に記憶させたいヘアカラー
雑魚だっけいつかビッグになるつもり
骨抜き魚で子ども育ってる

鳥取県 谷口次男

母になる資格はないが子を孕み
驚きだ舞鶴港に忠太郎

このほくを改造しても粗大ゴミ
月末に無言で威す請求書
目にしみる緑 緑が目の保養

鳥取県 林露杖

新しい靴だ歩行の露の路
秋霖の風情も農夫恨めしく
もの忘れすかたん増えて秋深む
食欲のほかの諸欲は小さくなり
長生きが言うほど芽出たいことでなく

鳥取県 鳥羽直市

物忘れ思い出すまで空見てる
こつこつとこころ豊かに年を積む
踊るのが下手で時どき転んでる
次の世へ羽ばたく準備まだできぬ
平均寿命生きて果たせぬ事多い

鳥取県 鳥羽玲子

信じてても信じて貰うむつかしさ
壁一重やすらぎくれる水の音
餅搗き機もちもおどけて搗き上り
乳母車荷物はこの役に生き
留守電に伝言かしこまっている

鳥取県 竹信照彦

雨風の翻弄に耐え秋の花
長雨に遊び心が流される
合併劇終りは選挙へと続く
秋祭り神も台風には勝てぬ
孫の寝る時間で今日をやつと終え

鳥取県 村上信子

串だんごお行儀わるく食べている
いい人と言われインチキなど出来ぬ
城下町昔の風を巨木抱き
反論はしたが握手はしておこう
長生きがしたく欲捨て臍曲げず

鳥取県 近藤春恵

背を向けた彼の行方は探さない
イラク派遣ダメージ受けたのは家族
オレオレのサギにダメージ大きすぎ
医療ミスダメージ深く医者きらい
風紋が風よ吹けよとささやいた

鳥取県 石谷 美恵子

世界一名ほど感心せぬリング
そっくりな画像であまり気に入らぬ
仏滅にゆっくり安く挙式する
煽っても何も出ないと釘をさす
翔べもせぬ羽を広げてみるラスト

鳥取県 蔵本悦子

だんだんと地球無口になって行く
エネルギー夢があるから衰えぬ
粗末には出来ぬ地球が泣いている
たつぷりの愛がほしいと子が叫ぶ
にぎり飯愛が一杯生まれそう

鳥取県 奥谷彩子

笑顔いいからきつとあの人いいんだ
世界平和絵に画いた餅かたくなる
本の山知識の海に溺れてる
紅葉舞い終え腐葉土になる悟り
凸凹でまんがチックな夫婦トリオ

鳥取県 前坂なお美

残さず何でも食べる元気です
残るほど料理は作らないことだ
我が家には我が家のカラーちゃんとおある
土俵際負けてはならぬ恋相撲
湯梨浜町ピンとこないが新町名

鳥取県 土橋睦子

核のない世界を願う蕎麦の花
木犀の香りが誘うかくれんぼ
ボランティア介護の汗を拝まれる
風は秋 焼芋匂う曲り角
大腿に歩いて老いの空威張り

鳥取県 土橋はるお

背の青い魚を食べと言うテレビ
親切な僕野良犬も知っている
昼前になるとお腹がちゃんと減る
善人ぶって砂漠緑化の募金する
結婚は季節問わずにするがよい

鳥取県 吉田孔美子

腹時計猫三匹のお伺い
食べ過ぎて猫も通院おまえもか
ペン止まり猫は不貞寝をしてみよう
最後まで指に止まっている空気
世界平和見届けてから逝こう

鳥取県 太田幸枝

白昼に一升びんの千鳥足
恐妻家妻の手の平泳がされ
子等守る地域が知恵をしぼってる
満月にうかれうっかり遠回り
この家の躰玄関うかがわれ

鳥取県 下田 茂登子

肉親が絡み合ってる葬の席
躓いて他人の痛みをやつと知り
過去の傷浮いて来ました古希の坂
ライバルに負けまいとして脳が裂け
何もかも負けて生きよう独りです

鳥取県 国森 武子

一人居て姑思い出し書いてみる
お姑さんも嫁の時代があつたから
ペチャクチャと姑と話して三十年
三十歳年違つてもよく通じ
姑死んだ年から急にノルマ決め

鳥取県 上田 俊路

台風にみこしも怯む村祭り
風の道測り祭りの幟立て
出来ちゃった婚でよければおめでとぅ
美しい嘘茂つてる休耕地
ドラマのように人質を見る怖さ

鳥取県 乾 喜与志

爺さんが拓いた地域子よ孫よ
父に母に抱かれて抱いて百寿歳
シベリアの氷の中を引きずられ
氷川丸に漸く乗って涙拭く
日本に戻ればやるぞ農の道

鳥取県 山本 正光

人を待つ花回廊は雨静か
誘われて花回廊の丘で逢う
高僧の温もり貰う萬福寺
真心の返事をいつも考える
隕石を見るに七百円かかる

鳥取県 西原 艶子

この空に溜めていたのか雨続き
カーペット炬燵も準備して安堵
家風にも馴れて悠悠猫二匹
早生柿が熟れてあちこち御裾分け
蜜蜂にいたたく甘い山の幸

鳥取県 永井 美津子

真心が隠し味とは知らなんだ
リコール車乗るかえたいが金が無い
竹垣を立て掛けたのは姑さん
遣り繰り上手チラシに母の目が光る
辛さなど吹っ飛んで行く子の寝顔

鳥取県 吉田 弘子

古希の顔暮らしの彩が隠せない
度の合わぬめがね善悪狂わせる
惜しまれる死の適齡期ふと思う
死に際をだぶらせている落椿
幸せな余生ベットとうさぎ小屋

鳥取県 澤 裕子

満月がきれい明かりを全部消す
ふるさとの匂いに出会う無人駅
駅弁も旅のプランに書き添える
一言が決め手恋から愛になる
矢印があっても迷う山の道

鳥取県 平尾 菜美

落ち込んだだけじめ第九で盛り上げる
あの頃のやる気どうした菜っぱ服
普段着を洗いながらもやる気待つ
気まぐれな空へ少年飛翔する
まやかしに揺れることない人の舟

鳥取県 深田 倶久

君が代も日の丸もまた無縁とや
さわさわと公孫樹降る日に訃報つく
閏年台風記録書き替える
里山の秋を街の子もて余す
携帯のかわりにハガキ買いだめる

鳥取県 埴 寛子

子育ての手抜き老骨打ちのめす
打つ手なしシャボン玉とばそ孫といふ
酷使して曲らぬ指が書きたがる
湿布した指と筆架とあきらめと
まだ乗れて食べる幸せ秋日和

鳥取県 盛田 夢路

恙無くページをめくる除夜の鐘
嫁よ来い過疎にたつぶり愛がある
ライバルのミスに内心ほくそ笑む
賽銭をけちりご利益薄くなる
レベル下げ今日の一步が案に出る

鳥取県 福西 茶子

運動会地区の絆を試される
突然に五体動かぬ病くる
神様のイケズか手足動かさない
小走りの次は階段昇ったろ
満月の下でリハビリ ストレッチ

鳥取県 西川 和子

届かぬと解っていても手を伸ばす
通されてうっかり座る主賓席
メモ書きを持ってなんとかが用が足り
五七五、心に響く言い回し
うれしさにうっかり口を滑らせる

鳥取県 佐伯 やえ

おとなりの屋根がなおって安堵する
正しい字書きなさいよと電子辞書
分校の往時をしのお赤萩
平和だな祭り太鼓に栗おこわ
散ってゆく花は昨日を語らない

松江市 三島 崧 丘

約束をしては足枷嵌めている
本棚に僕の宇宙が溢れてる
天を突く巨塔を一步ずつ登る
掌に前世からの深い謎
賑やかな人賑やかに葬られ

松江市 川 本 畔

おむすびを固く握って燃えている
風が押す言わねばならぬことがあり
道草をしながら絆深くする
大切な時間の中へ正座する
悪あがきしてみても秋やがて冬

松江市 銭 山 昌 枝

主に似て無口な犬を飼っている
音も無く命を刻む砂時計
強がついていてもやさしさには負ける
欠点を補い合って来た阿吽
父の忌に父の神話を語り継ぐ

松江市 安 食 友 子

隙間からずうずう弁の温い風
星きらり別れも楽し何てこと
絵空事議員年金どうなった
設計図クイーンの座に憧れる
慢性に心ならずも出だす自棄

松江市 小 川 注 湖

時々寝たふりしたがよいようだ
イチローイチロー拍手拍手の大リーグ
初舞台華やかに聞くバチの音
いい汗をかいたと手紙書いてあり
足の音美人看護師待つベッド

松江市 松 本 知 恵 子

柿の実が熟れ故郷の風が呼ぶ
自然との共生ハーンから学び
加賀潜戸ハーンの影を追いながら
オレオレとたやすく悪のベルが鳴る
笑い転げて花月文珍の芸

松江市 佐 野 木 み え

一つずつ私のうろこ取れてゆく
淋しくて友に電話で活貰う
回り道して出逢ったね金木犀
手のひらに紫式部コロコロと
働いた指の太さを労りぬ

出雲市 竹 治 ち かし

親と距離置いて子のこと孫のこと
生きるのに疲れたと言い飯三度
善人で居ると時々酸欠に
膏薬を貼り合う位置に妻と居る
物差しを宇宙に置いてから謙虚

出雲市 富田 蘭水

一匹のおごりの虫を飼っている
神様も儲け話に扉あけ

文化祭さくの香りが深くする

殺風な事件に慣れてこわくなる

お結びはやはり梅干しなつかしく

出雲市 小玉 満江

秋夜長夢が広がる押花絵

いい事があるよ雲間が切れてきた

お祭りへ母は多忙な小豆飯

出雲にもナイフ男が出た恐さ

カギ針が行方不明の毛糸玉

出雲市 吉岡 きみえ

杖ついた姿仮面はもういらぬ

ひざ小僧さすって痛いのとんでゆけ

風船もわたくしもしほんでゆく運命

今夜はかるく一杯魚買う

成るようになるさ出口はひとつだけ

出雲市 園山 多賀子

私には触らないでね鳳仙花

渋柿も渋いまままで甘くなる

ひそやかな指いぶし銀よく似合う

三代を露わに生きた笑い皺

人生を二者択一の坂登る

出雲市 石倉 芙佐子

まんじゅしゃげ愛の欠片を朱に染めて

運命川素足の女が渡ってる

ずつしりと重い足枷引きずって

夕焼に炎になるう曼珠沙華

絵の中に取り残された女です

出雲市 岸 桂子

これが好きです たとえ偽物だとしても

少し腑に落ちず病院から帰る

梯子から落ちてつつしみ深くなる

遠い戦の幾人が死ぬテレビ見る

許されて許せる事が一つ増え

出雲市 久谷 まこと

いたわると見事な花を見せてくれ

自惚れて視野のせまさに気がつかぬ

傷心をいたわりもせず隙間風

あれ取って以心伝心用足りる

おれおれもかかって来ない独り者

出雲市 小白金 房子

いも掘りへ園児かり出す秋の天

堀川遊覧心も洒落るこたつ船

巧妙な手口は乗らぬ深い罟

畳紙を広げわたしの秋を着る

散骨の海は哀しい波の音

出雲市 城 多喜

生活の匂いが消えてゆく部屋だ
ゆつくりと残り時間を浮遊する
紫をまよえば秋が近くなり
嬉しくて真つ赤に見えてくる夕陽
包帯に愚かな傷を責められる

出雲市 多久和 敬子

隣から回覧板とさんまの香
時々は味付け狂う主婦の椅子
美容院帰りのママを確かめる
深酒をしかる女房に旅みやげ
大根がぐつぐつ煮えて平和な日

出雲市 伊藤 玲子

神様もときどきチョンボなさるらし
いい月だ神のいたわりかもしれぬ
踊りましょドレスに染めた大茜
思いつき泳いでいます君の海
骨見せぬ蛸がいちばん可愛くて

出雲市 小豆澤 歌子

消えぬよう燃やし続ける私の火
真つ直ぐな道に迷っているうさぎ
愚痴を聞くホットココアとレモンパイ
追憶の彼方に咲いた曼珠沙華
友が逝く紙風船の萎む音

出雲市 青山 久子

順調に西へ流れてゆくわたし
悪だくみ忘れましたよお月様
損得を越えたスープが温かい
くぐつても潜つても湧く鯛雲
軽やかな音でひとりの暮しする

出雲市 岡 あきら

トナリから金木犀もご挨拶
ふれあいと名づけて茶会運動会
傘になつている気のようにださせておく
先回りしては火種を消しておく
追いつかれ越されるようでジュニア囲碁

島根県 伊藤 寿美

やさしいね哀しみ知った人だろう
ドレスアップもう傷口は癒えたから
大笑いしたい独りの秋深む
亡夫の居ぬ秋欠と書くクラス会
幸せな友の愚痴聞く鵲が鳴く

島根県 多々納 テル子

七十坂いくつもあつた曲り角
広告をいろいろ工夫して使う
脳味噌に新しい風補充する
髪の毛も爪もよく伸びまだ元氣
正直な鏡と老いの身繕い

島根県 榊原秀子

虫の音がページ繰る手を休ませる
不覚です足もち上げたはずなのに
確実に歳を取ったと思う耳
間引き菜のみどりいそいそ皿に盛る
金木犀散りしく道をそつとぬけ

島根県 持田多輝子

子の表情時代のズレを重く知る
国境を越えたロマンに拍手する
遣伝子に大きな疑問湧いてくる
ストレスもそれぞれ違う割烹着
意志薄弱仮面つけたりはずしたり

島根県 毛利幸

時として風が私の向き変える
昨今は悪が溢れて零れ出す
即席の料理が並ぶ核家族
独り身になって料理がうまくなる
どうしても悪になれない人の文

島根県 森茂美

女房が遺していったインスリン
人なつっこい蜻蛉が指に来てくれる
夕映えの部屋にとどいた虫の声
アテネから戦果をさげていま戻る
方言の味なつかしく噛んで呑む

岡山県 小林妻子

宿命は自然相手の農に生き
秋茄子の味台風にさらわれる
白菜も大根も爆弾テロに遭う
熊に遭うとても携帯間に合わぬ
写経する僕に静かな無の刻よ

岡山県 山本玉恵

泣き止んだ女くると背をむけて
飯の世の命大事と泣き笑い
世渡りの下手さ笑顔で切り抜けて
喜怒哀楽が沁み込んでいる九十九髪
どうにかなるさ あしたの風を待ちましよう

岡山県 福岡智恵子

怪我をして初めて知った高医療
参画の妻の陣地が広くなり
晩秋の年輪の皺いとおしむ
或いはと目尻伸ばしのパックする
何気なく郷愁そそる鱗雲

岡山県 国米きくゑ

爽やかな秋夕やけを見てひとり
月光る詩人の顔で眺めてる
ひらかなの恋生まれそうコスモス路
星光る還らぬ人の瞳のように
神様が居ると信じる嬉しい日

岡山県 福原悦子

隅に居る主張も数のうちなんだ
気配りを八方にする妻が居る
月刊誌悪い教えが載っている
欲ばりの私は神に横を向く
負けて勝つコップ酒の淋しさよ

岡山市 井上柳五郎

三人目曾孫も男児呱呱の声
落ち着けと自戒する手が震えてる
逃れ得ぬ老いへ楽しむすべ探す
大仕事したよう医者のはしご終え
無位無冠わが部屋だけがわが城よ

倉敷市 井上富子

CTもホオと驚く石頭
酸いも甘いもみんな知ってる喉仏
一方通行ベツトに話す今日の憂さ
次々と扉を開く好奇心
不況風一枚岩になる家族

倉敷市 小野克枝

街灯よわらうな精一つぱいのペダル
辛いとき苦しいときの数え唄
冬近し辛くはないか妊み虫
鈍行の旅ささやかな風に酔い
生きて来た道を誇れる足の裏

広島市 森田文

越えるべきハードルひとつ思案中
待合室善のサイクルいい話
献体を願うわたしは魚並み
冗談も過ぎると医師に言えもせず
誰からとなく月の砂漠をうたう月光

竹原市 森井菁居

今日の事今日片づけて恙無し
間食を戒め無事に秋に入る
威張るほど値打ち下げてるとも知らず
嫌ならばとことんノーで押すが良し
ライバルに花を持たせて味方とす

竹原市 正畑半覚

彼岸花女の炎信じます
木曾五木 木一本に首ひとつ
いい話すれば私語など逃げていく
分骨はせぬ故郷の土になる
松枯れの松立っているど根性

竹原市 岩本笑子

うまく言えないけど父は父だった(父死す)
倒れて五年生きててくれてありがとう
エンピツをかじって父を思い出す
夕焼けが赤い私にだけ赤い
百花繚乱別れはいつも突然で

竹原市 時 広 一 路

石何も言わずに水の声を聞く
どれほどの旅かを皺が知る紙幣
色褪せた日の丸だけと捨て切れぬ
宇宙より私は雲の旅が良い
のんびりと待つ極楽の招待状

竹原市 石 原 淑 子

目薬をさして心に問いなおす
震度四 蟻螂の玉子知らんぶり
欠伸して気づけば終点もう間近
新月だ何も怖がることはない
挽ぎたての青いレモンが薫りたつ

広島県 藤 解 静 風

一周忌まだ微笑んでいる遺影
折りたたみできない妻の脚の老い
絶対に妻の血をひく孫曾孫
ひと回り小さくなって妻かえる
わたしにはわたしのリズム笛を吹く

宇部市 平 田 実 男

歩の出来で決まる将棋も人生も
肩書きは会長 小使いしています
老いて子に従い楯山行きへ乗る
極楽も地獄も経験した強味
先生が一番若いクラス会

美祿市 安平次 弘 道

割り切ってはみたが気になるバラの棘
決断を迫れば転機やって来た
いつの日か女は嘘にけつまずき
生き甲斐があるから空気でうまい
ブライドがあつて貧しさ口にせず

熊本県 永 田 俊 子

時には聞えぬふりして距離保つ
いつからか私の釘ゆるみ出し
学歴詐称なぜか憎めぬ男みち
保険屋が相手にしない歳になり
ライバル同士老いて垣根をとり払い

熊本県 高 野 宵 草

まっすぐに脳を叩いた歯の痛み
御隠居になつても師走気忙しい
処世術他人の善意も利用して
枝垂れ柳教えてくれた台風の向き
庭刈れば完璧主義の妻指図

唐津市 久 保 正 剣

短篇で終った恋の土用波
ふり向けば俺の過去にもあつた虹
魂胆の匂うはがきは読み捨てる
金持ちの美人にお辞儀してしまう
口ポットがお礼に失業者を作る

唐津市 市丸晴翠

子の躰パパの処方が甘すぎる
退職を機にマイホーム檜風呂
倒木に宿る新芽に見た輪廻
見たことを信じ噂は聞き流す
国産の力士育てる棧敷席

唐津市 山口高明

バンドラの箱を開けたな首相どの
沙魚釣りに精出す親父十二月
公園の朝は太極拳で明け
罪深い頭を垂れる日曜日
農曆祖父のあたまの中にあり

唐津市 宗水笑

親馬鹿も序の口ですと照れている
当選の祝いの席に反対派
威し銃鳥より人に効いている
招待に仁義の祝儀上中下
つまずいた莫産の高さは二・三ミリ

唐津市 井上勝視

逆縁に愚痴言いながら喪に服す
呆けまいとしがみついている五七五
句馴染みに喝を貰っている塔誌
五七五指折りながら逝けそうだ
投函の後でひらめくいい見付け

唐津市 樋口輝夫

白内障札束だけは良く見える
一目惚れマネキンの服欲しがる娘
目覚ましがもう鳴るだると覚めて待ち
お化粧が上手いと言われ腹が立ち
試供品だけで母ちゃんめかし込み

東かがわ市 原賢

躰いた石は大事な道しるべ
それ以上言うなと妻の咳払い
見栄を張る男の背が小さく見え
月見酒花見と一味違う酒
職退いて少なくなった敵の数

東かがわ市 川崎ひかり

人生の勝者長生き出来た人
初物をご賞味なさい仏様
忠告は後でじっくり効いてくる
口下手がボソリ効果のあるお世辞
一面に野球のストが載る平和

東かがわ市 池内かおり

ヒヨドリが教えてくれた柿の旬
頭まっ白暗証番号出てこない
地球儀の何と小さい日本国
ケイタイを操るとんでもない男
散歩から帰ると空糞去んだ後

東かがわ市 神保坊太郎

備忘帳持つてゐることも忘れてる

魂が溶けだしそうな油照り

天国への道遠回りすることに

高所恐怖でとても天国へは行けぬ

卒寿には自分にバンザイしてやろう

東かがわ市 伊勢八重子

しなやかに生きる覚悟の地図を書く

追伸に無理はするなと子の手紙

遍路笠辿る道にもこぼれ萩

水墨の世界に浸る雨上り

頼る気は無いけど子等の居る安堵

東かがわ市 清川玲子

仏より先に味見をする団子

毎日がタレント並みのメダリスト

火山灰降るふるさとの母思う

お茶席で競い合つて訪問着

新米が郷里の匂いも連れて着き

松山市 高橋宏臣

花と蝶たがいに褒めてゐる素振り

幸せの形で欠伸移し合う

清濁を飲む善人の顔をして

運命線信じ明日の米を研ぐ

叱る気で呼べば笑顔で振り向かれ

松山市 古手川 光

氣を付けの形で伸びる杉木立

やんわりと諭す言葉に背けない

やけくそのようにアサリが水を吐き

栗あけび柘榴話が合いそうな

坪庭の万両鳥の贈り物

松山市 宮尾みのり

にらんだら倍もにらんで返された

立食パーティー何だか損をしたような

いい人と勘違いしたさがり眉

名水の名でコーヒの値が上がる

改憲論孫とどこかへ逃げようか

西予市 黒田茂代

まだ若い味です十月のみかん

とぐろ巻いた蛇には油断せぬことだ

はらはらと民話の森に落葉降る

少女羽化秘密の森が深くなる

留守電に話してみても精がない

愛媛県 中居善信

腹八分きれいな事だよ力こぶ

諦めの悪いおとこよついで本音

深追いはしないこの頃億劫で

美しい人へ騒がぬ血になった

ガム噛んでいると闘士が見えてこぬ

高知市 小川 てるみ

満月がとつても好きな影法師
恋に恋ひとり芝居の幕が開く
骨粗鬆天地無用と貼って置く
妻の座といえど軽い日重たい日
いそいそと逸る心が隠せない

高知市 北川 竹 萌

九十路をこつこつ励む楽しゅうに
古里菜園止めて身近かにミニ菜園
落穂芽の稲を見つけてミニ田植え
膝小僧日毎欲しがるはり葉
ありのまま見せて私は身がかるい

高知県 赤川 菊野

眠れない夜は太宰と夜を明かす
無人駅小旗をふった少女の日
夢いっぱいケースに詰めて旅に出る
針千本飲んで真相明かせない
近鉄の最後涙のホームラン

高知県 小澤 幸泉

雑草が伸びたそのまま秋の宵
反骨に生きたやさしいアスマスク
妻の顔私に何か言いたそう
汗かきで恥かき人生まだ続く
満ちたりた部屋に孤独がすんでいる

水煙抄

(つづき)

静岡市 中西 雅

卒寿の手青すじたてておこつてる
手料理の目でたべ耳で味を知る
笹舟に二人で乗った夢の幸
凧あがれば彼の便りを持ちかえれ

横浜市 布山 嘉信

スキー場滑りは任せ雪見酒
声援がメダルくれたと余裕みせ
こぶ消えてげんこの訳が忘れられ
ほのほのと足湯が咲かず旅語り

横浜市 石原 三郎

脳梗塞我もとうとう取りつかれ
よちよちと歩くその影我が身とは
酒禁止とは此の世に生きる甲斐がない
入院で婦唱夫随に変わりつつ

東京都 井上 つよし

鉛筆で知恵のチューブを絞り出し
茶髪より紫髪の熟女胸を張り
急ぎのバスに信号灯の多いこと
難問がすらりと解けた青い空

白選集

橋 高 薫 風

鳥になり魚になって旅に出ん
クリスマス今日の芝居はまずかった
夜なべするペン一本と猪口一つ
ジーンズを履かぬ世代で終るらし
昼寝してコトンと極楽へ墜ちる

八 木 千 代

山のあなたは山のあなたのまま暮れる
ふっと華やいで枯野も黄昏れる
誰が忘れたのか枯野に万華鏡
闇に吸われて森も眠たくなってくる
つつがなく賞味期限を終えて候

八 十 田 洞 庵

嵯峨探るぐつと若めの赤を着る
涅槃図のうしろの闇に亡母も座す
秋匂う木曽路のみやげ竹トンボ
道昏れて残像ひとり家路つく
点と線結べば破魔矢僕の胸

両 川 洋 々

野仏も私も欲は捨てている
拉致の目に雲も祖国を指して飛ぶ
ライバルよ骨はおいらが拾つたる
踊り出ず核よ昼寝をしておくれ
新人類おまえは宇宙人ですか

阿 萬 萬 的

負けず嫌いな頑固のそらを利用され
軽い嘘ばれそうしきりに乾く喉
言い勝って帰る孤独な夜の道
自信過剰つい体調を考えず
ロス多い自分と気付く秋の冷え

石 川 侃 流 洞

会社ではてきばきやって粗大ゴミ
葬列の一番うしろに蜚族
満天の星へ決意の定時制
植山にも桜吹雪はあるだろう
暴風雨の中光って見える父がいる

板尾 岳人

母の恋父を愛していたかしこ
前略へ続く紅葉へ筆の恋
わたくしに愛をくださる北の女
もう少し待ってください秋の紅
今逢えば悲しくなってくる晩秋

奥田 みつ子

欠点もまた良し秋の陽にかざす
息の合う仲間にもらう花の種
崖つぶち歩き続けた背なの汗
薬みな諸刃の剣恋もまた
仮の世の散歩まだまだ楽しくて

河井 庸佑

根気よく待った甲斐あり風変わる
欲しかった暇があり過ぎて困る
近道をして悔やんでる工事中
耳学問役に立つてる話の輪
失敗へ思慮の浅さに自己嫌悪

川島 諷云児

香水は男迷わす媚薬かも
信念を通すおやじの背に学ぶ
いなければ淋しいものに妻と金
賞味期限とうに切れても妻は妻
人情のカケラも落ちてない師走

木村 あきら

反骨の弓はとつても折れ易い
庭園に来る小鳥に餌を撒いておく
曾孫守る使い古しの子守唄
北風に笑顔崩さぬ六地藏
木守柿揺れて大和の秋昏れる

工藤 吟笑

在りし日の栄華を語る城下町
遮断機が上がると碧い空がある
白寿へと高いハードル越えてゆく(94翁)
北風にバアさんの墓寒かろう
祖母さんの鼻がお高い塩の味

黒川 紫香

夢でなく最高齢の賞を受く(尼崎市長より)
退院の日の看護師は皆笑顔
旨い物食べに皆から誘われる
家中を賑やかにして退院す
自分でも生き生き鏡見てる朝

小西 雄々

限りある命へ走る十二月
着膨れを知らぬ天女は風に乗る
月愛でて背なの刺客に気がつかぬ
まん丸い月へ私も徳を積む
節節が痛み馬齢を意識する

おことばに甘えて今日も酔いつぶれ

良縁といわれるほどの縁じゃない

強情で頑固な太い眉

商売は暇でも腹はへつてくる

皿洗う音にも機嫌匂わせる

じよんがらの里で靡いていく稲穂

人柄に触れると泣けてくる民話

教え子のりんご一番光ってる

人間が恋しくなつて来た螢

赤トンボ唄うと澄んでくる瞳

いい風に乗ってきました山笠囃子

ひと月もすると本物の山笠囃子

孫が多いと三月倒しの山笠囃子

十米も離れちゃいない山笠囃子

山笠囃子僕が這入ると邪間になる

ふるさととは戦争前の大阪市

父老いて優しくなつてきた娘

人の顔みんな違つてみんなよし

人間は脆いともしぶといとも思う

焦つたらあかんぼちぼちやるとする

小林 由多香

斉藤 嘉

田口 虹汀

田中正坊

自分への褒美が好きなのビール

自分史に無理を重ねた一頁

長生きはしたしポツクリと逝きたし

出不精になつたと思うスニーカー

此の店の蛸ならいけるやわらか煮

老いの背をやさしい風が押ししてゆく

まだ若い気分が段差蹴躓く

肌爛のことならわかる老いの指

折角の法話へ隅の無駄話

救う神あり満足な箸をとる

親馬鹿に効くよな葉ないですか

つまずいたのは人のせい石のせい

姑と嫁ばかりわたしに味方なし

柔らかな笑顔で詐欺が扉をたたく

城のある町でお祭り好きになる

真心が仏の前に跪く

悪いことしようか月が美しい

飯食つた数には負けるお友だち

新米を炊いて勤労感謝祭

苦しさも楽しさも無駄にはしない

玉置 重人

恒松 町紅

遠山 可住

土橋 螢

仁部四郎

白面のやからを国が騙るとは
投票所白紙委任はせぬつもり
なぜ白は狐も馬も神の色
真つ白が自慢の母の保険証
同期会白髪のをけを自慢する

野村太茂津

桜咲く頃は卒寿の血が滾る
パソコンに昔の浮気暴かれて
苛立っているナと響く妻の三味
素晴らしい老熟聴く耳持っている
寄つてたかつて優し仲間の手に乗ね

波多野五楽庵

襟足に哀しい過去をにじませる
忘れたろうか北上の音風の音
一冊の文庫をめくる冬籠り
雪 雪 雪 愛の痛みの重さかな
別れよう心の傷が疼くから

藤村 女

キッチンに母のお鍋が光つてる
わびしさはひとりの鍋に残るもの
衣替え忘れた紐を解いてみる
美しい月に気づいた一人旅
憧憬のひとすんなりと老いたもう

芳地狸村

赤屋根にハイビスカスを誇る町(西表島)
美しい色とりどりのサンゴ礁(石垣島)
目を引いた極彩色の屋根かざり(石垣島)
マルクスの古城生きている文化村(宮古島)
赤花のデイゴ並木が素晴らしい(宮古島)

宮口笛生

丹精の菊一斉に咲いてくる
台風へ菊鉢三十移動する
丹精の甲斐あり家の菊花展
一本の木犀におう庭がある
缶ビール一本空けて欵仕事

森下愛論

合掌の指から悲哀抜けてゆく
ワラ半紙念仏を書く秋深い
青春のネガ焼き付けて一休み
黙々と寝たり起きたり日をこなし
風花散華天下枯野化黄泉路

河内天笑

レタスに続けと野菜みな上がり
半額をたらふく食べるから太り
孫たちに見下ろされる日遠からず
その昔遊んだ森へ妻を連れ
無駄をするのも大切な道のりだ

水煙抄

奥田みつ子選

東京都 小川 賀世子

秋風に心の彩を覗かれる

気紛れな女心も秋の所為

天高く私を肥やす本を選ぶ

向上心まだあり明日へ靴むける

取りあえず並んでいます好奇心

あなたとの明日の彩を読んでいる

大阪市 小谷 集一

肩の凝る本から逃げて日向ぼこ

名無し草誰に遠慮もせずに咲く

手の平に乗る幸せが丁度よい

マンションで見る夕焼けは街に落ち

仏壇へ歯を抜いたこと詫びておく

あせらずに歩こう妻の手を引いて

尼崎市 河津 正治

誘われてみたいきれいな天の川

打ち水にしばし忘れた陽のほてり

追伸の後の余白が気にかかる

鈍くなる勘へ時どき焼きを入れ

百花繚乱やはり魔女ですバラの花

ほんとうは噂であつて欲しかった

岐阜市 平野 あずま

秋晴れや厨に妻の歌若し

人間の弱み知ってるチワワの眼

晩学のペンにインキを継ぎ足して

五線符が時々消える父の唄

老いらくの恋にしっくり木のベンチ

人もゴミも世界遺産の地に溢れ

八尾市 脇 俊子

頑張ります言つた言葉に背を押され

はんなりの言葉が好きなら夫婦箸

沸沸と血潮は燃える夢の中

どんぐりの中にもひとつエリートが

小悪魔が心の壁をノックする

北九州市 岡田 幸生

横浜市 川島 良子

買うよりも高い修理にだす遺品

英語よりきれいな日本語を学ぶ

十指みな触れると弾むキーボード

新しい生命が宿る一周忌

肩書きが消えてよくなる胃の調子

外見と中味そぐわぬ歳となり

里がえり母のはやきも聞くつもり

涸れるまで泣いたらあとは笑うだけ

どنگりの輪にもいつしかつく序列

親になる息子の顔が引き締まる

奈良市 乾 春雄

愛知県 河合 ますみ

都市砂漠ふる里捨てた人の群れ

雨しとど言葉の森にふみ迷う

よろこびの水引かける母の指

ジョーカーはポケットのまま帰る道

産声が年金背負うデカイ声

はえば立てやがては親も越えて行け

札束に正義が負けた裏ばなし

家までの歩幅が心整理する

家計簿が衝動買いを叱ってる

行きなれた場所も一人でもまた迷い

今治市 塩路 よしみ

愛媛県 花岡 順子

渦の数度乗り越え来た無冠

沸点はどうに越えてる有頂天

誰一人踊ってくれぬ笛を吹く

使わない幸せがある非常口

弾みすぎ毬は明日を模索する

とっておきの眺め見せたい人が居る

そして秋ひとりに似合う彩がない

秋の色捨ててすつくと冬木立

自我捨てて空の美学に酔うゆとり

頑張って生きるしかなし二十四時

高知県 桑名 孝雄

池田市 多田 契子

回覧板じしん地震と言うてくる

名月に地球の様子問うてみる

築百年どうせ我が家はべっしゅんこ

影一つ壁に映して耐えてゆく

耐震士きびしいことを言うて去に

神様と童話住んでる森の中

がらんどうの部屋でさあ来い瘦せ我慢

韓国の森はロマンがあるらしい

夢つなく孫へ阿吽のロングパス

誕生日古稀の今年は静かです

堺市奥 時雄

忘れ物手品のように妻は出し
顔のない闇から届くEメール
負けたのは神のご意思としておこ
横綱も負ける時には軽く見え
台風も神風だったことがある

鳥取市 山岡 紀子

カクテルを味方に甘い夢を見る
うれしいなあ夕焼け雲も笑ってる
働ける幸せ今日も握り飯
ライバルが泣いた私も泣いている
コスモスが休耕田でいばってる

府中市 馬場 利子

残り花夕陽にゆるり目を閉じる
鉄塔もいつしか冬の絵に染まる
空気水こんなに旨い母の里
朱を足せば余白の画布がすばらしい
傷いえて仲間がほしい鶴を折る

大阪市 升成 好

気いつけや母がやさしい声で言う
マネキンの服が半年先を行く
礼節の国が神話になって来た
すぐ顔に出る欠点へ深呼吸
短所にも長所にもなる一本気

神戸市 両川 無限

お湯割りで語る男の勝ち戦
も一人の僕がおこっているけじめ
けとばしたチャンスは二度と戻らない
前よりも大きくなって返り咲く
真実をさがして風が舞っている

三田市 堀 正和

貸し借りはないボランテニアしています
よく出来る子供の親はよく喋り
勲章が二つ三つある向う脛
いざとなりや白旗あげる覚悟ある
何もない家だがちゃんと戸は締める

神戸市 山田 婦美子

その場から消えたい事も二度三度
忍耐と我慢がくれた生きる知恵
争いの真っ只中で石になる
満月が何処にも付いてくる不思議
夫の息聞いて安堵の胸をなで

大阪市 三浦 千津子

眼差しのやさしさ溢れ聞き上手
アルバムの昔へ心遊ばせる
疑心暗鬼ゆつくり逃がす秋の天
歳月がふんわり頑固丸くさせ
甘えてはならぬと自分変えてゆく

シドニー 坂上 のり子

おにぎりのうまさ英語の子も覚え
玄関の狂騒 あれは孫たちだ
もらうより払う金ある運の良さ
ウォーキング時計がマダと背を押す
信仰が国の形を創るらし

シドニー 三谷 たん吉

健康の秘訣は医者をあてにせず
ガッツさえあれば無用だ医者くすり
看護師がなんと不敵な面構え
丸い月いつもひとりでさびしそう
満月よたまには子連れで出て来いよ

メルボルン 藤原 ポン吉

この国の広さがしみる一人旅
ミススープなんだか薄い気がしちゃう
くじ運が悪いとほやく占い師
楽天にライブ楽しむプロ野球
腐れ縁うなずく妻にほつとする

高知市 伊野部 和江

イチローに努力のすごさ教えられ
マイナーな発想だけは友とせず
無農薬不揃いばかりの贅沢
災難のように聞いている老いの愚痴
町起こし大河ドラマに便乗し

今治市 渡邊 伊津志

能面の下に必死な芸の汗
腕と足組んで才女はまくしたて
耳打ちをされてる方の目が動き
健康に良いので今日も微笑する
目を入れてから代議士は眠くなり

今治市 野村 清美

世渡りが下手で誤解の渦の中
ふっきて初心にかえる髪カット
うす紙の剥れるように傷が癒え
海も凪ぎしまなみ渡る車椅子
急がねばすとんと秋の陽が落ちる

宇部市 高山 清子

若き日のとときめき今もある傘寿
失意の日すがり泣きたい夫遺影
人の振り見て見ぬ振りの身だしなみ
一言の言わずもがなに悔い残り
ばら色に暈してみても過去は過去

倉敷市 撰 喜子

窓際の風に送られ職を退く
親の期待負うランドセル肩をずれ
職ひいて公園デビュー孫つれて
能舞台裾気にすれば手が泳ぐ
胸の奥しまった花火しゃべり出す

松江市 山根邦代

健康に生まれ感謝の日を暮らす
秋風がプラス志向に乗せてくれ
まだ夢のひとつを今も追いつづけ
こわれそう弱い心にむちを打つ
人生に無駄な事など何もない

島根県 菅田 かつ子

コスモスを抱いていきいき野のすずき
風よけの背中はとても温かい
お節介性分だから許されよ
ウインクをされて居たのは横の人
おしゃべりが無口になると気にかかる

島根県 武島 ちよえ

正座して相手の出方待つて居り
冗談とばかり思っていた本音
世の移り親の意見もままならず
がらくたの中で思わぬ拾い物
歳取らぬ服を今年も出して着る

鳥取市 山口 千代子

最高のエキスは家族いい笑顔
昔と違い今の政治家金満家
いつまでも欲と古着が捨て切れず
お月さま誰に話そうこの憂さを
昨日まで幸せ家族今日の事故

鳥取市 森 美智代

雲見ても詩人になれた頃少女
嘘つかぬ友達をまた怒らせた
足腰は弱いが元気な口という
今夜だけは酒が欲しい泣きたいな
良心の呵責を抱いたままの秋

倉吉市 酒井 芙美子

初心など忘れてしまいのふうぞう
おふくろに言われ素直になる心
禁煙で煙に巻かれず平和です
ポケットに大きな夢がはじけそう
大風呂敷広げたたむの困つてる

鳥取県 竹森 富久江

インフレもデフレも夢のある暮らし
改心の飛躍にかぎらないエール
旅人が憩うて民宿の灯り
民謡というふる里の母性愛
やがて来るラストに柿の無表情

和歌山市 柏原 夕 胡

したたかな顔で咲いてる芥子の花
角取れてわたしに還る四コマ目
凧たくてハープの森に紛れ込む
恋ひとつ知らずに愛は語れない
まだ燃えるものあり紅を引き直す

和歌山市 土屋 起世子

気に入って月が私についてくる
愚痴ばかり聞かして母は元気です
泣きに行くやつぱり母の膝がいい
天職があつてよかつた達者です
歩かねばこのトンネルは抜けられぬ

和歌山市 根田 よしこ

寝付かれず起きてすわると風の声
趣味があり友もあるのに淋しい日
顔しかめ愚痴こぼすのも生きる術
お姑さんご免ね今日はちよつとウツ
春遠い何故か根付かぬ沈丁花

和歌山県 辻内 次根

屋根のあることがうれしい雨の音
封を切る舌が夢みているワイン
コーヒーを飲むとやる気が湧いてくる
キリギリス習慣病に狙われる
無になろうと空になろうと齒科の椅子

和歌山市 喜田 准一

踏み出した一步に湧いて来る気力
引くことをやつと覚えた処世術
ムツとした顔だ反論あるらしい
存在を示すつもりで咳ひとつ
目の届く範囲で夫泳がせる

和歌山県 森下 順子

苦労したらしい忍耐力がある
経験がいざというときものをいう
偉い人だったんだなとお葬式
酷暑よく耐えて並んだ菊の鉢
一合の酒で紛れるほどのうつ

和歌山県 村中 悦男

今日も雨焦りを抱いて農休む
日が沈む柿の赤さを倍にして
待つ雨はこないで今日も雨が降る
日々小事大切にして生きている
長風呂に妻の一声確かめる

奈良県 江波 正純

採れたてが素顔で並ぶ道の駅
ふと洩れた言葉に仕事担がされ
老朽化生きるテンポを遅くする
大阪の素顔に出会う新世界
フリーター冬が気になるキリギリス

神戸市 田中 章子

言いたいと言えぬこと秘め米をとぐ
金平糖食べるに惜しい造形だ
わが庭にヒマラヤの花咲きました
近頃は天日に干したおむつ見ず
食洗器あつて晩酌すすむ夜

相生市 村木信子

究極の旨さ井戸水嗜んで飲む

一蓮托生ケアされる身の幸に酔う

断念をプラス思考で呖かすバラ

前向きに生きる鉛筆太い芯

飢えた日は影法師まで寂寞と

伊丹市 延寿庵 野鶴

しゃぼん玉曾孫の夢を乗せて飛び

ピリオドを打って断ち切る腐れ縁

油断してころんだ石が笑つてる

耐え抜いた父の根性背に学ぶ

警策がこころの油断衝いてくる

三田市 石原歳子

稲の花来年こそは確とみる

近頃は煮物が増えた老いの膳

田園に暮らして他所の米を買う

日焼け止め塗って延々立ち話

不器用な包みに愛が隠れてる

兵庫県 安達 厚

これでいい平凡でいいここがいい

喜寿傘寿生きて仏となる節目

お日様と時差出勤の夏の畑

ご先祖の田畑守れぬ親不孝

子を守る九条国を守りかね

大阪市 井丸昌紀

親父逝くまで参ったと言わぬ顔

もう二十日いやまだ二十日 十二月

転んだ子母を見るなり泣き出した

夕されば水も我慢し待つビール

コップ酒味方じわじわ引いてゆく

大阪市 伏見雅明

長短所ほど良く持って並の人

しんみりとなって慌てて話題変え

仕事より遊びが好きでまだ独り

雨風にいつもニコニコ地藏さん

ほめ言葉また聞きたくて花咲かす

和泉市 横山捷也

二次会で崩れてしまいそうな意志

継ぐ意志の無い田畑が豊作だ

三面の隅に見つけた小さき善

いい汗をかいて大根良く育つ

踏みこんでならぬ一本線を引く

泉佐野市 稲葉 洋

胸元にちさい秋あり赤い羽根

気まぐれな俺を皮肉る秋の空

北風よそれだけでなくも過疎の里

耳遠くなって阿吽の息が冴え

駄目押すな吾が一番知る老化

河内長野市 大西文次

平屋建て飛び下りなんて出来ません

雑草の名をイチローと変えて見る

会長になるにはちよつと品がない

間違えてばあさん山へ洗濯に

子守歌歌えば赤子目を覚ます

岸和田市 森元 ふみよ

微笑んで見ていてくれる人の居る

これからも真つ直ぐ歩む老いの坂

呆け防止右脳左脳を叱咤して

亡母より宝の手紙セピア色

共に生き交わり深い友と老い

岸和田市 坂口英雄

軽い嘘大きくなって飛んで行く

知るよりも忘れる方が多い老い

妻の字が毒に見えるのと老眼鏡

思いきり男に戻る秋祭り

そんな顔すると言っている鏡

堺市 大久保伸子

自分史をおりこんでいる顔の相

生きやすくうけて流すか忘れるか

秋の空ふつと会いたい人がいる

本番になれば笑顔の出るゲスト

点滴がなおるなおると落ちてくる

堺市 羽田野洋介

派手かしらお出かけ前のひとり言

真心を後ろ姿にただよわせ

取り囲む恩師の顔に遠い日々

不意の客いつもと違う顔で会う

知恵の輪がそつと教えた不器用さ

吹田市 二宮栄子

取り越し苦労この性格が直らない

幼少がくるくるめぐる里帰り

古稀の手が握り合つてくるクラス会

見ないふり聞かぬふりして丸く住む

七回忌だんだんお墓遠くなる

高槻市 佐甲昭二

読み切れぬ妻の放つた変化球

たぐつても撚りを戻せぬ遠い仲

自分史に塗りつぶしたい傷いくつ

一流にわが身の丈を知らされる

舌先が時に狂つて人を切る

寝屋川市 岡本勲

お世話した男の泥をかぶるはめ

帰らぬと決めたふる里月あかり

ちくはぐな歩幅結構仲がいい

ほどほどに見えて安心老いめがね

飽食の海で少年溺れそう

藤井寺市 若松雅枝

卒生きまだ夢を追う父の意気

弱点を庇う化粧を忘れずに

漫画より好きな詩集を読むわたし

ダイエツト出来そうにない秋実る

ラストから抜く楽しみを知っている

藤井寺市 俣野登志子

いくつもの海山越えてまた二人

上手い嘘凡人だから騙される

騒ぐより少し様子をみていませよ

お帰りを待ってた頃に戻りたい

孫あやす時の夫は別人か

羽曳野市 福田悦子

晩秋の絵にはミレーの影がある

保証ない明日の命に掛けて見る

叱る人ないから自由持て余し

もう一度帰れる日なら亡母がいた

信じたくない占いが気にかかる

羽曳野市 森下一知

遠回り覚悟で拳振り上げる

町村合併川の流れは変らない

あつてはならぬ事が度たび起きている

店じまい朽ちる振りしてよみがえる

減反を詫びて先祖の墓洗う

八尾市 松葉君江

脱線の好きな悪友おもしろい

逆境も挫折もみんな身のこやし

足るを知る母の背中を見て育つ

思い切り泣いて魂浄化する

母を見る妻に一生菌が立たぬ

八尾市 西川義明

写経する時は素顔の私です

噂には周りがすぐに色めがね

頼みごといつもの嘘をまたさげ

忘れたい人が今でも胸に棲む

楽しんだ後でバランスとる財布

八尾市 寺川はじむ

腕白でいいと言いつつ探す塾

サングラス取った素顔はいい男

エリートの子ラベル背負って行く孤独

心地よいお世辞に込めてある打算

ダイエツト忘れた妻が秋を食べ

八尾市 中島春江

列島が寸断される台風禍

生活難熊もさ迷う人家まで

亡母に似ていつしかひとり言がふえ

気にせずには手抜きしてます傘寿です

私にも番茶も出花ありました

八尾市 赤木 妙子

真つ直ぐに生きゆつくりと女坂
かくし味に一滴たらず和のエキス
あなたの座る場所は私の視野の中
背負うた子の温さ覚えてる背中
心の隅に鬼が巣くつて寝ています

八尾市 鷲見 章

カサカサと紅葉をふんで秋深し
おしぼりで今日も一日元氣よく
大空に一の字かいて飛行雲
カレンダー一枚めぐり秋がくる
若者を友達にして若返る

泉佐野市 備後 三代子

茶懐石老婦しずかな箸づかい
転勤の子を送り出す乱れ萩
無理したら駄目と論してくれる夫
女性アナの早い口調に追いつけず
道一途職人芸の匠わざ

大阪府 神野 千恵子

人任せ今日一日の軽やかさ
ありがとう言つて言われてうれしい日
自分史に幸せ色をくれた人
水と油わかつていても好きになり
つい空を見上げて答え待っている

京都市 清水 英旺

満月にさらけ出したい憂き心
思ひ出の片片つなぐ長い夜
いびつ顔ちよつと悲しい居待月
やせなさいのたまう医師は太鼓腹
ご免なさい遺言通りいかなくて

京都市 三宅 満子

秋深し隣もサンマ焼く匂い
冬ソナにはまり青春とり戻す
ゴミ分別眼鏡かけたりはずしたり
野仏のやさしさに会う一人旅
美しい日本語聞きに深夜便

長岡京市 山田 葉子

いつのまに盗んでたのか亡姑の味
渡されたシナリオ余白続いてる
添えられたやさしい言葉に抱かれとく
定年後の暮らしになじむベレー帽
みつめ合いあの日に戻るふたりです

草加市 飯土井 健翁

中流と信じ交際費が嵩み
したたかに生きて卒寿を遙か過ぎ
穴あいた知恵の袋を本で埋め
年寄りに気迫一つが命綱
出来不出来あつて人生面白い

犬山市 関本 かつ子

筋道を通して胸を張る孤独
アメリカのみやげチャイナと小さな字
性格も皿にのせてるバイキング
誉め言葉聞えたように咲いてくれ
わたくしの自負へ疑問の風が抜け

高岡市 青井 はつえ

悲しい酒唄って酔っている屋台
人類の身勝手地球おこりだす
無言でも解りあえるという傲り
屋根の上人を観察するカラス
世話役をうけて人間丸くなる

横浜市 巖田 かず枝

再発という爆弾を抱えてる
ハイヒールも一度履いて踊りたい
夫婦連れ同窓会の今が旬
手料理の好きな夫の冷ややっこ
初孫に備え足腰鍛えとく

横浜市 金森 徳三

酒たばこ墓前に供えまだ止めず
体脂肪踏み絵のように乗る秤
歳月や孫が二十の歳迎え
どなた様オレオレ詐欺に呆けたふり
目薬をささずにおれぬ記事ばかり

東京都 やまぐち 珠美

空へ発つ 常にヒコキ乗りとして(東雲さんご逝去)
秋だねえなんて別れを切り出され
大人になったので顔で笑えます
とまどいに慣れて閉ざしている瞳
秋の空すべては青に飲みこまれ

日高市 根岸 方子

今こそが趣味を始める旬と知り
弱点が同じと知ってからの友
表札に亡父の面影まだ残し
猫までも会話に入る垣根越し
飲み会は下戸から会費集められ

日立市 加藤 権悟

平凡なくらしに妻の茶がうまい
銀髪も粋な夫婦の丸い味
澄んだ目の園児サンタをまだ信じ
鉦叩き余韻だんだん遠くなる
年輪の一年無事をありがとう

札幌市 三浦 強一

定年へ心機一転主夫となる
王様は裸と子供ずばり言う
ばくのはとは違う答の参考書
梨園の子血筋背負った初舞台
立ち見席オペラグラスが酔っている

豊中市 源田啓生

子規の倍生きて子規より貰うもの
列島の襖がきつい秋風

泥んこと裸足に風邪が除けて行く
サンマより備長炭が反り返る

奈良市 矢野良一

プライドをもつ高からず低からず

曼珠沙華故郷の思い出よみがえる

お彼岸は散歩がてらに墓参り

八代演歌と秋刀魚肴で秋の酒

松江市 松浦登志子

がんよりも天災保険増やしとこ

怖いのは地震雷火事老後

空が澄み楽しい会話風に乗る

父は夢母は無償を子に与え

鳥取県 西原真一

太陽が私を見るやりなおす

生きるなら危険な道がおもしろい

生き抜けと年下の娘にはげまされ

生きていた証に何を残そうか

高知県 近森功

菊の香にさそわれ急ぐ万歩計

日記帳曇のち晴孫の守り

八十路坂杖をたよりの戦友の会

散髪をして来て犬に吠えられる

堺市 荻野像山

笑ったら損するような父の顔
気遣ってくれてる割にきつい口

運針を教える祖母は若返る

スタイルか食い気をとるか秋の空

和歌山県 木村徑子

色即是空くるくる変る人生観

諸行無常知恵袋までさらわれる

恍惚でいいよ母さん危機の星

一期一会こころ美人に逢えた幸

枚方市 小川良吉

禍も福も普通にとおる古稀の坂

九段坂戦死の父は安らかか

尾道は美美子のくらし惚ぶ坂

老いてなお花まるほしい欲深さ

大阪市 尾崎黄紅

二兎を追うどころか三兎追った頃

偉いひとより善いひとに孫の言う

初対面誰かに似てるなど思い

怒りっぽい涙もろいでよいおひと

高知県 百田幸

安いから買ったと浪費気がつかず

顔の皺これが私の個性です

巣立つ鳥勇気を出して風に乗る

言葉にも隠し味あり噛んでみる

宝石もなすび一個も選びます

息合わせ静かに迅しレガッタよ

スリムへの強き思いと弱き意志

水を買う時代をまさに生きている

大阪市 原田 すみ子

イチローのファン女房にかなわない

孫の声運動会の御招待

週刊誌の見出し世相を教えられ

候補者の時はいい事言うていた

佐渡市 高野 不二

柏原市 伴 洋子

古と同じかたちで愛の彩

金庫番急募手品の出来る人

仲の良い夫婦顔つきまで似てる

真心を笑顔で渡す小商い

修羅の道幸せを追う百までも

泣き言は言うまい月が笑ってる

老い二人聞かぬ言つたで日が暮れる

白髪の素顔笑顔に品を見る

鳥取市 谷岡 清子

八尾市 田中 トシエ

掃除機が吸った今年にある未練

動く雲乗ってみたいな天高く

健康を小出しに生きて老夫婦

聞き上手相手を包む顔の皺

スムーズに来た半生の先案じ

出まかせのとつさの嘘に赤くなり

百までの四十年を何としよ

身の丈に合った暮しの心地よさ

大山市 金子 美千代

八尾市 笹倉 ひろし

サイレンで防空壕の中の夢

ニコニコと幼児に戻る老父哀し

人の輪に笑顔を付けて仲間入り

体力も気力も妻の後を追う

河内長野市 木太久 正一

枚方市 二宮 紫鳳

運動会気持が走る孫リレー

運動会パパのビデオが走り出す

七五三おすましポーズはママゆずり

ふるさとに思いをはせる鰯雲

さかな屋の秋は酢橘を添えてある

朝刊のちらしの白にある弾み

見慣れると素顔美人の眉がしら

月を得てすすきにダンゴ夫の筆

八尾市 平川 幸枝

唐津市 岩崎 實

老いてから炊事洗濯習わされ
積み上げし積木いつかはくずれ去る
相方が乗り気で動く壁もある
いたわりはその都度はげみ加速され

高知市 澤村 哲史

マジシャンが尻尾隠したマニフェスト
車間距離保ち膨らむ出世欲
フラメンコ空へ大地へ翔ぶリズム
コスモスが加齢の脚を軽くする

松山市 山之内 八重美

熱戦のドラマが分かつ明と暗
芋の粉の味が昔を語り出す
未来図へ子の幸せを祈りたい
そして今老いて度忘れ笑い合い

愛媛県 宮本 末子

不況でも他国へ余裕もつ日本
ホトトギス目立たず咲いて好まれる
このところ白髪隠しに着る帽子
長い鼻象は伊達ではないと言う

東かがわ市 向山 治延

木を植えて地球の色を青くする
八十路行く白寿をめざす万歩計
放牧で牛馬が育つ草千里
梅一輪生けてやさしい無人駅

府中市 岩本 雅代

秋風に母の小袖の温み欲し
少子化で祭り太鼓の音さみし
老いの輪も少しずつ欠け秋が行く
愛犬に慰められて今日も暮れ

府中市 藤岡 ヒデコ

忘れてはならぬ事だけすぐ忘れ
木犀の存在感のある匂い
目立たない萩は主役になれぬまま
下駄箱に家族の愛がせめぎ合う

岡山县 矢谷 富士野

プライドを捨てれば楽な押し車
夕焼けに染まる親子の肩車
飽食の裏に飢餓民ある地球
サンキューとノーだけ覚え成田着

出雲市 加藤 スズコ

生き抜いてふる里覗く万華鏡
燃えた頃思い出すのか彼岸花
望郷に祈った月を仰ぐ里
温かい趣味の出会いに宿る夢

出雲市 川島 和歌子

寄り添って伸びてちぢんで月の影
平成の孫に聞かせる終戦忌
声出してセリフ反復する孤独
泣き笑い迎える八十路誕生日

出雲市 荒木英子

初めての泉州茄子が好きになる
続台風テロの仕業に見えて来る
捨て切れぬ野心の姿妥協する
幸せはお洒落して行く文化祭

安来市 原 煩惱児

何時来ても笑顔崩さぬ嫁や孫
増える非行月の兎が逃げてから
人間の傲り托卵する世とは
過疎に古い月見と洒落て芋煮宴

島根県 福岡博利

ざくざくと香氣の葱の青を切る
エンマ様官僚の舌は抜かないの
追伸があるから手紙おもしろい
年寄りに笑え笑えと言われても

鳥取市 岡田信恵

くじけずに歩くと決めた万歩計
続けてる趣味もそろそろ重くなる
知恵の種歳の数だけ持っている
一人いて秋を味わう孤独感

鳥取市 河田のり代

叩けども小槌の知恵が老いに出ず
台風に好かれ山野も人も泣く
生きる道イバラの花に気が迷う
八十路来て終着駅の便りなく

鳥取市 近藤秋星

何号まで来る気今年の台風は
オール5に期待をすれば不登校
火葬場に行く道に鳴くこおろぎよ
老境に到り気付いた自然の美

倉吉市 前田喜美子

世界イチコロ選手いい笑顔
枯れかかる脳にたっぷり会話する
幸せのいびきうとうと誘われる
ややこしいパズル考え以下余白

境港市 中井虎尾

秋の風水にうつつた月ゆらす
ヤミと裏兄弟橋にひっかかる(橋本兄弟)
脇役が主役を越えた芸で受け
カーナビにない道走る地元民

米子市 小塩智加恵

紅葉も遅れますよと気温高
私は早寝遅起き健康法
ネックレス落として三日うつつになる
息子らに奢られ分は倍返す

米子市 猪森スミエ

サンガラス外して僕の顔になる
台風の中において聞くラジオ
合併で地図が広がるおらが町
イチローのバットが光る世界地図

鳥取県 山岡久枝

茶柱はないが香りに満足を
美しくラストに飾る夢を持つ
まだまだと腰を伸ばして喜寿をゆく
織りこんだ柄が浮き立つ喜寿となり

鳥取県 鈴木一弘

特賞が当たりおかしくなる素顔
いろいろな荷物を積んだ口車
いろいろとあつて八十路の辻に立つ
代ゆずり師走の風は窓のそと

鳥取県 岡村孝明

仏前に座して亡父の声を待つ
助太刀はよいが難問刃折れ
高望み止めて老後は楽に生き
絶えていた笑い嫁来て家に満ち

鳥取県 橋谷静江

台風はよほど日本が好きとみえ
義理人情省く世代へ近よれぬ
何事もチャレンジ出来る孫の意志
家族にもわくわくさせる孫の技

鳥取県 毎田信雄

足どりを重たく運ぶ歩道橋
爺さまに抱かれることに馴れた孫
温かい心に抱いて重い孫
禁煙を三度目にして達成す

和歌山市 坂部かずみ

秋の夜のなぞなぞ遊び独りっ子
感情が先に出て話ひっこむ
補聴器も答えてくれぬ内輪揉め
パソコンの子に道徳が映らない

和歌山市 寒川武

母親が妻の味方をして平和
出身地が同じで会話よく弾む
苦勞して取った資格が活かせない
爺ちゃんと孫が呼ぶのは許せませす

和歌山市 山田侃太

泥酔をしたらピカソになれるかも
六法に情け捜している弁護
世界地凶鳩が飛んでる空がない
戦禍の子黒い目ばかり光るなり

奈良市 田中賢治

沖縄の苦難還暦越している
ここだよとめがね頭で座り居り
お名前を思い出せずに話し込む
思い出を分け合うようにみかん食べ

生駒市 小西稔

彼岸花忘れた故郷よみがえる
ゆとりある生活たのし老夫婦
運命の出会い大事にいつまでも
イスラムのペールの奥に深いなぞ

神戸市 木村 忠 義

曾祖父母知つてそうだなこの大樹

ポランティアとは健康に良いと知る

庭掃除すると心が洗われる

医者えらび優しい方へ足が向く

尼崎市 古川 正 子

敬老の日孫より届くゆうパツク

夕茜朱紅の絵の具塗つたよう

懐かしいオシロイ花の鉢をみる

活花の吾亦紅あり秋の演出

尼崎市 桑 原 東 園

いい朝だ神に届けるこの決意

キツパリとノーと言いついて気が晴れる

口ずさむ歌に故郷の森が棲む

発車ベル新生活のスタートだ

尼崎市 小池 幸 子

完璧の思いを捨てて大らかに

娘達あてにしすぎて愚痴が出る

思い出の着物干してる秋日和

ふんざりをつけたく畳替えてみる

川西市 井 本 清 山

真心で嘘を上手に言う見舞い

冷蔵庫整理を兼ねるちゃんこ鍋

食前と食後で変わる危機意識

紙袋妻の手提げにあるランク

篠山市 谷 田 多美子

ほこほこと厨に匂う栗ごはん

曼珠沙華群がる向こうに童眼

川柳塔誌郵便受けの前で読む

髪染めて顔と似つかぬ姫鏡

三田市 辻 開 子

ぺたぺたとおはようコール二歳孫

月の絵にススキを添えて酒の宴

情報をくれるテレビは日々の友

想い出をなぞれぬままの亡父顔

宝塚市 丸 山 孔 一

喧嘩せず終えて安堵の夫婦旅

食卓にメモを押える皿ひとつ

ハリケーン何で女の名で襲う

加齢です医者の言葉が憎らしい

西宮市 片 山 忠

どうしても気になる時は蓋をする

サンドバッグになろう妻よ打つてこい

サイレンを鳴らし正義の面被る

敗者復活きれいな事ではないこの世

西脇市 七反田 順 子

ルイヴィトン日本の家紋二つ三つ

葉草に何に効くかと問うてみる

満月や島の渚は歌っている

道行けば出会う笑顔の二つ三つ

兵庫県 黒崎 美紗子

気まぐれな台風通る後始末
残照へ自分をほめて湧く元氣
宵宮の賑わい雨もさつと晴れ
抽選を待つ間もどかし静かなり

兵庫県 岩本 美緒子

県警と言う騙し巧みな電話あり
県警の電話質すとフツと切れ
絵袋に天氣にまどう七道具
吾れ大正昭和と歳を使い分け

大阪市 寺井 弘子

菊一輪菊一輪の秋の冷え
子育てが終り虫の音よく聞こえ
あのあれでそれで通じる夫と妻
生かされて朝から泣いたり笑ったり

大阪市 中村 忠敬

山奥の一滴やがて急流に
梟の巢立ちは森の奥の奥
びつたりと寄り添い浮気許さな
ばらばらの夫婦でなんと五十年

大阪市 吉内 タカ子

風鈴もお疲れでしょう箱にいれ
尽くし終え残す人生一人花
川柳の締め切り前は脳揺する
七十の手習いやる気だけで生き

大阪市 中村 れんげ

萩茶碗この一服で心満つ
茶懷石碗の小芋に母偲ぶ
この年もこのひとときに感謝する
何げない出合いが長い縁となり

大阪市 池上 清治

はげ防止妻に葉を処方され
徒競走女性の強さ目を見張り
スト効果ドームの屋根もちと揺らぐ
木造りの椅子が優しい腰痛い

大阪市 木村 青生

病名をもらって病人らしくなり
まだ資格あります女性専用車
ウンばれても小首か上げて居座る気
記憶ない決り文句の政治屋さん

大阪市 吉田 富美

娘炊くかやくごはんに秋入れて
京ことば似合う花です貴船菊
亡夫の忌に故里土佐の柿なます
秋祭り亡母が恋しい酔の匂い

大阪市 平井 露芳

プールでは歩き方まで教えます
月見ウドン最後は月を丸呑みし
トキメキと思つたら何と不整脈
九条にやりたいノーベル平和賞

泉大津市 助川和美

頑張ったのに年金はちよつとだけ

おとうさん今日も無事ですありがとうございます

なぜ懲りぬイラクへ派兵被爆国

ありがとうございます一言で明日頑張れる

門真市 矢阪英雄

宛先をまちがえ出した暗い朝

トラブった作品いまはどこにある

またミスをしそうな予感足すべし

いつまでもミスにこだわりAの型

河内長野市 坂上淳司

破れ鍋が感謝してます綴じ蓋に

老妻が十年日記買って来た

無農薬虫喜んで毒見する

御袋が呼んだ気がする夕間暮れ

河内長野市 内海綾乃

犬と散歩道順憶え先に行く

ほおずきを口にふくんでキュッキュツと

庭にみみず土肥えてると花育て

パラリンピック笑顔行進胸なごむ

岸和田市 中岡香代

穏やかに和む暮らしにありがとう

適当に反省しては繰り返す

浴びるほど飲み通したい胸の内

検診で眠る病を掘りおこす

岸和田市 堤 植代

幸せと生きています事無きは

シンクローのようにのびたいこの手足

別人にしてくれましたヘアピース

他人事宇宙の旅は夢の夢

堺市 河盛龍三

臨終の母目に触れた仕草する

楽しさをこらえる癖が付いている

パソコンを使い切れずに遊ばれる

いい夫婦喧嘩しながら続いている

高槻市 富田美義

子の親の躰不足が呼ぶ不幸

フルムーン軽い脳のせ軽四輪

慎ましい記事に安堵の老夫婦

国民はチクリと刺せるハリ持つが

高槻市 大崎侑子

サービスが良くなってから店仕舞い

努力とは次元の違う運に泣く

外面は弱い女を演じてる

弱いから肩肘張って生きている

高槻市 安田忠子

イチローの偉大な記録金字塔

山の神異常気象で疲れ気味

鈴の音に神を招いて魔を払う

人よりも深く礼する奈良の鹿

富田林市 古田千華

彼岸過ぎまだ向日葵が咲き競い
横道に逸れた子等にもいる家族
気に懸かる吐いた言葉のその行方
お茶点でて台風去るを待つ深夜

寝屋川市 中川恵香

コスモスが秋の日風に恋してる
何歳になっても匂です気持ちだけ
同窓会増える回数減る人数
幾度の交差点です渡ります

羽曳野市 吉村久仁雄

さん付けで妻の名呼んだ定年日
生き様に妻を除くと僕がない
晩成の意志が寄り道ばかりさせ
結論は春まで延ばし寒立馬

羽曳野市 永田章司

バランスを崩し地球が病んでいる
ゆとりある老後のはずがこの不安
やりこめたはずが後味悪すぎる
過ちを許しなんだかほっとする

羽曳野市 濱口フジ

十六夜は台風一過光増す
台風の一挙一動追いかける
残念な台風一過落りんご
台風よ日本のどこがいいのかな

羽曳野市 仲谷真一

秋寒に熱爛ちびり良いムード
台風が熊さんまでも誘い出し
卓囲みはらはらパイをにぎってる
心臓にカテーテル入れ生き残る

東大阪市 米田水昇

夫を追う天まで続く曼珠沙華
ヘアピースつけて十歳若くなり
探し物手品のように出ることも
遅咲きのバラになりたく赤を着る

東大阪市 今岡貞人

耳たぶに軍靴の響きまだ残る
日光の歴史を語る杉並木
いいことが続き光陰矢の如し
この土地に来て聞く鐘のあたたかさ

藤井寺市 伊藤アヤ子

菊人形教えてくれるその時代
サンマ焼くカボス一切れ秋の味
介護の手痒いところに目が届く
コスモスが揺れて私も秋になる

藤井寺市 西村栄一

青空に誰もブランコ忘れてる
青空に心をのぞかれてしまう
酒やめて長生きしても仕方ない
バックミラーに未練が残る曲り角

藤井寺市 吉田 喜代子

虫干しに亡父母の匂いが薄くなる

整頓も過ぎて置き場がわからない

日本地図に旅の足跡赤いマル

申年をまた迎えたい十二月

藤井寺市 鈴木 いさお

稲刈りの跡に童のはしゃぐ声

柿の木に柿の実が成る有難さ

オレ流のマジックで竜 天に舞う

女ごころ優しさだけじゃ繋げない

藤井寺市 増井 ヨシ枝

納骨を終えて私の喪があける

老人の仲間入りした誕生日

ふる里の柿の木亡母の声がする

持ち寄りの笑い袋と午後のお茶

箕面市 寺井 柳 童

生きているナースコールに手が届く

相部屋に軒ため息呻く声

消灯し点灯までの長い夜

美しい嘘に隠した甘い蜜

八尾市 田邊 浩 三

赤ちゃんはおクが守ると細い腕

悪なのか天才なのか末の孫

素顔には親の願いが光ってる

抱っこだけ背中見る頃父は亡し

大阪府 高木 道子

秋雨に去年の編棒忙しい

しんみりと論す老母に弱い孫

ハリケーン強いアメリカ無抵抗

秋空へ独り歌えば憂さ晴れる

大阪府 小栢 こずえ

塔も良く花火も見事良く上り(初参加)

花生けて人待ち顔の玄関に

米になる土にうもれる穂の落差

優しさに過去が虹色帯びてくる

大阪府 若月 祐作

出合いから半世紀経て今至福

老夫婦表彰台で照れ笑い

仏壇のお経へ母を喜ばす

八十路越え四角い父も丸くなり

大阪府 畑中 節子

落ち栗を栗鼠が両手で憎まれず

ニガ瓜とキウイの蔓が握手する

他所の畑のぞき見しては知恵盗み

紫苑花背伸び寄りそう秋の風

犬山市 吉田 幸子

場違いな席で孤独な風が舞い

出没で森の事情を語る熊

差をつけたはずがラストで追い越され

叱られているが貴方も忘れん坊

(中西 雅・布山嘉信・石原三郎・井上つよしさんの句は53頁に掲載しています)

第19回 国民文化祭・ふくおか2004 (11月13日)

本年度国民文化祭は福岡県柳川市柳川市民会館で開催された。事前投句、一般の部は2374名、小中高校生の部は6777名、当日参加は700名。大会各賞は下記のとおり。なお太字は本社同人。

◎一般の部

文部科学大臣奨励賞

蟹食べる時の私が私です

和歌山県

川上 大輪

国民文化祭実行委員会会長賞

ふるさとを飲む盃の丸裸

大阪府

土田 欣之

福岡県知事賞

真つ白なページに君を座らせる

埼玉県

渡辺 梢

第19回国民文化祭福岡県実行委員会会長賞

ささやかな冒険妻と手をつなぐ

富山県

酒井 清二

福岡県教育委員会賞

定年後舟は本籍地へ向う

大阪府

吉道あかね

柳川市長賞

思い出の向こうから来る白い靴

福岡県

鬼塚 遠子

第19回国民文化祭柳川市実行委員会会長賞

蟹を食う妻に奇妙な安堵感

千葉県

天野 裕文

柳川市教育委員会賞

産声へ贈る白紙の時刻表

福岡県

深堀 正平

(社)全日本川柳協会会長賞

揺れて揺れて男になった樹になった

広島県

小島 蘭幸

福岡県川柳協会賞

冒険野郎老いて小さな菊の鉢

福岡県

水谷しげる

◎小中高校生の部

文部科学大臣奨励賞

蟹の目も僕も何かを探してる

鳥取県

安井 剛甫(中)

国民文化祭実行委員会会長賞

叱られるかくこで投げると真ん中

埼玉県

岩田 大輝(小)

福岡県知事賞

ただいまと開けた扉にあたかみ

福岡県

梶原 智子(高)

第19回国民文化祭福岡県実行委員会会長賞

急流よ蟹の力を見くびるな

福岡県

測上 広隆(高)

福岡県教育委員会賞

冒険は指先ですむ新ソフト

群馬県

元井 嶺(中)

柳川市長賞

友だちと帰る時間もたからもの

佐賀県

井出 亮我(小)

第19回国民文化祭柳川市実行委員会会長賞

一匹が走ると蟹がみな走る

愛媛県

亀田 大地(中)

柳川市教育委員会賞

白地図に自分でえがく夢の道

熊本県

平山 奈美(中)

(社)全日本川柳協会会長賞

努力点自分に響き帰ってくる

長崎県

吉岡 一樹(高)

愛染帖

波多野五楽庵選

八王子市 播本 充子

男でも女でもない影法師

ケータイに夢中で神とすれ違う

待ちぼうけやがて壁画に托けてゆく

富田林市 池 森子

秋耕や冬にかたむく種ばかり

乱調のピアノソナタは神の冬

倉敷市 小野 克枝

言い訳をせず少年は北を向く

あした別れる女が向う岸に佇つ

和歌山市 木本 朱夏

キリストの肋のように秋の雲

廃盤のレコードを聴く夜の秋

和歌山市 西山 幸

塩壺も塩壺なりの位置がある

遺書を書き直してから眩暈なり

尼崎市 長浜 美龍

ほんとうの悔いは渦中に立つてから

淋しさが残らぬようにメール消す

和歌山市 柏原 夕胡

彩りを添えて女を組み立てる

トンネルの向こうに君が立っていた

唐津市 仁部 四郎

立て替えた小銭にドラマ始まった

啄木に似たてのひらで繰る曆

弘前市 高瀬 霜石

止まり木がときどき欲しがるこの世

生憎の雨を楽しむ旅にする

弘前市 斉藤 荔

りんご樹の涙ぼろぼろ見てしまっ

デカルトもカントもくぐり抜けた門

東京都 やまぐら珠美

日盛りを煮つめ屈託ない黄色

我を緩め旧き木馬の顔となる

弘前市 福士 慕情

前餅の耳から齧る癖がある

急がねば夕日が海へ落ちそうだ

米子市 小塩智加恵

真実を見てほしいから素顔です

かこの鳥夫の餌に馴らされる

西宮市 牧淵富喜子

指間からするりと逃げる神無月

妙につれなくはぐれそうです影ひとつ

和歌山市 桜井 千秀

黒を黒と言う役目なら僕がやる

I-Tに無縁いろ紙折っている

四條畷市 吉岡 修

出雲市 園山多賀子

人形も女も寄り添う月の暈

綾取りの川から川へ母の橋

羽曳野市 吉川 寿美

アルバムから抜け出す父の古帽子

ポジョレヌーボー楽しい話探さねば

和歌山市 古久保和子

脇道に逸れて大人になりました

美しく老いたし今日を整える

堺市 志田 千代

暑さ残って午後の時間がみな狂う

踏み外すこともなかった昔日よ

米子市 白根 ふみ

広辞苑森の深さに抜け出せぬ

持つて死ぬわけではないが貯金好き

尼崎市 春城 年代

雲追うて夢風船の行つたまま

爆笑の渦に巻かれていく孤独

鳥取市 福田 登美

望郷の背を押す飛行機雲一本

一条の光に託す発車ベル

大阪府 小泉ひさ乃

どっちとも取れる言葉の後遺症

堺市 和田つづや

大阪府 星野きらり

大阪府 武本 碧

大阪府 海老池 洋

大阪府 板東 倫子

大阪府 福田 登美

鳥取市 夏目 一粋
戦場のどこにいたのか蝶が舞う

弘前市 高橋 岳水
恋に恋する年頃のファンタジー

新潟市 田辺 鹿太
くす玉が割れると森がまた消える

池田市 栗田 久子
はつきりとノーと言えます女です

鳥取県 佐伯 やえ
秋雨やわたしは嘘をつきとおす

大和高田市 鍛原 千里
信号が青になるまで許さうか

鳥取県 竹信 照彦
紫陽花の骸をやつと茶毘に付す

京都府 丹後屋 肇
短詩型 五本の指がものを言う

鳥取市 徳田ひろこ
風紋の髪に隠せる古い疵

愛媛県 中居 善信
歩を一つ捨てる勇気のない僕で

大阪市 岩崎 公誠
自分色終章めどに染めている

砂川市 大橋 政良
足あとが僕の余白を消しにくる

高槻市 乙倉 武史
身のほどは弁えている月見草

富田林市 大橋 鐘造
募引きの涙は少し取ってある

高知市 小川てるみ
吠えたててやりたいほどの無言劇

美沙市 安平次弘道
逆算をすれば辻褃合いますか

愛媛県 花岡 順子
上品な皿に盛つても芋は芋

西宮市 門谷たす子
一人ぶんずつ石鹸が減る生きている

鳥取市 武田 帆雀
お願いがあつて両手で握手する

弘前市 相馬 銀波
無職にも朝のリズムの老眼鏡

黒石市 相馬 一花
好きな風吹くまで風はひと眠り

弘前市 岡本 花匠
観音巡り終えて安らぐ彼岸花

大阪市 前 たもつ
野良犬もやさしい人の影を追う

倉敷市 撰 喜子
ストレスを肴にうまい酒を酌む

松江市 川本 畔
窓開けるだけで嬉しい日曜日

寝屋川市 江口 度
本当の怒りしずかに見つめられ

吹田市 岩屋 美明
悪いこと聞いてしまったおでん鍋

宇部市 平田 実男
本心と言えばあなたに傷がつく

和歌山県 三宅 保州
男一匹堪えた縮図の喉仏

交野市 田岡 九好
疎まれる訳を知らない蛇の顔

高知県 桑名 孝雄
台風銀座 地価は一向上がらない

寝屋川市 森 茜
びん詰めにしておく粋な日本語

和泉市 西岡 洛醉
知恵ひとつ重ね奈落を知らず生き

大阪市 川原 章久
目の端で客の値踏みをする売り手

唐津市 田口 虹汀
宵山笠に市民の顔がほころびる

唐津市 市丸 晴翠
妥協した中途半端な縁糸

海南市 谷口 義男
ゴミ袋見れば世代が透けて見え

富田林市 中井 アキ
喋つたら涙が零れそうになる

和歌山県 田中 みね
表向きとはおおよそ違う泣きボクロ

和歌山県 楠見 章子
亡母に逢うところの古い地図ひらげ

樺原市 安土 理恵
背かれて谷の底から這い出せぬ

八尾市 生嶋ますみ
ほどほどに生きる定規が見えたらぬ

富田林市 片岡智恵子
萩ゆれる想いもゆれて夕日落つ

和歌山県 中後 清史
軽く見られたなと思つ不愛想

鳥取県 土橋 螢
蟹食べに来いと港の女から

豊中市 水野 黒兎
校門を見るたび撫でてみたくなる

大阪市 伏見 雅明
決戦を挑んで妻に返り討ち

奈良市 矢野 良一
初を燃す里の匂いが堪らない

大阪市 神夏磯典子
塗装して表面だけは元通り

堺市 矢倉 五月
躰いた小石にお礼言うておく

東大阪市 北村 賢子
アルバムに笑顔はじけた頃がある

松江市 安食 友子
平凡を違ったのはつむじ風

米子市 青戸 田鶴
茨道歩いた亡姉がいと嬉しい

横浜市 金森 徳三
何もかも手おくれでした彼屋花

弘前市 櫻庭 順風
やつと世話したのに辞めて世話がない

松江市 三島 淞丘
秋廻の掌で今日一日を舞い終わる

岡山市 井上柳五郎
年の功辛抱できる虫も飼い

八尾市 高杉 千歩
病院とカルチャー皆勤十二月

八尾市 井尻 民
張っていた肩もみほくすくに詠り

藤井寺市 高田美代子
最後には優しい人の名を呼ぼう

神戸市 山田婦美子
いいことは言わず袋につめておく

八尾市 西川 義明
お互いにビタミン剤の夫婦です

和歌山市 福本 英子
奥さまと言う電話には身構える

羽曳野市 酒井 一壺
巻き添えが怖くてみんな知らぬ振り

松原市 玉置 重人
一番のプラスあかるい嫁がきた

札幌市 三浦 強一
オレオレにきつと私は騙される

弘前市 宮崎ヒサ子
丁寧言葉足して二三行

西宮市 片山 忠
家建ててやつと男の貌になる

和歌山市 山口三千子
人生を大きく変えた交差点

西宮市 井上 松煙
次の一手眼鏡拭いても出てこない

倉吉市 野口 節子
大胆に見せて細かい銭勘定

西海市 黒田 茂代
奥深くしまった哀に出会う秋

堺市 奥 時雄
しかしなあ上司は窓の外を見る

大阪府 初山 隆盛
この夏はギリシャの神も不眠症

大阪市 本間満津子
八方塞がり明日の風を待つばかり

鳥取市 録沢 風花
手遅れにならないうちに水を飲む

唐津市 井上 勝規
少子化に役人だけが増えてゆく

唐津市 岩崎 實
かゆみとれ妻の手遠くなりました

倉敷市 井上 富子
深呼吸部屋の空気が薄くなる

藤井寺市 太田扶美代
目が合った君の魔法に嵌められた

藤井寺市 鈴木いさお
七転び八起きのとに来る余生

鳥取市 美田 旋風
逃げられぬときの用意を模索する

神戸市 田中 章子
空を描くクレヨン数本持つている

西宮市 坪井 孝一
言い訳をするたび針の数が増え

富田林市 古田 千華
風呂敷に包んで仕舞う恋の傷

奈良県 渡辺 富子
念ずれば鬼も仏に変わるはず

海南市 堂上 泰女
試行錯誤できる私にある若さ

鳥取県 上田 俊路
お互いの心読めたら喜劇たち

和歌山県 森下 順子
言わなくても分かる弱者の目のやりば

倉吉市 米田 幸子
振り向きもせずにベットは出て行った

川柳塔社80年のあゆみ (増補版)

1924(大正13)年	麻生路郎が川柳の社会化運動を提唱して川柳雑誌社を設立、1月19日に創立川柳大会を開く。事務所を兵庫県鳴尾村の路郎宅に置き、『川柳雑誌』を創刊、近詠欄のタイトルを「川柳塔」とする。
1936(昭和11)年	路郎は文芸の分野においても専門家が必要であるとして一切の職を辞し、職業川柳人を宣言する。
1943(昭和18)年	戦争激化のため、『川柳雑誌』休刊。
1946(昭和21)年	敗戦の翌年8月に『川柳雑誌』復刊。
1957(昭和32)年	不朽洞会員143名で合同句集『私達』を刊行。
1965(昭和40)年	7月7日、麻生路郎死去、享年76歳。遺言により『川柳雑誌』は460号で廃刊。 10月3日、不朽洞会員が結集し、川柳塔社創立総会を開いて中島生々庵を理事長に選出、事務所を大阪市南区の生々庵宅に置き、『川柳塔』を発刊。
1974(昭和49)年	7月7日、同人合同句集『川柳塔』を刊行。
1981(昭和56)年	9月1日、事務所を大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第二ビルに移転。
1982(昭和57)年	10月、同人総会で主幹(理事長)に西尾葉、副主幹(副理事長)に橘高薫風を選出、中島生々庵を名誉会長とする。
1984(昭和59)年	7月、誌寿還暦記念句集『川柳塔』を刊行。
1986(昭和61)年	中島生々庵名誉会長死去、享年89歳。
1989(平成1)年	11月12日、高野山大霊園に「川柳塔」碑を建立、同人と川柳愛好者有志を合祀する。
1990(平成2)年	10月7日、川柳塔社規約を改正して主幹と理事長を分離し、主幹に西尾葉、理事長に橘高薫風を選出。
1994(平成6)年	1月16日、『川柳塔』800号記念川柳大会を開く。同年、全国誌上川柳大会を実施、同人・誌友を含む誌寿古希記念句集『川柳塔』を刊行。10月2日、同人総会で橘高薫風を主幹、西田柳宏子を理事長に選出、西尾葉を名誉主幹とする。
1995(平成7)年	5月15日、西尾葉名誉主幹死去、享年86歳。
1996(平成8)年	10月19日、理事長に小出智子を選出。
1997(平成9)年	6月28日、麻生路郎・葭乃、中島生々庵、西尾葉追悼川柳大会を開く。10月3日、同人総会で河内天笑を理事長に選出。
1998(平成10)年	3月6日、『川柳塔』850号記念川柳大会を開く。
1999(平成11)年	3月20日、川柳塔創刊75周年記念川柳大会を開く。
2000(平成12)年	9月24日、同人総会で主幹に河内天笑、理事長に板尾岳人を選出、橘高薫風を名誉主幹とする。
2002(平成14)年	5月4日、『川柳塔』900号記念大会を開く。
2004(平成16)年	7月、川柳塔創刊80周年記念句集『川柳塔』を刊行、10月10日、記念川柳大会を開く。

(田中 正坊記)

誹風柳多留二四篇研究 73

大野 秀二・橋本 秀信
粕谷 長生・小栗 清吾
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

581 おしげなく娘のまくばるかたみわけ

大野 間配るは間をおいて配る。あちこちに分け配る。また、公平に分配する。姑が亡くなった。当然、姑の衣類・持ち物などの形見分けを行なう。故人に関係のある人にとつては、亡き人の思い出に残る物を貰いたがり、嫁は姑が亡くなって清々しているので「惜し気なく」分け与える。

類句のように、そまつな物しか貰えないためであろうか。

鬼太織姫へ姑のかたみわけ 二二八三
小栗 賛。姑の持ち物など見るも嫌なのだろう。

清 賛。嫁の姑に対する最後の仕返し。
佐藤 賛。

582 根強いといふそふな国甲斐駿河

大野 根強いは、根もとがしっかりとっていて、たやすく動かない。根気つよい。また執念深い。財政などが豊かで安定している。

三国一の富士山がどつしりとしているようすから、その土台の地である甲斐と駿河の国は根強いと表現したのであると解釈した。

甲斐の國まで白むくの裾を出し 二四三三
橋本 賛。裾野を長く引いている姿を根を広く張った大木に見立てた。

清・佐藤 賛。

583 中カ入後源氏車に高尾山

大野 中入後は相撲、寄席などの興行で中休

みのあとをいう。源氏車は、(源氏絵に多く見られるところから)中古から中世にかけて、牛が引いた貴人の乗用車。御所車。牛車。また紋所の名。御所車を図案化したもの。本句では播州姫路藩の城主、榊原式部大輔政岑のことをいう。

大名が遊女を身請けした例は二つある。始めは仙台侯伊達綱宗で、三浦屋の三代目高尾を身請けしたが、意に従わなかったので、三又で吊し切りにされたと伝えられる。後は播州姫路藩の城主、榊原式部大輔政岑が三浦屋の六代目高尾を身請けした。幕府の知れるところとなったが、留守居役が高尾とは乳兄弟であるから身請けし、救ったと言ひ逃れた。このことを相撲の「中入後」と関取のしこ名の高尾「山」を入れ込んで暮らした。六代目高尾は身請けされた後、幸せに暮らしたという。御車に廻り合せのい、高尾 五六四

清 賛。

佐藤 賛。三浦屋の高尾大夫で、榊原は根引きされたのは六代目ですか。京山の『高尾考』では、万治高尾を二代目とし、榊原高尾を十一代としている。

584 日にやけたこよういせもの語する

大野 御用が抜参りで伊勢神宮に参拝をして、無事に帰ってきた。長旅で日に焼けた顔の御用が抜参りの道中での出来ことなどの話をしてる。それを伊勢に旅をしたので、伊勢物語と表現した。

清・佐藤 賛。

585 三年立つてから娘も自まへ也

大野 三年は近世、鎌倉の東慶寺(通称縁切寺)での参籠の年限。自前は自分に関するものものの費用を自分でまかなうこと。自弁。また、遊女や芸者が独立して営業すること。また、その者。自前芸子、自前女郎、自前船頭などの言葉がある。

縁切寺の鎌倉の東慶寺へ逃げ込んで三年たつたら離縁状を貰え、以後の婚姻は自由になる。離縁状は男が書くもので、これがないと再婚できなかった。このことを遊女や芸者が独立する「自前」という言葉で表現した。

三年過ぎてあま店へ縁につき 二四二六
三年で晴れる八長い尼あがり 五六二六
清・佐藤 賛。

586 御先きまつ白と四ツ手て息子かけ

大野 御先真闇は、先の見通しがまったくつかないこと。また、先のことを考えないでむやみに事をする事。

雪の日に四ツ手駕籠を飛ばして吉原へまっしぐらの道楽息子。

初雪は時を定ぬもん日也 二〇三十一
といわれるように、雪の日に行けばもてること間違いなし。御先真闇をもじって雪の日であるから御先真白と表現した。

御先真白と十手を飛雪の駕 一〇七三
清 「お先真つ暗」を振つたのが句のヤマ。
佐藤 賛。

587 ほころびを笑ふハ内義ぬふ氣也

大野 男の着物の結びを笑っているのは縫つてやる気があること。女の笑いには男に対する媚びがある。

ひとり者はほころびをツ手を合せ 三三
ほころびの内こたつから首が生へ 二二六
伊吹 賛。縫う気がなければ笑わない。

清・佐藤 賛。

588 初雪やひとりころびと女房よみ

大野 初雪が降り、亭主が吉原に遊びに行つ

たため、女房は、今日は一人で寝ることを「一人転」と詠んだ。芭蕉の「いざさらば雪見にころぶ所まで」の句まで考慮するのは考え過ぎか。

初雪や出たかるやつと女房よみ 一〇四二
初雪に女房ハ一人りころびなり 天二二

小栗 主題句は、礎稿があげられた類句の①と全く同じ構造になっている。類句の解釈は、教養文庫で佐藤先生が「……女房は「初雪や」と来れば、ほら、家にじつとしていられなくなつた」と、当てこすりを言う。……とされている。主題句も同じ要領で「初雪や」と来れば一人転び、である」という構成になるとおもいますが、「一人転び」がわからない。

①芭蕉の句を踏まえて、「こゝに一人、転ぶところまで行く(吉原へ)やつがいる」というようなことか。

②「一人ころび」(独転)という熟語があり(みずからの行為の結果、自分で破滅すること)、これを踏まえて女道楽を当てこすつたものか。

ただ類句②は礎解と同じような意味かもしれない。

橋本 礎賛。天二の句と同趣と思う。

山田 礎賛。但し芭蕉の句は考えすぎ。

清・佐藤 同。

尚香のむ

政岡日枝子選

弓張ると的に心を見透かさされ

まだ使える嘘を洗って乾している

すぐ同意してくれそうな隅の席

わたしより大きくなった息子の手

秋の風 爪先立った悔いがある

頼りないコスモスだけど群の中

まるい月何か言わねばこぼれそう

柘榴はじけて言いたいことが言えそうだ

合鍵が熱を持つから小走りに

手の鳴る方へ倒れかかってくゆくからだ

秋拾すこしおんなになりたくて

何も起こらなかつた今日の運勢

ずるをして頭が痛くなってきた

未消化の夢をつめこむ紙袋

蛇口からポトリと怖い夜の底

居こちが良いので眼鏡外しとく

破りたくなつた小さな障子六

旅帰りまだ生きのいい新聞だ
思うこといっぱいあつて秋の中

米子市 野坂 なみ

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 桜井 千秀

鳥取県 西原 艶子

尼崎市 長浜 美龍

米子市 青戸 田鶴

富田林市 片岡智恵子

米子市 白根 ふみ

和歌山市 古久保和子

米子市 門脇 晶子

和歌山市 西山 幸

八王子市 播本 充子

羽曳野市 徳山みつこ

大和高田市 鍛原 千里

今治市 野村 清美

富田林市 中井 アキ

松江市 川本 畔

堺市 志田 千代
米子市 中井 ゆき

子はすでに手を離れたり柿も熟れ
背伸びとは気づいていない土踏まず
スローライフ遅時きながら詫びながら
風邪をひくほどかしくはならないのです
時の流れについてゆけない症候群
足音へ人の心が詰めてある

色眼鏡無いから見えないことにする

寝め言葉ははしくて今日も顔作る

表面の丸さよ卵割れやすし

掌に書く指文字が淋しかり

ゆつたりと無駄と遊んで満ちる秋

ああああと泣く独りだし酔ってるし

句読点花は上手に打って散る

人間にだけ許された嘘をつき

さりげなく一言置いてくる未練

遂に來た独りで祝う誕生日

お帰りに言う声もない戸を開ける

私のシエルター小さい文机

有り難い何かが押ししてくれている

靴下の穴も気づかずストレッツ

秋空が柵といてくれました

姉いもと広げた蕨蔭にある昔

絵心を誘う石榴の赤い粒

女の血が少し騒いでいるお洒落
念願のそれまで神さまほとけ様

藤井寺市 鴨谷瑠美子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 楠見 章子

八尾市 村上ミツ子

藤井寺市 太田扶美代

鳥取市 永原 昌鼓

大阪市 板東 倫子

米子市 小塩智加恵

大阪市 神夏磯典子

出雲市 園山多賀子

奈良県 渡辺 富子

橿原市 居谷真理子

寝屋川市 坂上 高栄

大阪府 米澤 俣子

西宮市 西口いわゑ

八尾市 生嶋ますみ

西宮市 門谷たず子

堺市 矢倉 五月

西宮市 牧淵富喜子

八尾市 高杉 千歩

鳥取県 佐伯 やえ

米子市 木村 春枝

藤井寺市 若松 雅枝

香芝市 大内 朝子
寝屋川市 太田とし子

テリトリ一きつちり守り病んでいる
逆らわず風の間に間に喜寿を生き
コンサート明日へ電池を入れてくる
反物に酔って迷って展示会
そのうちに熱いおもいを虫干し仕様
そんな気にすぐなる影は離せない
ゴム替えて腰が喜ぶ履き心地
ライバルの居る幸せとしんどさと
いのししも熊も脳波が乱れだす
教室は走ったことしか記憶ない
フフツと笑える野次に喝采す
夕映えの彩に溶け込む木守柿
踏むたびに答えを出してくる落ち葉
寒椿赤い血しほるように落ち
簾引きで米屋に米が当たる時
告白に適した今日の月明かり
魂を入れて七十路と向かい合う
テレビから仕入れた智恵の膳につく
私いま心雨もりしています
身も心もなまけのお湯につかつてる
三世代みんなそれぞれ持つ皆
十七文字がいつも心を奏でてる
ゆく末を案するよりも夕仕度
たいがいの料理は熟すフライパン
ふと気付く靴が汚れていることに

和歌山市 武本 碧
倉吉市 野口 節子
箕面市 出口セツ子
鳥取県 石谷美恵子
尼崎市 春城 年代
堺市 桜沢 千世
倉敷市 井上 富子
愛媛県 花岡 順子
鳥取市 録沢 風花
西脇市 七反田順子
大阪市 三浦千津子
今治市 塩路よしみ
池田市 栗田 久子
シドニー 坂上のり子
兵庫県 黒崎美紗子
鳥取県 福西 茶子
鳥取県 西川 和子
松江市 兼本 政子
岸和田市 雪本 珠子
大阪市 古今堂蕉子
東京都 岸野あやめ
米子市 池尾 保子
寝屋川市 森 茜
大阪市 小泉ひさ乃
西子市 黒田 茂代

聞き役に回ってからは平熱に
歩み来た歩幅の色は顔に出る
アスバラが伸びて母の手振りほどく
八方塞がり足元の土掘ってみる
八つ当りしちやった茶碗伊万里焼
ふるさとの原風景にハーモニカ
一杯の緑茶に癒しの札を言う
虫の音を聞きわけウォークリツチなり
国籍を見てスーパーで買う魚
天高く今夜は秋刀魚似合うそう
弱いから人の優しさ直ぐわかる
髪濡れて鬼とはなりぬ夜の鏡
噂生む風になるかもこの出会い
折紙の鶴と命のにらめっこ
子の触る砂場の遊び夢無限
地震台風テロが無いだけ紀伊半島

大阪市 川久保睦子
大阪市 吉内タカ子
和歌山市 榎原 公子
豊中市 安藤寿美子
東大阪市 北村 賢子
寝屋川市 籠島 恵子
神戸市 山田婦美子
大阪市 松尾柳右子
和歌山市 山口三千子
弘前市 宮崎ヒサ子
東大阪市 中岡 妙
東京都 やまぐち珠美
橿原市 安土 理恵
倉敷市 小野 克枝
三田市 辻 開子
和歌山市 福本 英子

なみさんの句―邪心なくば真ん中へと、声なき声をかけてくる的。
逃げ道を残して、心の耳で聞き、心の眼で見るこの緊張感が心地よい。
美代子さんの句―おおらかな句である。これが出来る人は、きつと清
濁併せ呑むことが出来て、自分らしく生きてゆけるという声まで聞こ
えてきそうな一句である。千秀さんの句―案外おとしにくいのが隅の
席と覚えるが、どのようなやりとりが行なわれるドラマか判らないが、
その展開が楽しみな句である。艶子さんの句―母親の実感がそのまま
出ている句であって、嬉しさ、戸惑い等複雑な心が読み取れる。受賞
された息子さんに倅せな風が吹いてくるにちがいない。

算 数

小白金房子選



算数を覚え始めの肩たたき
 算数の百点採を褒めてやる
 算数の武器十本の指がある
 足し算へママの十指が加勢する
 算数の苦手な母の目分量
 算数がきらいで割勘わからない
 足し算の好きな役人多すぎる
 足して2で割ってバランスよい夫婦
 算数をなめてかかった自己破産
 算数のように割り切れないところ
 結婚後急に引き算多くなる
 人生を算数的に組立てる
 割り勘の多い世渡り引きずる人
 一足す一が三にも四にもなる二人
 飲み会の計算ならばすぐできる
 裸一貫加減乗除はみな不得手
 算数の好きなお寺で味気ない
 誕生日引き算をして若返る
 引き算はしない役所の予算組み
 算数が得意で作る裏帳簿
 愛足してみるとまあるくなる夫婦
 節税のツボ算数で立ち向かう

志華子 武史 宏章 あずま 典子 倫子 妙 慕情 旋風 夕胡 蓬吉 義男 タカ子 浜丘 千里 (井)富子 昌鼓 勝巳 玄也 千差子 碧 棲世

算数を得意にさせた消費税
 何事も計算とおりはいかにぬ
 引き算の人生ばかりで生きてきた
 古い二人加減乗除で事足りる
 計算をする農業も育たない
 たし算引き算人生は楽でない
 地球には解けぬ方程式がある
 算数の答電卓確かめる
 足して二で割れば愛情半分こ
 偶数で分ける二人の余命表
 生きて行く算数マイナス多すぎる
 掛けでも足しても足りない票の数
 さんすうが数学となり遠い人
 一つ二つと足してイチロー大記録
 見通しの甘さ計算狂い出す
 佳
 算数が文明の利器重くする
 算数は百点とったことがない
 解くほどに算数だんだん面白い
 算数が苦手で溢れ出すポエム
 良い方へ向く足し算に憧れる
 人
 空港にどれだけ家が建つだろう
 地
 算数が苦手4B芯が折れ
 天
 満点の人は案外嫌われる
 軸
 計算で行けぬ農家の米づくり

(堀)正和 俊路 婦美子 雅枝 美代子 檳榔樹 哲男 柳弘 扶美代 シマ子 重人 ちかし たもつ (備)輝夫 伊津志 高栄 高子 (渡)富子 ヒサ子 保州 愛論 高瀬霜石

うろたえる
 塩満 敏選
 目の前を知らぬ男と行く我が娘
 言い寄られ石部金吉うろたえる
 鷹が生れてうろたえている鳶の家
 集金に裸の大將うろたえる
 逆縁の計にうろたえる老いた親
 へそくりを挟んだ本が書架に無い
 影武者の口が軽くてうろたえる
 人道支援うろたえている日章旗
 うろたえる男の姿見せられぬ
 ジャンボくじ当たればきつとうろたえる
 うろたえて次の言葉が出てこない
 地下街を出たら降ってた俄か雨
 私の辞書にはなくってうろたえる
 嫁ぐ日の父さんひとりうろたえる
 MRRの写真にうろたえる
 冗談を本気にとられうろたえる
 一言の妻の謀反にうろたえる
 うろたえているのはボクの影法師
 下手な嘘ついて目の玉うろたえる
 発車ベル飛び乗ったのは専用車
 うろたえる手が恐ろしい核ボタン
 投了が見えて名人うろたえる

一知 千差子 シマ子 水笑 勝視 (備)輝夫 千世 柳弘 旋風 いさお フジ 重人 あずき 一風 螢 猿沓 洛醉 扶美代 俣子 あずま 俊子 隆盛



親友の訃報電話にうろたえる
 珍しい馳走胃袋うろたえる
 切符が無い改札口でうろたえる
 棒グラフ月末近くうろたえる
 震度七座つたままで動けない
 覚悟したはずのカルテにうろたえる
 うろたえて薬一本にしがみつくと
 海外のツアーはぐれてうろたえる
 福豆に鬼も布袋もうろたえる
 恋一途本音突かれてうろたえる
 ご家族に話があると医者が言う
 実家からなかなか妻が戻らない
 台風が手抜き工事を暴きたす
 離婚届妻の判こが押してある
 悪友の紙おむつ見てうろたえる

章 久
 昌 鼓
 志 洋
 花 匠
 一 壺
 鐘 造
 碧

台風に梨も林檎もうろたえる
 スト支持が多く球団うろたえる
 温い冬サクラ咲こうか咲くまいか
 テーブルに離婚届が置いてある
 横綱がうろたえている徳儀

秋 星
 晴 翠
 みつこ
 慕 情
 美代子
 人
 美 明
 地
 保 州
 天
 宮西弥生
 先生から誉められうろたえる

沈黙考ラストエンペラーの私
 最終の電車が乗せているドラマ
 ラストまで踊るつもりマックアップ
 ラストゲーム近鉄ファン泣きました
 大安売り今日がラストと何か月
 スタートもラストも同じ現在地
 手を合わせラスト一本たのむ父
 さようならたつた五文字のEメール
 頼むのもこれが最後と手を合わせ
 作業着を畳んで返す定年日
 一筋の煙でラストの幕下ろす
 ラストまでのち紅風化せぬ
 ラストダンスを断つたのが返事
 棺の中ラストの顔は皺がない
 原油騰貴酒渴する日がある問近か
 人生のラストを飾る鯨幕
 ラストまで持つて行く荷が重すぎる
 終章は花のワルツと決めてある
 ラストなど未だ考えたことがない
 好きだった最後のキスをして送る
 千切れ雲選択できぬ終の旅
 ラストシーンばかり憶えている名画

柳 弘
 夕 胡
 重 人
 悦 子
 のり子
 富喜子
 (奥)五 月
 恭 昌
 宗 明
 一 知
 (滅)富 子
 弥 生
 扶美代
 歳 世
 棲 世
 志 洋
 千里
 泰 女
 像 山
 修 誠
 公 誠
 忠

ラスト

宗 水笑選



お袋のラストオーダー鯉汁 (志)千代
 ラストダンスは貴方と決めて疑わぬ
 その日までラストスパートする余生
 ラストタイム飾る写真を選び
 ラストタイムたしかに母は微笑んだ
 ラストを走るDNAがいとおいしい
 八十路坂ラストビジョンの青写真
 糸切れた凧もラストは地にかえる
 枯れてなお香りを放つ菊の自負
 ラーメンのラストオーダー水つばい
 道草を詫びて最後は妻の傍
 最後かもしれないと思う畳替え
 殿をつとめ男の器置上げ (堀)正和
 どん底で神のテストに耐えている
 定年日自分のために走り抜く
 ラストにも完走という夢がある
 もう何回目ですか店仕舞セーラー
 落花飛花誰もラストは振り向かぬ
 臨終の笑顔毎日稽古する
 飾りたいラストが逆光線になる
 名工はきつちり終う道具箱
 塞翁が馬せめてラストは吉で来い
 打ち上げてみないとわからない花火
 嫌われて逝つた人にもある美点

善 信
 賢 子
 遠 野
 理 恵
 強 一
 千 子
 朝 子
 俊 子
 東 吉
 淳 司
 和 平
 あずま
 鐘 造
 四 郎
 保 州
 愛 論
 蜂 朗
 妻 子
 たもつ
 勝 視
 高瀬霜石

初歩教室

題 — やがて

三宅保州

副詞の使い方

今回の題の「やがて」は文法上は副詞です。副詞については当欄の本年三月号でも課題の「まさか」に因んで述べましたが、他の言葉

を修飾したり強調したりする品詞ですから、その特性を活かした作句をしたいものです。なお、「やがて」と表現しなくてもその意

がわかる作句もしやすく、また「やがて」の言い換えや類語として、まもなく、そのうち、いずれ、今に、かれこれ等もあります。殆どの句は「やがて」を使っていました

【標語的に使っている句】

言い換えや類語を通常の辞典や類語辞典で調べて使ったり、「やがて」やその類語を詠み込まずに作句することにより、句想や句意が広がる効果もありますので、活用しましょう。

川柳は標語ではありません。一見立派に見える句も、標語、モットー、スローガンの類

と思う句になっています。川柳は、あまり大上段に振りかぶらず、肩の力を抜いて良い意味の遊び心も時には必要です。

子育てはやがて世のため国のため
典子 松

失敗もやがて宝となる力
俊子

不可能をやがて可能にする気迫
英旺

切磋琢磨やがて輝く玉となる
智加恵

やがてくる老いを恐れず迎え撃つ
准一

諦めぬ熱意がやがて実を結ぶ
【同想句】「やがて来る死」を詠んだ同想句

か多かつた中で、比較的佳い句を掲げます。

やがて来る終章の扉開くとき
映子

やがて皆浄土へ行くと疑わず
侑子

そのうちにやがては僕の番になる
秋星

やがて来るお迎え如何にあしらうか
淳司

次の二句は同想句の中の代表句です。

やがて来る華の園へは鈍行で
徑子

やがて行く道に微笑む如來様
忠子

【添削・批評句】
原やがて来る病魔を払う下準備
タカ子

下準備を具体的に詠みたい。

添やがて来る老いに備えて万歩計
原やがて来る喜寿を夢見て句を作る
光枝

原やがて来る寿命に柳句精を出す
信子

右の同想二句を併せて一句にしました。

添喜寿卒寿目指して精を出す作句

原美人でもやがて三段腹となり
益子
身体的な弱点(デブ、ブス等)を揶揄的に詠むのは、良質なユーモアではありません。

原やがて正月孫へ年玉小銭貯め
孝明

何もかも読み込みすぎてぎくしゃくします。

添年玉に備えて小銭貯めてます
原泣いて泣いてやがて疲れて眠りゆく
いさお

添思い切り泣いたら眠る赤ん坊
【て】が四カ所もあります。

原冬の絵にやがては変わる年の暮れ
清

「年の暮れ」で「そうですな川柳」になっ

てしまいます。思い切つて「私も」とかに。

原やがて春髪も整え春帽子
千華

少し説明しすぎ。「春」も重複しています。

添やがて来る出番待ってる春帽子
原若くとも停年退職やがて来る
順子

中八章字。停年は今は「定年」が一般的。

添定年の絵をしつかりと描いておく
原やがて来る年金暮らし不安です
みね代

原やがて来る地震津波とこわい日々
みね代

原やがてくる残り人生二人づれ
みね代

三句ともそこまでの句。それからに挑戦を。

原クラス会やがてカラオケ盛り上がり
洋子

よくある場景すぎます。例えばユーモアで。

添お名前当てクイズになったクラス会
原熟通いやがて希望の学校へ
フジ

説明の域を超えましょう。熟は塾です。

原 やがて来る冬に備える熊に会う 道子

添 熊も必死に冬に備えているのです

原 柿美りやがてテッペン鳥の餌 美紗子

添 鳥たちにも一日置かれ木守柿

原 手の中の小犬がやがて20キロ すみ子

20キロは「動く」句。猛犬とかに。

原 親の意見やがて子供に無視され 綾乃

添 成長につれて意見も無視する子

原 此の子等もやがて涙と恋を知る つよし

涙と恋は一つに絞る方がよい。

添 この子らもやがて嫁いでしまうのか

原 産声のやがての報せ鶴の首 信雄

添 呱呱の声今か今かと鶴の首

原 無料バス持つて乗り降り傘の杖 賢治

「やがて」と解り難い。説明もしすぎ。

添 無料バスやがて私も世話になる

原 やがてもう出てくる妻は拗ねただけ 美恵子

読者には句意が解りにくいのでは。

添 夜までに帰る予定の家出です

原 その苦勞やがて笑えるその時期が きぬ子

添 その苦勞やがて笑えるときが来る

原 やれ切るなやがて芽が出る花も咲く 像山

ある名句のパロディーの感が否めません。

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 消去法やがては自分独りきり 正和

逆にして「私もやがて消される消去法」

原 父母も通った喜寿の道を行く 千代子

添 父母も通った老いの道を行く

原 誕生日やがて来るだる宅配で 雅代

添 宅配でやがては届く誕生日

原 栄転もやがて辞職の一里塚 青生

添 栄転もやがて辞職の一里塚

原 やがてくる老後へ少し貯めておく 武

添 年金の不足へおよばない貯蓄

原 アイドルもやがてそこらのお年寄り 時雄

添 アイドルもやがてお年を召します

原 だまし舟やがては元の舟になり 節子

添 だまし舟やがてふたりの櫓も揃う

原 迷いながらやがてあなたへ辿り着く 夕胡

添 迷いつつやがてあなたへ辿り着く

原 やがて古布さてそれからの白い画布 好

添 古布を動かない句にしてほしい。

原 もうそろそろ回つて来そう運を待つ はじむ

原 大丈夫やがて嬉しい春が来る 紀子

添 二句とももう少し具体性がほしい。

原 特訓の先に夢見る晴れ舞台 章司

添 失せ物もやがては顔を出さだろ

原 やがて来る老い受け止めるケセラセラ 水昇

添 親一人やがて一緒に住むと言っ

原 手狭だがやがて二人になる住まい 弘子

原 反抗期やがて心に詫げる日も 満子

この指輪やがてはみんな孫のもの れんげ

やがて来る風に備え祈るだけ こずえ

【佳句】

やがて来る地震へ又も賞味切れ 幸

温暖化やがて地球も水の底 孔一

地鎮祭やがてこの山たべる気か 美義

やがて春わたしの好きな種を蒔く 利子

子もやがて通る道だとレール敷く かずみ

耳当ててやがて生まれるいのち聴く 雅明

【今月の推せん句】 今月は推せん句が五句も

あります。当欄は句会等と違って全句が推せん句でもよいのです。ご健吟を祈ります。

年金法余生はやがて死語となる 井丸 昌紀

時事吟の風刺がたっぷり効いています。

やがて灰になる身今から覆せておく 撰 喜子

重いテーマにユーモアが効いています。

相合い傘やがて一人は濡れる羽目 岡本 昇

男女の機微の風刺が「濡れる羽目」に凝縮。

お下げ髪やがてこの娘も華になる 小川 イセ

回想句はありますが表現の巧みに軍配。

やがてもう帰る頃かな鈴の音 坂上のり子

待ち人の気持ちが「鈴の音」に凝縮されて

ます。いつもシドニーからのご投句に感謝。

【私の句】

連戦連勝やがて敗れるときが来る

やがてやがて敵も味方も砂になる

秀句鑑賞

同人吟 古久保 和子

— 11月号から

どつぷりと主婦の座に浸かって時間を無駄遣いをしていた私に、川柳を勧めてくれた友

に、感謝をしています。川柳あればこそ、行った事のない遠方の方々とも旧知のように大会等でお会いしてお話が出来、また毎月の柳誌でもお会いできる楽しみ、そして生活のリズムや張りを川柳から頂きました。

このたび、秀句鑑賞をさせて頂く事となり皆様方の、一句一句の個性と豊富な知識と感性にベンが止まってしまいました。選にあたり、作者と鑑賞者との接点を大切に考えました。すべてで同感するのではなく一点に共感することで、読み手が勝手に想いを拡げられる句が楽しいと思ひ、選句評させていただきます。

道祖神秋は退屈しませぬ

神夏磯 典子

半眼で道端に立つていらつしやる石仏も内心わくわく、見事な紅葉に誘われて、老若男女、多少の悪戯も許容範囲、人間観察も楽しいものとかな。

松茸の匂いが居着く炊飯器

池内 かおり

主婦ならではの視点、やはり一度は炊かなくてはと、朝から宣言をし、気合いを入れてスーパリーに向かい、入念に吟味のうえ一本を購入、もちろん、松茸ごはんを炊く時は、しめじで増量するのは、私のテクニク。

鍋みがくクロソードがひよいと解け

志田 千代

川柳もその通り、懸命に紙とペンで机に向かっている時より目を逸らして別の用事をしている句ができるものです。本当に「ひよ」とすね。ベテランの秀句軽やかです。

ブレーキが緩んで大口で笑う

榎原 公子

緩み弛みは、熟年の特権、おばさま達が立話やお茶をしながら楽しそうに笑っているのは緩みと発見した作家の見方に納得をしました。子供達も、一家を構える歳、もう主婦の名を返上して飛んでみませんか。でも、もう急ブレーキは効かないかもしれませぬ。

近所との糸太からず

海老池 洋

向こう三軒両隣と言いますが、近頃はその上、上と下とか、住宅事情が変わってくる付き合い方どころかお隣さんさえ知らないことがある。ドアのスコップから覗いてからドアチェーン越しに会話。この句のような付き合い合いが出来ることが、また幸せかもしれませぬ。

思い出し笑いをポケットにしまふ

大橋 政良

女の思い出し笑いは絵になるが、男性の思い出し笑いはどうでしょうか。視線を四十五度に微笑む、どんな楽しいことがあったのでしょうか。勿体無いのでまた明日のためにポケットにしまいました。読んでいる方も微笑んでしまいます。男性の句と思わず鑑賞をしたいと思います。

朝夕涼し友に便りがしたくなり

本間 満津子

涼風が立つようになると何となく人恋しくなるもの、シャレた便せんを買ひ求め便りを書く、友のことを想ひ机に向かう静かなひとときが浮かんできます。パソコン、ワープロの昨今、心のこもった手書きのお便りは本当に嬉しいものです。

神々のこもれる古道去りがたし

森 茜

今年、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されました。山岳霊場と参詣道と周囲の文化的景観が主役の指定は世界に類を見ない遺産とか、都人が辿り、現在に至る古道に神々が御座さぬ訳がない。作者の心根そのままの秀句だと思います。

人間を拒むと水が旨くなる

岸 桂子

痛いところを突いてきたなと感じました。水を買うことが当然になっていることに、疑問を感じなくていいのでしょうか。もしかしたら本当に美味しい水は、人間は飲む資格がないのかも知れませんね。地球は人間だけのものではないのですから。

すぐばれる嘘に費すエネルギー

津 守 なぎさ

小出しにするから、嘘がばれるのです。堂々とハイビスカスの花のようにしていれば大丈夫です。嘘の後始末は本当に大変です。

いい風がページめぐりに来るだろう

久保 正 剣

常に前向きで若々しい爽快感があふれています。希望をもって前進をすれば、かならず次のページも青空でしょう。

ほろほろと胸にあるのは遠き人

大石 あすなろ

こころを少し秋色にして静かに落ち葉を踏むように鑑賞したい秀句です。わからんことを言つてと、言われるかも知れませんが、言葉が、見当たりません。むしろ「遠き人」の詮索は無用です。作者の豊かな感性に脱帽。

一日を終えた夕日の穂やかさ

福士 慕 情

男性は夕日で一日を締め括る。多忙であった一日を茜色の夕日に癒される穏やかな一時が、目に浮かびます。ちなみに、女性はお化粧を落として一日を締め括ります。

道具箱私の夢もかびくさい

小林 妻子

まず、形から入る人は、自分の力量に関係なく一流の道具を揃え、その気になるのです。が以外と挫折も早いもの、しかし立ち直りも早く、また、次の夢に挑戦、懲りないものがある。結果、句の通りとなる。ペテランの一句ユーモアの中に哀愁が漂っている。

相手みて引っかきなさいバラの棘

都 倉 求 芽

人違いでしょうか、八つ当たりでしょうか迷惑なことです。バラは美女、棘はジェラシイ、棘のない薔薇も、魅力半減でしょうか。

時々握つてみよう妻の手も

加島 由一

夫婦だから言わなくても解かっている、日本のお殿方の悪いところ、「妻の手も」の「も」を作者にしつかり問い詰めたいものです。

淋しくて犬が死んだら猫を飼う

小島 蘭 幸

愛犬の死を悼んでるようで、そうでもないらしい、一歩引いた視線が流石です。

三時半郵便屋さんまだ来ない

岩 本 笑 子

三時半、本当に郵便屋さんがいつも来る時間でしょう。もう一つは、人生の三時半と考へ、充実感と淋しさを読み取るのは、考え過ぎでしょうか。

曲り角それから広い海になる

徳田 ひろこ

一つ角を曲がると、意外な風景が広がるものです。今までの苦労があつてこそその安らかな景色、女性らしい視点に魅かれました。

むずかしいルールは無しで生きている

西 口 いわゑ

人に迷惑をかけず、自分に正直に、ルールはこれだけ。とにかく健康でさえあれば恐いものなし、軽やかな作者の生き方に同感を感じました。

秀句鑑賞

— 11月号から

杉澤 汀

さわやかな笑顔に負けたなと思う

升成 好

昨夜の大論争など何処吹く風、「お早ようさん」の笑顔。——いやあ参った参った。ゆうべは少し呑み過ぎたかな。

操られ上がる風にもある主張

渡邊 伊津志

順調に泳いでいた風が急転直下、「これはボクのせいではない。風の仕業だ。」

妻の留守ゆっくり古い日記読む

小谷 集 一

妻の留守に昼酒を飲むのは夫の特権と思っていた輩には……。しかし昔の恋人のことなど考えているようだとか少々ややこしい。

靴紐をしみじみ結ぶ定年日

佐甲 昭 二

今日で終りか。この靴を何年履いたかな。退職の挨拶はしつかりやろう。

自適とはこんなものかところ寝する

三浦 千津子

定年になったら散歩に読書、時々ゴルフと陶芸なども考えていたが、結局ごろ寝して、会社のことや同僚のことなど考えてしまふ。

散りぎわの花の心を聞いてみる

西村 栄 一

「…花は吉野に風吹く、散兵戦の華と散れ」の軍歌に鍛えられ、一時はその気になって潔くと思ったこともあったが、本当の花の気持ちを聞いてみたいものである。

屁糞葛とはあんまり不可憐花

矢野 良 一

「鬼も十八蛇の娘も二十、屁糞葛もひと盛り」と口ずさんだ祖母を思い出す。

臭いを別にすれば誠に可憐な花である。

エリートに日本がワヤにされている

江波 正 純

高級公務員の出鱈目な仕業が次々暴かれるのを見ると、この先、全く心配になる。

エリートとワヤの取り合せが何んとも妙。

逃げ道を開けて反論開始する

喜田 准 一

理路整然とまくし立てているが、結局、我田引水である。ここで反論しおこうと思うが日頃の付き合ひもあり逃げ道も設けよう。

世界遺産抱いた山脈たじろがず

木村 徑 子

吉野から高野・熊野へ連らなり、鬱蒼と茂る千米級の山々は、古来から数多の神仏の霊場として崇められてきた。今回の世界遺産の登録は当然のことである。

野の花を摘んで少女の顔になる

山根 邦 代

一読明快「誰か故郷を想わざる」（西条八十作詩・古賀政男作曲）を思い出す。

星の数だけは負けない過疎の町

石原 歳 子

ネオンなど縁のない片田舎。今夜も漆黒の空に宝石のような星が散りばめられている。この美しさを都会の人は知るまい。

燃えるだけ燃えて淋しい彼岸花

今岡 貞 人

色づき始めた早稲田の畦を、真っ赤に覆っていたのはつい先頃ではなかったか。かくも無残な姿になろうとは。しかも一粒の種もつけないという。

茄子を焼く妻に作戦などはない

宮本 末 子

焼茄子に生姜醤油、なんと素朴で温かい味か、そろそろ爛もあがりそうだ。レンジの前の美直そうな女性の背中が見える。

父のこと

久保田 千代

幼い頃より父親つ子であった私は、いつも父の傍にいて大きくなったように思う。

一男五女の四女として産まれたため、母の周りには絶えず誰かがいるので、私は専ら父の傍にくっついていたようだ。自営の金網商として、たった二本の腕と野太い指だけで黙々と働き、大勢の子供を育ててくれる父が、子供心にも大変遅しく感しられ大好きであった。

姉たちが順々に適齢期を迎えては、父を悩ましながら結婚していくのを見ていて、私だけは絶対に父の薦める男性と結婚して、父を喜ばせようと思っていたのに、やはり駄目だった。大好きだった父とも、私の結婚話を境にして、何となく蟻りが出来てしまい結婚後も私の主人の職業柄、国内外を問わず転勤の連続で、ゆっくり実家へ帰ることも皆無となり、当然、実家への敷居も高くなり父をも煙

たく思うようになった。

その十数年間父のことは、ずっと気になりながらも心の奥に仕舞い込んでいた。さぞかし父も淋しい思いでいただろう。

昭和五十六年、中近東サウジアラビアのジエッタ市に住んでいた時、突然日本から父が入院した由、そしておむつを当てて動けなくなっていると知らせが来た。私はびっくりして、取り敢えず私一人で帰国することにした。が、遠い中近東のこと、まだ中学、小学の二人の娘と主人を残し、留守中の準備も、日本に居るようには出来ず、飛んで帰ると言っても、当時はまだ直行便もなく二十八時間もかかった。やっと帰国出来たのは連絡があつて後二週間目だった。

大阪府立病院のベッドの上の父の姿を見て驚いた。すっかり元気がなくなっていて、目に力も無く、ハンサムで役者顔だった父の面影は全く無かった。

一昼夜父の傍に付き添って、じつと父の顔を眺めていたが、父は余り話もせず、私の親不孝した事も何も言わなかった。

昔あんなに厳しかった父が、万年青年と言われていると自慢していた父が、こんな弱々しい姿になってしまったのかと、打ちのめされ、重い足取りでサウジアラビアまでたつた

一人で帰らねばならなかった。

これが今までの私の半生を通じての思い出したくない一番暗い思い出となった。そして三年後、再び歩くことなく父は七十九歳で亡くなった。

月日は流れて、父の十三回忌の法要を終えた平成八年、突如、私は川柳を勉強しようと思ひ立った。七十九年間、生きた父の十代からの唯一の趣味であった川柳とは、どんな魅力があるのか、父の事がもっと多く知りたくて、父と同じ川柳という空気を吸いたくあったのだ。

一年後、兵庫県三田市に永住の地を見つけ、十八年振りの関西へ十三回目引越しをした。

少し落ち着き始めた頃、雑誌「川柳マガジン」で西宮北口川柳会を知り、早速訪ねたのが平成十一年二月。紫香先生やメ女さん、今は亡き柳安子さん等、大ベテランの方々がおられ、父のこと話して下さる度、じわじわと幸せ感が、私の心に湧き大変嬉しかった。

父誉める人あり心満ち足りる 千代

その時心に思ったことを、素直に書いたら川柳になった。以来は自分のための川柳の勉強を続けている。

(筆者は菊澤小松園氏四女 編集部註)

追悼

月原宵明 元相談役



月原宵明さんのこと

黒川紫香

また一人麻生路郎先生を識り教え子だった人が亡くなった知らせを、慄然たる思いで聞いた。月原宵明さんその人でした。

もう十数年ほど前、全日本川柳大会が長崎で開催されたとき、休憩の合間に長い廊下でつき当りそうになりながら「おつ紫香さん」とどなって急ぎ足で駆け抜けて行った大柄な人がいた。「アツ宵明さん」と叫ぶ声が届かないほどの速足の人でした。その時はそれで終わったが後年、香川県白鳥町で西尾菜、橘高薫両先生の句碑建立のとき、一人の女性を連れて来られて「今度大阪に住み、大阪で川柳を続けるからよろしく頼む」と言われて托されたのが富山ルイ子さんでした。

四国のある銀行の支店長をされていて磊落な人で、銀行マンと言うより土建屋の親方とも思える風貌の人だった。

川柳界の名門汐風川柳会に属し米沢暁明、長野文庫さんらとともに活躍されていた。

私とともに十六年三月まで川柳塔の相談役をされていましたが本当に惜しい人を亡くしました。

一人また一人が欠ける寂しい日 紫香

宵明先生を惜しむ

越智青園

FAXで計報が届き、一瞬愕然としました。お歳はとっておられました。が、まだまだ私達には負けぬ気力をもっておられ、いつも感心して見習わなくてはと思っておりました。

私が宵明先生を知ったのは戦後間もないこ

ろ。今治みなと吟社、吉海吟社、および菊間吟社の三社が相寄って「汐風川柳社」を創立する際に、一番「尽力下さったのが文庫先生そして宵明先生だった」と思います。現在の「汐風」に育てるまで手となり足となって各地へ指導に向き、情熱溢れる川柳談義、後進の育成、全国の柳社との交流など様々な形で川柳の良さを教えて頂きました。「汐風」の多大なる功績のみならず、「川柳塔」や「日川協」での活躍は言葉で言い尽くすことはできませんが、地元桜井に記念して建立されている句碑や数々の名句集は私どもの財産でもあり指標となっております。また、愛媛の柳人の句集の序文には、先生が書評を多く呈されておりますが、これも卓越した表現力に加え、先生の温かなお人柄、柳人との親睦の深さを計り知ることができます。最高の柳人だったと惜しまれてなりません。

私のエピソードでもないけれど、私がお見合いのとき、主人の家に伺いましたら、お方針へ男盛りを励まされ、と、伍健先生おなじみの筆捌きで書かれた句が額に飾られてありました。私はびっくり、この人は川柳の趣味があると早合点して結婚しました。後になつて、あれは終戦当時、銀行員だった宵明先生より預金したお札に頂いたものとか…。主人

は川柳には無関心そのもの。今でも私が「だまされたね」とぼやいています。宵明先生にこのお話を一緒に大笑いしたのですが、先生とのお引き合わせと思いい今でも大事にしています。

川柳をいつも気にかけていた先生、時々今日はよかつたぞなと励ましの言葉をかけて頂いたりしたけれど、もうそれも聞けな

有難うございました

宮尾 みのり

とうとう旅立ってしまったね。長い年月、ご指導ご鞭撻、本当に有難うございました。先ず心よりお礼を申し上げます。

私が川柳を始めました頃、宵明先生は夫の勤め先の偉い人というお立場でした。そのような関係上、プライベートな面においても、何かとお心配りを頂きました。どんなに心丈夫だったことか。第一線を退かれましたからは「川柳塔」の大会にも大阪へご一緒しましたね。その時の思い出の写真が、葬儀の折にスライドで映し出されて感慨無量でした。

くなると思うと残念でなりません。

生者必滅、会者定離とはいいますが、先生にはもつともつと長生きして「汐風」「川柳塔」そして川柳界の発展を見守っていてほしいかっと思えます。

宵明先生、安らかに、心からのご冥福をお祈り申し上げてお別れの言葉とします。

(誌友)

最後まで先生の膝下から離れることが出来ませんでした。失望させてはいけな、と言いつつ自削心が私の心の中どこかにあったのかもしれない。でも私の川柳はこれでよかつたのだと思っております。

川柳は私の支えであると共に、「師の目」は心を見つめるための羅針盤でした。これからもやはり「師の目」は私の心の中でしっかりと生き続けることでしょう。

感謝の思いを込めて、心よりご冥福をお祈りいたします。

合掌へ万感のあり師を送る みのり

拝受した弔句

瀬戸内の逆光を背に師は逝きぬ 橘高薫風
惜まれて黄泉へと続く秋の風 板尾岳人
秋の雲宵明さんの眉になる 小島蘭幸

月原宵明氏柳歴

法名 吐月院文桂宵明居士

本名 月原 勝明

愛媛県今治市桜井一丁目一―一八

明治43年3月28日 今治市に生まれる

平成16年10月13日 没 享年九十五歳

柳略歴

昭和6年10月 川柳の道に入る

昭和7年9月 川柳雑誌今治支部(吹上吟社)に参加

昭和24年1月 汐風川柳社創立に参加

昭和37年4月 愛媛県川柳文化連盟理事(平成元年4月副会長)

平成12年4月顧問

昭和45年4月 汐風川柳社会長(平成11年1月顧問)

昭和52年12月 川柳塔社同人(平成7年10月相談役)

平成2年3月 愛媛新聞社 愛媛柳壇

平成7年4月 (社)日川協常任幹事歴任

選者10年

宵明氏句碑

凡人に春夏秋冬あり楽し

椀舟の意気水軍の血が流れ

野地蔵のそばに置いとく拾いもの

明け暮れをやすらぎの鐘法華寺

本社十一月句

十一月八日(月)午後一時
アウイーナ大阪

余震なお続いて、厳しい冬を迎える新潟地
震被災地には申訳ないほどの穏やかな好天が
続く中、十一月句会は八日、112名の参加に
より午後一時より開催された。

はじめに、先日亡くなった同人堀江光子さ
ん、寺井東雲氏の御冥福を祈って黙祷を捧げ
る。

お話は常任理事の石森利昭氏。

最近良質のユーモアの句が少なくなつたこ
とを嘆く。笑いは治療法としても有効である。
笑うことによつて増えるNK細胞は癌をやつ
つける細胞とも言われている。

落語家志望であつた氏は、落語に興味があ
り、30歳頃買った團生落語全集を今も愛読し
ているという。

まず落語の歴史を振り返つてみる。一六〇
〇年代後半、京に露の五郎兵衛、江戸に鹿野
武左衛門、大阪に米澤彦八の三人が、時を同
じくして辻話と称する小噺を始めて通行人を
客とした。この三人が落語の祖と言われる。

そして江戸末期から明治初期にかけて、次

第に寄席の形式へと移行してゆく。名人円朝
の出現により大衆演芸への確たる位置を築く
ことになる。上方落語の松鶴、米朝、春団治
の活躍も現在の隆盛へとつながつていったと
いう。

さすが落語家志望だけあつて、話し振りは
楽しく、純朴な人柄がにじみ出ている話に聞
き入つた30分であつた。

月間賞は大阪市の西出楓楽さんに輝く。

(司会一玄也) (記名) 月子・恵子
(受付一五月・瑠美子) (清記 義)

席題「童謡」 石堂 潤子選

童謡もクイズも好きなおばあさん
七つの子よくも育てたカラスさん
安らぎが欲しい日唄う赤とんぼ
クマさんを唄えば森が騒ぎ出す
ハトポツポだけ唄える二度わらし
童謡の中の日本はうつくしい
夕焼け小やけからすと帰りたい故郷
童謡も父が唄えば浪花節
童謡を替え歌にするやんちゃくれ
お手手つないで遊び疲れた影法師
気がつけば一人ぼっちの童歌
童謡がふつと出てくる秋の杜
終章の駅に待つてた童歌
仮設から今日も聞こえる鳩ポツポ
童謡を唄えば潮が満ちてくる
安田姉妹を母はテープで聞いている

欣子 柳右子 五月 扶美代 楓楽 とし子 西 さらり 玄也 更紗 ふりこ アキ 楓楽 雅文

ところどころ作詞はママの子守歌
童謡に白寿の母が肩ゆすり
童謡を唄うと溶ける胸の刺
童謡のムードで泳ぐ赤トンボ
雪やこんこん母さんあれは灯油うり
童謡のひとつし涙誘われる
人形に童謡聞かせ一人住む
童謡を唄えばみんな若返り
生きて来た途中桃太郎に出会ふ
夕焼け小焼け母は召されていきました
赤トンボ歌う寝たきり手を叩く
ポツポツ鳩も私もつまみ食い
赤トンボゴミを集めに来ましたよ
ふる里を重ねてふるさとを歌う
童謡をリュックに詰めてハイキング
童謡を歌うまあるい顔をして

利昭 昭 富美子 洋 (矢)五月 天笑 哲男 寿海 冬葉 理恵 正坊 保州 房子 恵子 倅子 美代子 保州 天笑 アキ 更紗 月子 希久子 富美子 朝子

私を忘れた母と数え唄

兼題「あつさり」

太田

昭選

ゼロの数読んであつさり諦める
以下同文で片付けられた表彰状
正論がすぐに上司と妥協する
淡泊な人も真つ赤な恋をする

満津子
弘一
尚士
千恵子

あつさりと太りすぎやと医者が言う

集一

その気ない辞表あつさり受け取られ

女也

定年離婚妻はあつさり風となる

祥昭

あつさりと去る善行はよく光る

一風

野望ひとつあつさり捨てた癌告知

アキ

あつさりと押しつけた判子が首を締め

鐘造

あつさりと忘れた頃に出る嫌味

東吉

会者定離辞表あつさり受取られ

哲男

金借りたことはあつさり忘れませ

弘風

柏手に神あつさりと領いた

章久

口ポットにあつさり椅子を奪われる

富子

すつぱりと言われて腹も立たなんだ

月子

あつさりと主夫やつてますあの日から

(矢)五月

あつさりとノーと言いつ切るのも若さ

千里

あつさりと解けたバズルが物足りぬ

富美子

不思議です妻があつさりハイと言う

見清

あつさりと礼儀正しく断わられ

義

別れ話いいよと言われ拍子抜け

千莖子

あつさりめのおかずで馬力抜けてきた

天笑

あつさりと誤爆だったというニュース

保州

あつさりと性格不一致という他人
あつさりと兜を脱いでから達者
あつさりとハートあげると言われても
男でしょあつさり泥を吐きなはれ
竹割ったような女房に添っている
大金を積まれあつさり承知する
元他人なんてあつさり言えますか

弥生
哲男
たもつ
淳司
淳司
舞夢
泰子

二度目です式もあつさりすませます
辞めてやるの一言誰も引き止めぬ
あつさりと白状男よく眠る
どん底をあつさり話す苦勞人
あつさりと妻の意見に従おう

修
良知
雅文
俣子
天笑

マドンナの笑みにあつさり裏切られ

アキ

子と将棋あつさり負けて満ち足りる

みつ子

おはようで昨日の喧嘩けりがつく

みつ子

抽出しにあつさり嘘を仕舞い込む

みつ子

兼題「アングル」

見清選

アングルを弄るで万華鏡

充子

抜擢をされてアングル冴えてくる

清史

神さまを写すアングルつかめない

弘一

三六〇度君のすべてが美しい

理恵

父叱る母の立場でフォローする

千代

逆光で撮ると隠れてくれる皺

楓楽

アングルも変えようのない面構え
念入りにアングル変える試着室
孫と祖父アングル違つ読書感
ころつと視点変えてチャンスに巡り合う
アングルをのぞいて判る裏の顔
正面はやめて柄め手から攻める
第九条アングル変わる半世紀

房子
千莖子
日出子
一風
はじめ
甚一
みつ子

カメラアングル意識しながら謝罪する
素晴らしいアングルみんな笑つてる
鳥の目で見れば死角の多い街
アングルを変えようと落ちた目のうろこ
鋭角に斬り込んでくる君が好き
アングルが大胆になる冬木立
斜めから写してハレーション起こし
為政者と民の間にある死角

柳弘
朱夏
正坊
保州
扶美代
天笑
千恵子
朋月
雅文
睦子

窓枠をアングルにする槍穂高

朋月

アングルを替えて自分史書いてます

睦子

究極のハイアングルは宇宙から

陸子

アングルを変えたと見えた肚の底

正雄

アングルを絞ると沢山いる味方

比ろ志

アングルは無限やんまのデツカイ眼

弥生

アングルを変えて気付いた風の色

倫子

アングルに女の業が浮き出てる

くらり

アングルもポーズも同じセピア色

ふりこ

片べりの角度哀れな父の靴

桃花

兼題「アングル」

公誠

アングルによつては尻尾ある私

洋

横顔がきれいといわれ端へいく

耕治

兼題「アングル」

洋

兼題「アングル」

洋

兼題「アングル」

洋

鶴の恋カメラアングル雪が舞う
アングルに犬居て猫が居て平和
アングルは妻が紅葉か迷つてる

この向きの顔と遺影をはや決める
地

はみ出る子アングル広げ包み込む
天

観点を交え捨て石に賭けてみる
軸

前を見る角度を下げて丸く居る

兼題「風船」

米田 恭昌選

風船を離す子離れ親離れ

風船に呼び止められたドライパー
子供等と遊ぶ夢見る紙風船

紙風船追っかけていく母の膝
郷愁は紙風船と置き薬

紙風船つくとこぼれる亡母の声
青空の広さに迷う紙風船

紙風船ほんぼん里のかぞえ唄
鍵っ子が紙風船を踏んづける

糸切つて風船銀河の駅に着く
挑戦へ男が揚げるアドバルーン

ゆり籃のリズムに風船ゆれている
掴まえていてほしいと風船は思う

風船がとんでる着地探してる
風船は空の広さをまだ知らぬ

風船も私もやがて萎むだらう

正雄 潤子 さくら

耕治

たもつ

一風

充子 尚士 小雪

一風

正雄 潤子 睦子 隆盛

富美子 昭

愛論 恵子

舞夢 昭

千里

千里

風船の思いあまって割れる闇
風船爆弾忘れかけてる物語
風船の気楽さ知らぬ熱気球
風船のようなあなたが放せない

風船の冒険に空高過ぎる
風船に肺活量を笑われる

束の間の自由風船手を離れ
すぐ萎むので風船は大嫌い

とんでゆく掴みどころのない風船
風船もおんなも風に乗りがたがる

翔びたがる風船玉も少年も
溜息を詰めた風船あがらない

風船が割れて本音を撒き散らす
原爆に風船爆弾では勝てぬ

ウツ詰めた風船上にあがれない
ゲームセット風船上げる勝ち戦

勝関が上がる五万個の風船
風船の悲哀知ってる渡り鳥

風船がしばむ未練のかたちして
ペソかいた迷子は風船にぎりしめ

風船が欲しいと泣いた肩ぐるま
紙風船とてもやさしい風が好き

風船と一緒に消えたアンビシヤス
風船ひとつ飛ばすわたしのエピソード

風船ひとつ飛ばすわたしのエピソード

甚一 見清 和夫 希久子 千代 哲男 天笑 昭三 夕胡 比ろ志

千代 希久子 和夫 見清 甚一

はぐれ風船虎の遠吠え聞いている
兼題「かわく」
宮西 弥生選

血縁が乾く介護法の狭間
東京砂漠雨が降っても湿らない

嘘ついたり枯れたいしないコンバクト
菊活けるころ渴いてくる前に

笑おうよ心がかわかないように
泣き切った涙がかわくとき希望

虹のない街で渴いていく心
人情がかわく億ション建ち並ぶ

渴いたら還つておいで里の風
雑兵のかわきを癒す縄のれん

不景気に河童の皿も干涸らびる
募金する乾く心を癒すため

ナメクジも乾いてしまふ夏でした
法話きく心が乾かないように

絶叫と無言どっちも喉かわく
ときめきのかわかぬうちに紅を引く

ゴスペルが乾く心にしみてる
乾いたら少し泣いたら良いようだ

温暖化だらうか鼻がかわきます
少年の心がかわく飢餓の街

乾ききった心潤おす仏間の灯
あと継ぎが無くて乾いた休耕田

大根の切り口乾く妻の留守
からからの心に雫する言葉

充子 弘一 天笑 重人 楓楽 倫子 朝子

河童の皿かわき民話も消えた里
寺の鐘今日も乾いた音で
何もかも自己責任という渴き
干涸びたかたつむり待つひと零
地べたりの深夜に集うかわく街
封筒の中で次第にかわく愛
都市砂漠ベトナムを待ち歩く
人間の思考がかわく大都会

住

乾燥の秋は読経が透き通る
政治家の嘘つく舌はいつ乾く
真夜中のメール君もかわいているんだね
水をください都会の隅で濁く花
魂のかわきを秋のせいにする

サラダ山盛り心がかわかないように
かわいた部屋だ赤い薔薇でも活けましょう
天

地

こころ乾いて無性に海が見たくなる
軸

建て直し口かわかぬにまた余震

兼題「こだわり」

河内 天笑選

飽くまでも土にこだわる菊作り
七輪にこだわりサンマ焼いている
五キ口買う米に産地のあれやこれ
盆正月姑のこだわり受けついで
こだわりもなく酌み交わす仲となり

富子

とし子

楓楽

和香

柳右子

雅文

恵子

潤子

隆盛

寿海

良知

朱夏

扶美代

美代子

美代子

西

こだわりを活力源にして生きる
こだわりを捨てて掴んだ縁です
潤滑油のためにピエロを買って出る
OBがまだこだわっている序列
このひとのためにこだわる隠し味
酒ならば銘柄なにも問いません
無農薬にこだわり虫に愛される
こだわりを捨てて気楽な舟を漕ぐ
春夏秋冬こだわりを捨てきれず
少子化で雅号のような名前の子
こだわった自分の狭き見えてくる
ひとりにこだわる長いながい夜
こだわりを捨てて地域の輪に入る
こだわった一本道がつづいている
こだわりのコース選べぬ黄泉の旅
一〇〇年も前からタレを足している
キムチ買うだけの鶴橋通いです
こだわって選んだ嫁が様変わり
こだわって座っています隅の席
お手本の通りにしない花ばさみ
こだわりがあつて視線が宙を舞う
浮気にも哲学がある僕の自負
こだわりを捨ててゴクゴク水を飲む
こだわって産地直送してもらう
たべること好きこだわりは器まで
こだわりがあるので百科辞典ひく
につこりと一見さんはお断り

朝子

かすみ

千莖子

良知

求芽

一步

深雪

美明

冬葉

和夫

ふりこ

寂子

アキ

能子

公誠

重人

こだわりの一品と書き値上げする
納得のできる遺影がまだ撮れぬ
お手前はどうかあれおうすうまかつた
こだわりを捨てたら見えてきたあなた

弘一

保州

月子

理恵

こだわった末にシンプルイズベスト
銘柄にこだわりません秋は酒

地

こだわって傷を大きくするばかり
天

西出楓楽

仏滅の式場簡単にとれる

軸

11月までの本社句会皆出席者は次の通りで
す。間違いがありましたら、事務所まで申し
出て下さい。

浅野房子 石森利昭 稲葉冬葉 安藤寿美子

岩崎公誠 江口度 榎本舞夢 岩佐ダン吉

大内朝子 太田昭 鍛原千里 太田扶美代

河内月子 河内天笑 川原章久 鴨谷瑠美子

籠島恵子 木本朱夏 吉川寿美 奥田みつ子

楠 昭子 志田千代 玉置重人 小泉ひさ乃

西内朋月 藤井則彦 藤田泰子 高田美代子

板東倫子 坊農柳弘 前たもつ 飛永ふりこ

松尾和香 森下愛論 森本弘風 中村れんげ

村上玄也 初山隆盛 吉岡修 平松かすみ
吉村一風 吉村雅文 山田耕治 山岡富美子

(44名)

志せぬ情

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳おっばご吟社

木村あきら報

支え合う人と言ふ字のあたたかさ
 太平の世に物騒な核兵器
 物忘れいい処だけは胸の中
 走り過ぎ立ち止まるのも処世術
 ぶちまけてスッキリとしたノド仏
 国は今危機忠臣の出番待つ
 戦争とは失い悲し事ばかり
 盆踊り踊る姿に亡母を見る
 かいま見る人の心の裏表
 ネクタイを取ると優しい顔になる
 外人も流れにまじる阿波踊り
 枯草の下で新芽が競い合う
 ほんやりと枯葉のワルツに見とれる
 結願で安堵の顔に玉の汗
 曇り空私を泣かす偏頭痛

むらくも川柳会(前月分)毛利

稲刈りへ雲ゆき荒い空うらむ
 あの雲に乗って行きたい父母の星

ひかり
あきら
文仙
賢
かおり
吟笑
輝夫
放任
八重子
いさむ
治延
初恵
寿々女
貞月
よしみ
幸福
幸報

定子
清吉

夕立ちが来るかも知れぬ雲走る
 雲の影うつす川面に秋の風
 老いてなお雲のかけ橋バカな奴
 ひき時は雲の行方を追って決め
 雲掴む話をされて騙される
 痛い足治らぬままに米寿きた
 口開けて飛行機雲にみとれてる
 赤とんぼ雲に浮かんで群で舞い
 川柳の心残して雲の上

子の意見まだまだ青いサクランポ
 八十路坂まだまだ生きたい医者通い
 自画像の色にまだまだ思慕がある
 おりおりに名物運ぶ宅急便
 金銀とよろこぶ裏の涙声
 いい便りわるい便りに気もめる
 強風に戸を閉めこもる一人夜

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

街中が派手な看板活気出す
 看板が立派な店で入れない
 老舗守り看板光る秋の古都
 常識のマネー看板それも無視
 七難八苦祈る三日月鹿之助
 七彩の看板夢になう三代目
 看板の重さになう三代目
 月影へ亡夫の面影浮き沈み
 イチロー君看板になる大リーグ
 看板へ産声高く伯耆町
 客寄せの看板ばかり繁華街

秀子
彰
宣雄
美保
幸福
明朗
信夫
安男
克子
惠美子
秀夫
昭子
英男
ます美
八重子
千代美
鈴枝
公美枝
弘子
信雄
豊枝
静江
智恵子
久子
和代
正光

竹原川柳会

時広 一路報

金持って来いと看板まねくよう
 ゴッホの黄やがて私も火を吐かん
 黄昏のひとつとき命輝かす
 事故現場黄信号でもめてる
 向日葵の黄が圧倒するゴッホ
 お月さま黄色のクレヨン足りません
 幽女の黄色を照らし舞う螢
 傘寿から感謝かんしゃの亡母でした
 夢白寿句集に溢れるお人柄
 喜寿までは跳んで跳んでの花日記
 寿へ歩調合わせて妻元氣
 夢白寿しあわせ紡ぐ家族愛
 米寿過ぎ姑は可愛い顔になる
 鶴よ翔べ亀も歩めよ九十四
 讀書してベッドの暇を充電す
 何もかもプラスに変えて進まんか
 森羅万象行き先のない舟である
 畑仕事手車押して米寿なり
 食欲の秋です体重計しまっ
 気がつけばあなたの癖を真似ている
 竹まつり筥揚げに参加した
 バンブー坂登って鳥に癒される
 表札は竹白い髭出て来そう
 杉玉下がる造り酒屋の軒が好き
 夕焼けこやけこは何番浜だった
 山頭火こら歩いたはずの路地
 やさしさが湖底に沈む仁賀の里

雄々
幸
蘭
万年
静風
比呂子
節夫
輝恵
淑子
幸子
笹舟
厚枝
寿枝
半覚
汎美
菁居
笑枝
孝枝
史枝
千枝
正宏
栄恵
慶子
不朽
民恵

普明閣椿の頃を知つてますか
黄信号前の車は止まらない

川柳塔打吹

大森

李惠報

掃き寄せる昨夜の風の置き土産
強風が砂丘を変えて地図づくり
秋風と戯れている赤とんぼ
畑に立つ缶風車鳥を追う
風向きがコロコロ変わり困る妻
つむじ風心のすき間唄が寄る
風の盆幼馴染みを探し行く
乱れ髪ついほれました今は妻
策略の凶星つかれて乱れだし
さわるなよ火を吹き出すぞ妻の乱
シンクローは糸乱れず銀胸に
乱れ金知らぬ存せぬ記憶なし
乱れ果てんの衣にさかりつく
少し乱れて人間くさくなる
鈴虫に共食いという乱がある
宝くじわくわくふくらむ皮算用
ラブレター読んでわくわく有頂天
わくわくとお寺の門はくぐれない
席替えて意中の人の隣です
わくわくと母子とも元氣初産よ
わくわわと出会いはかつて散歩する
感動とメダルを生んだエーゲ海
わくわくさせて消えた花火のような人
介護は要らぬ立つも座るもどっこいしょ
介護してもらおう妻にはさからえん

千代美 一路

公惠 禎元 龍枝 久芽代 善江 和子 紀美恵 友楽 博文 重忠 貴恵 伊佐子 克枝 節子 螢 たけ代 美美子 照彦 清 みち子 玲坊 泰山 完司 玲子 幸子

老老介護長寿社会の舞台裏
美人ではないが介護は上手です
父母義父母資格はないが介護した
血管に介護保険がしみ通る
共白髪介護疲れの悲話ニュース

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

脳みそがレースになって行く不安
今週も台風よけて生きたる梨
孫去んだ後の大きな淋しさよ
一回り小さくなって秋むかえ
水筒にラジオも聞かせ犬まどう
元気のパワーカー朝夕貰う散歩径
嘘ほんとと人の裁きが揺れている
鈴虫の声に夜中もはげまされ
おせっかいすぎて平和が首を振る
世界中が狂い涙の絶えぬごと
飛行雲跨いで来たか赤トンボ
未完のままで終わらないう立ち上がる
芋のつる昔はむかし今はいま
どの花にも雨平等にふりかかる
メールにまけてデンプ手紙が来なくなり
五七五まだまだ未熟奥深い
事あることにやさしい亡母を思い出す
萩の道心安らく時がきた
長電話怒った葉罐走り出す
すすき原化かされるから走りだす
メダルラッシュの渦に敗者の背な姿
気がつけばいつもつまずく同じ石

和枝 美知江 京子 芳光 孝恵 天雀報 寿々子 那珂子 雪江 春枝 ふみ 紫泉 なみ 天雀 亜弥 すみえ 日枝子 てい子 やえ 晶子 初枝 玲子 田鶴 恵子 ゆき 千代 千春

平和日本心の荒むニュース聞く

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

皿いっぱい女の夢を盛って秋
平然と見守る親の眼の温さ
誰にでも一つは偉いところがある
秋の扉がレコード盤ののってくる
実篤の皿で仲良くしています
油切れ笑っています膝の皿
受け皿があまり立派で子がしばむ
平然と構えこめかみ震えてる
平然と昨日の意見覆す
平然とむかしの彼が年賀状
平然と妻への糸を切っている
平然と夢に向かつて打つイチロー

瑞枝 壽子 和子 あき子 輝子 保州 美子 年子 准一 怜 よしこ 豊太 和

佳句地十選

(11月号から) 今

愁女

中流の位置だんだんと流される
欲を積み過ぎたら積木崩れ出す
くらしには淋しい漁火が重い
燃え尽きた蟬がきれいに死んでいる
吊橋は渡り切るより他はなし
買い出しは待てと出てゆく釣天狗
これ以上もう無理ですと古鏡
やれやれと思うそれともまだまだか
罰ゲームだろう地球も人も病む
最高の祝辞妻子のおめでとう

義子 一路 定男 一慧 あやめ 勝巳 君枝 緑骨 洋々 寿美

落雷へわたしの海は凩いでいる
偉いのは真面目に生きてきた心
えらいとこえらい奴らに見つかつた
口惜しさを越えて称えるから偉い
レコードのびげりに疼くものがある
戦没の民へ捧げるレクイエム
森みっちゃんの舞台レコード放浪記
LPのフランク永井にっこりと
永遠のテーマ新記録に挑む
新記録明日は追われる身の不安
ブルースもタンゴも好きで捨てられぬ
イチローの記録を破るのは自分
諦めずレコードを追う夢一つ
悲しい酒LP盤に今も生き
レコードの針は青春通過中
大音響で鳴る青春のレコードよ

川柳クラブわたの花 井尻

夕胡 華やかなマニキュア跳ねて手話の人
精子 夏の胸青春はるかネックレス
三喜夫 古里の小川に残る幼き日
さち子 悪口は尾ひれがついて泳ぎ出す
和重 定年後きれいな爪をひとり切る
泰香 エリートに日本がワヤにされている
和香 出張の地酒土産に花が咲く
克子 即実行老いし二人の旅サラダ
三男 さんまよ秋刀魚皿いっぱいに波の音
正博 独りでも粘って城を出ない母
稚代 好きさだけ呑みなと医者も匙を投げ
英子 お供へのせんべい湿る早梅雨
大茂津 国産の松茸匂いだけ嗅がれ
佐一 金メダル大和なでしこすこい腕
大輪 親友とゆうても実は恋仇
緑良 親よりも背丈越えてもまだ頼る
民報 生まじめがマイナスになりボク独り
八寿子 降る星を見つめていたら仲直り

民報 遠山 可住報
八寿子 お出かけの支度あれこれ常備薬
はじむ 母からの味受け継いだ祭り脂
道子 ギフト券さばさば遣って笑い合う
宏至 騒がした昨日を詫げる酒の酔い
ミツ子 組板のくほみ私の五十年
キク子 永住の地に溶けこんだ五十年
君枝 五十年汗滲む稲田預けます
宏 肩書がつくと名刺が騒ぎ出す
一風 坂道を転げて石も丸うなり
きらり

欣子 歩む道八十路になつてわかりかけ
幸枝 アルバムを出して五十ははまだ若い
晴美 積めるだけ積んでさばさは娘は帰る
俊三 あの時も神の力で越えた坂
正純 五十年暮して土地の人になり
一 道 役退いてさばさばしたと言ふ未練
高木 打ち明けて沙汰を静かに待っている
高木 高齡化坂の酸素が薄うなり

川柳大阪 高木 信酔報
通帳を替えた途端にまた合併
幸せは我がつくるもの夕涼み
なりゆきで不意に女の白い足袋
往年のアルビニストが膝を病む
出合いから燃えた私のほんまもん
餓鬼大将の勳章だった膝の傷
膝枕孫は笑顔で耳そうじ
履歴書に如何にも燃える顔を貼る
お袋の味と気安くないですか
中くらしいの燃え方がいい歳の恋
泣き笑いせいでいいこの世楽しまん
減塩と腹を八分で長寿です
両親の膝温かく嫁がぬ娘
対立を対話に変える人の知恵
新米の夫婦サンマが燃えている
名を伏せて二億円の当りくじ
意地つ張り夫婦で越えた山や谷
病む丸条特効薬は票とペン
大正も九十祝の中に入る

開子 富子 房江 八重子 泰男 哲男 芳郎 可住
きよし 春蘭 民 東吉 芳香 一風 タカ子 宏
ダン吉 朝子 朝久 章久 ひろゑ 和子 笑風 本蔭棒 鉄心 川童
三十四

外食が増えてエプロン淋しそう
古里へ蟬出迎えの無人駅

毎度です願いを込めてジャンボくじ
膝頭おだてて下る下山道

友と飲む外食今日のトゲ抜ける
哀悼の誠が改悪なのですか

年金の怒りに燃える火は消さぬ
身ざれいにせいせい通す老いの徹

座禅組む膝に悟りがまだ遠い
かあさんが膝を正すと何かある

嘘つかぬ山に登れば気も軽い
コツコツと重ねた知恵の展示会

お祭りを盛り上げ町が展かれる
展かれるイベントを待つ秋の空

百寿から展いてくれる西の空
道筋を展く明かりが見えてきた

いいことを書くベン先がよく走る
昼寝すみ孫は時間がわからない

昨日まで走った足が動かかない
温泉と蕎麦が見事に町展く

大根を並べて展く農業祭
進展の構え誰より一歩前

ヤンサノエー浜辺で展く貝殻節
逆縁を展き時には夜叉になる

展望を遂げるには齡とり過ぎた
赤トンボ群れて個展の秋景色

風孕むように市政として展く

喜楽

照月

かよこ

柳昌

美花

一步

洛醉

重人

まつお

信醉

螢報

なが子

かおる

喜みえ
喜与志
みどり
幸枝
武子
茶子
久枝
公子
弘子
節子
孔美子
富久江
くに子
諷人

色即是空裏絵展からもれてくる
展望で下界を見れば世が変り

この天で展くわたくしの個展
懐が温い世界にあこがれる

インターネット世界へ私も仲間入り
野球界ファンとともにいい歩み

地球儀を回し世界の旅をする
世界一綺麗な月を眺めている

お前等に男の世界わかるかい
空想の世界で生きる落し穴

わたくしの世界に浸る香を焚く
七難八苦画像に映る皺の数

マレー観るとき敬虔な画をあおぐ
零戦の画像が浮かぶ白い雲

岸和田川柳会

原 さよ子報

引き抜いた板さん頼る京料理
引き抜いた大根私の足に似て

引き抜いた野菜近所におすそ分け
リストラも引き抜きも無い小企業

引き抜いてみたがさっぱり間に合わず
二泊目の宿糠床は無事からし

無事定年妻の我慢はこれからだ
子育てが無事終了の披露宴

特攻隊無事とは無縁心意気
ほほえんで腹に一物嫁姑
ごめんねと言つてほほえむ人違い
和顔愛語寂聴さんのお説教
モナリザのほほえみ真似て顔がつり

彩子

房子

盛桜

八重

みさ子

立亥

和子

陸子

はるお

実満

きみ子

菊乃

汲香

螢

飛行雲まつく伸びている佳日
まつくぐに伸びよと時に愛の鞭

まつくぐに伸ばされ胡瓜不満顔
まつくぐに打てば素直に入る釘

まつくぐと思つた道を振り返る
弥陀の掌にまつくぐゆる経を読む

まつくぐに歩んだ道に悔いはない
別人になつて出てきた美容院

別人になつて楽しい縄のれん
酒召せば別人になる可憐妻

鉢巻きを締め別人の顔になる
あなた今日だけは全く別人ね

愛猫の恋の遠出の無事待つ
引き抜いた男に席を乗つ取られ

四番打者引き抜くように集めたが
引き抜いた薯へ園児の誇らしげ

京都塔の会

都倉 求芽報

いきさつに自信があつてティータム
いきさつはどうあれ嫁が来てくれた

思わざるいきさつ長い夜になる
親は子の踏み台になる輪廻

一歩歩ナマ一杯で台無しに
叩き台へ遠慮はしない赤いペン

表彰台囁んで見せてる金メダル
麻酔して素直になつた手術台
憲法の土台危ない守らねば
踏み台に乗ると今度は降りられず
視かない方がよかつた舞台裏

蛙城

ゆり子

東吉

守

ダン吉

仁緑

狸村

路子

さよ子

笑司

甚一

寿海

弘子

清
鍊太
呂万
百合子
満子
求芽
輝美
ますお
庸佑
萬的
典子
正坊
則彦
葉子

リフォームを妻が夢見る台所
流行を追ってオバサンみな同じ
過去追うている間に今をとり逃がす
追うものの強み追われる息を読む
かき氷残暑残暑と稼いでる
だからだと暮らし残暑をやりすこす
残暑にも我が道をゆく曼珠沙華

長柳会

村上 直樹報

土臭い男の汗にあるロマン
土けむりたててセーフに白い歯が
大好きなあの娘と別れ共白髪
土を塗りエステに励む美白妻
再会を誓った戦友よ今いずこ
さそわれて北の大地に根をおろす
またピンチ逃げ口上を用意する
お土産を忘れ出張疑われ
はつぽつと土に帰って行くいのち
逃げられぬ稲穂が首を振っている
逃げること出来ず向き合う夫の癌
逃げ足の速い歳月追う暮情
何欲が一番綺麗なのかしら
周囲から過保護にされる土踏まず
収穫の土も一緒に来た荷物
コスモスの駅で別れた赤とんぼ
合鍵に一筆添えてさようなら
大地ふむ男になれと吾子育て
故里の土が知ってる父母の汗
何をあくせく何時かは土になる命

尚士 高士 千差子 欣之 信哉 益子 宏子 直樹 明信 マサ子 靖博 ひろし もこ たけし 武男 てるこ 和一 正一 和代 淳司 三和子 よしお 一慧 靖子 明子 幸雄 敬二

嘘ひとつ混じり土石が崩れだす
別れにも明暗がある人生路
喜怒哀楽積もり豊かな土となる
土を出て蟬ひと夏の恋終る
しがらみを抜けて女は駒をふる

城北川柳会

神夏磯典子報

紳士服売り場はいつも閑古鳥
ラフな服同じ人かと思える
初訪問 表門にて深呼吸
粉乳で育った子らに背を越され
あべこべに踏んだ人からあやまれ
社の空気が上司ドライで活気つく
うちの奴ドライで味の無い女
夕焼けに子供の歌が通り過ぎ
活力のものは寄り道回り道
この世には裏も表も抜け道も
不機嫌な髪に手こずるドライヤー
裏表分かってからは転はない
裏表有って物事甘くゆく
背負ってた子に背負われる歳となる
表向きだけの話が歩き出す
知らなんだ知られなかった裏の裏
暴れたいけど何食わぬ紳士面
上よりも下が一番親孝行
姑が嫁の機嫌をとっている
温度差を確かめている昨日今日
実る田の案山子に着せた紳士服
あべこべになる日信じて嫁我慢

富美子 芳野 正美 英美 けい子 政子 美代子 はじめ 美智子 静枝 喜美子 久留美 八重 重人 あやめ 求芽 典子 柳一 一枝 達子 高栄 正 あい子 倫子 春蘭 志華子 順三

児のオムツ器用に替えている紳士
表から入れぬ訳があるのです
表には見せない母の深い傷
出る杭が打たれるたまったその願
泡のように消えてしまつたその願
ネクタイも名刺もいらぬ軽い肩
かんとんに金で話を片付ける
金蔓の切れ目でさつと縁を切り

高槻川柳サークル卵の花 田中千莞子報

台風がむぎむぎにした誕生日
浮き沈み老後は浮いて取り返す
別れたい返事へ沈む角砂糖
沈んでも浮く瀬のあるを知っている
川底の石の丸さに教えられ
浮いた時のちが枯れる水中花
地図のない川で人生浮き沈み
沈黙黙答はいつも後にする
もう酒を呑んでも良いと陽が沈む
影法師脱線してもついで来る
庭下駄を履くと脱線したくなる
すぐ脱線される生徒にもてます
廊下で脱線講義盛り上がる
脱線した後の葉がほろ苦い
脱線をするほど飲めた頃が華
助手席が右や左とやかましい
右左よろめきながら喜寿を越え
左右見て付和雷同の意気地なし
左手も添えた握手で出迎える

とし子 千里 ひさ乃 集一 修子 史風 公一 奮水 あやめ 典子 照子 萬的 晴美 活恵 尚士 砂輝守 宏章 秀夫 宵草 とし子 治三郎 美義 義一 千莞子 比ろ志

去つてゆく足音ばかり左前
妻の愚痴さからわなないで生返事
生返事ばかり残つた三次会
最初からあてにしてない生返事
生返事されて虚しい酒になる
煮え切らぬ返事へ女向きを変え
言ひ訳の矛盾深追いせぬ情け
オレオレの話題が弾む老いの会
羨だと言つてコワイ親が増え
また一つ嘘が本音を押しける
答などくれない旅が好き

倉吉川柳会

竹信

照彦報

棺桶に改造できるベッドです
二十歳なら整形もする八十路では
よく転びバリアフリーに改造中
百選にえらばれ勝ちに改造出来ぬ羽目
恋猫が本気で威す恋敵
人間を威す可愛いキヤラクター
父危篤威してやるから息子
威すない威すすぎたどんどろけ
おどす父だけど負けな母がいる
威し文句妻は離婚を盾にする
威されて復興の名で派兵する
隣の猫へ茨の威し利いてくる
恰好は忠告なのに威してる
われ勝てり威し文句に倍の弁
罪洗う入浴剤はうす緑
目に緑しっかり吸わせ入院す

メ女 祐一 孝一 美子 美子 武史 庸佑 稲子 求芽 昭 完司 日出子 賀寿恵 喜美子 悠子 次男 螢 重忠 泰輔 風露 和子 ゆり子 大鯨 十三男 和枝 荻江

青信号見れば見るほど緑色
ピーマンを焼けば緑のいい香り
地滑りで緑の山に消えた友
ほろ家ですまように緑の大山が立つ
ときますますくらしを知らぬ母徳ぶ
電化したくらしを知らぬ母徳ぶ
困りもの母になりたくない娘
母が来てくれたうれい参観日
子育てを終えた乳房がまだ温い
介護する母が感謝の手を合わす
疲れたと言わない母の背をさする
子がみんな母の味方になっている
亡母さんはカタカナだけで書いていた
内閣改造しても希望も夢もない

西宮北口川柳会

黒田

能子報

どしゃぶりの中駆け抜けた靴を干す
ちびた靴苦勞をさせて捨てられず
ガラスの靴よりも大事なひとがいる
亡父の靴びつたりだから僕がはく
もうギブスははずせと急ぐ登山靴
靴贈る地団駄踏まぬよう祈り
もう一度出直すつもり朝の靴
仏様へ野の花を摘むスニーカー
積る話の花を咲かせて秋夜長
生甲斐を積んだ豊かな趣味の彩
孤冠り年中積んであるお宮
先ず握手積る話はその後で
預貯金とロマン見積るワンルーム

龍枝 喜美子 秋草 康子 やえ 京子 石花菜 玲坊 よしえ 勝誉 幸子 睦子 照彦 富喜子 松煙 いわゑ 静子 五月 光子 哲子 涼子 絹 哲男 鹿太 奮水

容赦なく積り積つた誕生日
積年の怨みつらみを消す夕陽
教えてた相手に石を置いて打ち
水たまりに教えられ老いてゆく
亡母の歳越えて教えて欲しい事
知識駄目知恵なら教え仕る
カタログを見ながらやぶる宝くじ
カタログに振り回されている私
カタログの中で秋風さがして
どうしても好きになれない電子音
七回忌あの夜と同じ風が吹く
糠漬の茄子のルリ色しみる朝
つまずいた事は言わずに石をける
隅っこの重たい風が吹いてゆく
青空に祭太鼓が唄いだす
悲しみはいえたか白い歯が覗く

川柳塔なら

坊農

柳弘報

仲人の宣伝信し妻にした
猫抱いて親をさげてる核家族
糠漬に核反応がおきている
線香の香につつまれて経を読み
余生まだ自分探しに読む一書
アメリカの顔色読んでる総理
引き際が読めず火傷をくり返す
続編の中味を知っているつらさ
核になるラガー炎が駆け抜ける
胸深くいつか真珠になる核よ

孝一 光久 朋月 たず子 美代子 いたる キク子 歳子 良恵 文子 トミエ 能子 房子 求芽 紀乃 嘉代子 博一 とし子 冬葉 千梢 登美子 富子 春雄 春蘭 真理子

家計簿のプラス記憶にありません

水際でプラスマイナス採めている

花の輪で囲まれているパンコ屋

幸せはプラス思考の妻が居る

足し算は得意引き算苦手です

女の核燃やすページがきなくさい

ミサイルも核もあるのにパンがない

金釘流すなり読める母便り

バツイチを宣伝遊び馴れしてる

履歴書を書いてヤル気の顔を貼る

所在無く車内宣伝読まされる

裏読んで疑心暗鬼をつのらせる

金平糖の核は自信を持つている

核廃を叫ぶムンクの知る地獄

核家族大事なもの忘れてる

五キロ増えああ食欲の秋となる

読まなかったことしておく娘の日記

彼の岸へ人のこころが読めぬまま

反核の折りとかかぬ風の街

過疎の里プラス思考の土を打つ

ほたる川柳同好会

水野 黒免報

秋の空折鶴らんが風に舞う
腹心の一人上手に芝居する
七十年一人芝居も柁が入る
コスモスを折って台風頬かむり
猿芝居貴賓席には議員さん
震度4机の下にもぐろうか
鉛筆を削ってシン折る無器用さ

柳童 柳女 よしろう
勇治 信男 春代 契子

修

流行作家時の流れに筆を折り

読書中断ページの端を軽く折る

決め球はバットへし折る豪速球

誰よりも私知ってる古机

ひざ折って深々謝る部下のミス

ほろ苦い芝居を演じ見舞客

スポーツ紙は脚を机にのせて読む

机の上直球だけでない軌跡

一芝居打ったつもり勇み足

先輩の机に残る傷の謎

芝居でもいい優しさの欲し輪

人生の独り芝居にあけくれる

リストラで空いた机の無表情

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

和服着て涼しげなお顔して

作務衣着て自由の風の中に立つ

表札で今も我が家を見守る亡夫

母さんのひと目でわかる表書き

表札に男社会がまだわかる

青林檎かじれば青さ挫折感

千円の駅弁旨い同期会

蛇行する川哲學子を持つている

曼珠沙華庭に咲いてる角の家

上すべりでしたが生きた青い雲

惜し気なく忘れてしまふ古い憎し

伐られても古木どっこい新芽吹く

コーヒーはブラック夜長人となる

人の子と生まれ秋の蚊を潰す

直次 久子 正三郎 礼一郎 黒兎 見清 桂子 雪勝 昭子 敵子 祥風 千恵 武庫坊 幸子 純 勝巳 芳三 昭三 紀乃 正子 寛之 年代 東園 半蔵門 薫

夕顔の白さに透ける今日の罪

丸い背をウインドーに映す秋暮し

恥じらいを見せコスモスが下を向く

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

独り寝へまさかの月に癒される

馬鹿にした保険まさかの役に立ち

今もお心居場所探してる

豆ほどの夕陽見たさにガラス拭く

さりげない親切こころ温まる

同窓会お国なまりの演歌節

しあわせか夕陽私に問うてくる

一日の疲れ夕日に迎えられ

大記録イチローに見る修業僧

熊が出て騒ぎ始まる里の秋

親切な店と評判よく売れる

点滴を見つめる窓も夕やける

寄せて引く君と似ている赤トンボ

従順に演じ切ってる魔女の貌

一喝の父が目の奥笑い掛け

ありがとう茶髪に席を譲られる

釣り人の影長々と夕陽落ち

情熱を燃やしつくして陽が沈む

親切な人に出逢って酒うまし

親切が汗にしたたるポラントピア

追憶へこころが疼く秋の風

川柳塔唐津

仁部 四郎報

出来のよい我が田倒伏してしま

和子 和子 久子 久子 晴美 五月 よし子 カズ子 玉枝 秋子 美代子 耕治 勝巳 折杭 亀与子 イサミ 義芳 正治 孝一 鹿太 まさ 江美 全彦 求芽 美籠

和服着る妻の下僕に甘んずる
 反對をされてもむすめ嫁くつもり
 黄桜に酔つてカッパが踊り出す
 週末の台風列島Uターン
 プロ野球荒れてオーナー慌て出す
 よく考えよ子供は減るばかり
 戒名に忠義の字あり若い父
 通院の終りを告げぬ開業医
 愛染とはいい名負けをしないよう

かわはら川柳会 上田 俊路報

月明かり影を盗んで遊ぶ子等
 欲しくてもぬすめば罪と理性心
 こっそりと盗み涙で磨く技
 ぬすみたい君のハートに隙がない
 夕焼けはぬすむ心をぬぐい去る
 あの人の心ぬすんでゴールイン
 学び舎で人目ぬすんで咲いた恋
 実りの秋ぬすみにくるはずめたち
 盗んだ夢雑踏の中風と消え

三幸川柳教室 古久保和子報

本音だな目線合つても外さない
 生傷の絶えぬ本音で生きている
 直球の本音ばかりで孤立する
 建て前の奥でむずむずする本音
 水深を測り本音を少しずつ
 いつも本音いつも火花を散らしてる
 夫婦万歳本音で渡り合っている

蜂 朗
 高明
 水笑
 晴翠
 輝夫
 勝規
 四郎
 正劍
 虹汀

雅 予
 かず恵
 寿 子
 良 子
 悦 子
 好 道
 余 史 子
 登 生
 俊 路

昇 子
 靖 子
 徑 子
 イセ
 次 根
 和 子
 公 子

胸襟を開けば転げだす本音
 潮騒に貝の本音を聞き洩らす
 顔洗い今日のピエロを剥きおとす
 幕下りてピエロ自前の靴を履く
 銃握る役は絶対せぬピエロ
 ピエロとて疲れが溜まる介護の手
 逆縁の辛さ隠しているピエロ
 病み上がりピエロのようなスボン穿く
 自画像の鼻描き足しているピエロ
 幸せをふり撒き瘦せてゆくピエロ
 屋上で二三発見る遠花火
 涼み台音だけ聞いて遠花火
 暗くなるまでも待てない子の花火
 団扇バタバタ話が弾む遠花火
 平和です気力も失せて歳を取る
 気持だけ募金もします平和主義
 寝息きこえる距離に布団を敷く平和
 猫もまた平和な顔で伸びている
 月末になると平和が崩れ出す
 愛妻にすべて任せて平和です
 原爆ドームを世界遺産にした平和
 おみそ汁昨日と変わりない平和
 垣根越しの枝が平和に水を差す

高知川柳社 川竹 松風報

支持率によって自信が揺れ動く
 七転び八起きでやっつとつく自信
 あと一步踏み込む自信ない恋で
 自信句のなんぞでなんでしょう没

清 史
 碧 子
 かずみ
 八重子
 起世子
 みね
 当代
 武 子
 登美代
 朱 夏
 孝 義
 信 子
 義 男
 千 秀
 清 子
 幸 子
 かず子
 美 子
 准 一
 智 三
 保 州
 章 子
 町 子

圭 二
 功 雄
 孝 雄
 快 風

人の輪にとけこむ笑顔持っている
 目の色で揺れる心を見抜かれる
 妥協点見抜き相槌深くする
 見抜かれた時から嘘が上手くなる
 泣く拗ねた女の武器を見抜かれる
 神様に恥じぬ生き方したいもの
 私の見抜いた妻と老いてゆく
 誰の目も膝を叩いて大笑い
 子の嘘を母は見抜いて知らぬふり
 引き算の余り淋しい預金帳
 善人ですぐ引金を引ききたがる
 福を引くチャンスはきつと来る余生
 カーテンも引かず夜更かす熱帯夜

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

生き方を草の根つ子に問うている
 緑濃き人工芝に明日がない
 草笛を兄が吹いてた赤とんぼ
 忘れぬ草下敷にしてビルが建つ
 山川草木ふるりの景は我が身内
 生き急ぎしていませんか雲悠悠々
 急いでも急いでも老い追い抜かれ
 極楽へ急ぎ過ぎたか孤独の死
 急がねばならぬと牛も知っている

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

相乗りはできぬ天国行きの雲
 生きるとは泣いて笑って乗り越える
 用なしの顔をされます専用車

幸 子
 まき子
 哲 史
 悦 子
 てるみ
 和 江
 佳 風
 京 子
 松 風
 美 々
 良 雄
 暖 子
 みどり
 能 子
 あずき
 慶 子
 弘 直
 シマ子
 加津子
 香 住
 欣史子
 喜美子
 幸 生
 民 月
 菜 月

御堂筋リズムのつているサンバのつげから乗る気なかつたコースター
悔いのない明日へ歩いていく歩幅
あの人の足跡探す日記帳
ハローワーク重たい足で今日も行く
食わしてその一念で生きた父

駅弁が満たす車窓の秋深し
人食つた物言いきる子を張り倒す
給料日家中で行くまわり寿司
夢を食うべし少年と輪になつて
ちぐはぐな野菜届いた母の里
産直のキャベツ虫まで新鮮だ
産地から届いた芋の力こぶ
産直の鯨一頭どうですか

検査には体調よい日行っている
息の根をうすい辞令に止められる
割の食う話ばかりの日曜日
続編はもうないだろう秋桜
天も地も少し狂つて鐘乱打
どこまでも女で男意識する
流されてくもりガラスに明日を見る

わかあゆ川柳会
松本はるみ報

札束の前で優しさ消えていく
やさしさを表に出さぬ鬼瓦
神様も都合によつて味方する
ひたすらに教えを守る水車
つまずいた石に世渡り教えられ
嫁つた娘が十字路の出口問うてくる

きらり
弘直
欣之
一風
宏至

さらり
直
欣之
一風
宏至

そつと手をかしていただく歳になり
神様に叱られそうで頼めない
教えとは戦争 平和 二分する
かすり傷ぐらひは黙つて舐めておく

富柳会
池
森子報

本当の勇氣を知つてゐる無口
空の青海の紺碧良し美らの島
風紋は風の悪戯風の私語
糸トンボ唯今優雅に恋愛中
寝められてバラ赤くなり青くなり
ナンバ発美人の横にいる至福
息をする度に膨らむゴミ袋
逝く夏を少し騒いで見送ろう
噴水のつてん秋が虹色に
朝顔の一輪利休にある美学
哀しみを越えて海へと続く道
少年は見る大人には見えぬもの
首すじのあたりがクスツと秋の恋
凜とした後姿でいる独り
掌のくぼみに二人丸くいる
太陽と踊り狂つた日の孤独
楽天使一合の酒で雲に乗る
シンガポールで生きる勇氣の水の中花
真ん中も端もない一本の道
下つ端がいつも夢みる下克上
痴漢の手掴んで声を出す勇氣
目の端にいつもとらえているあなた
あの雲の彩が溶けない蝉しぐれ

伸子
博利
清泉
白汀

葉脈のすかしを埋める淡い恋
スベアキー今更過去を偲んでも
うやむやにされて眠っている異国
ポケットに小さくなつてゐる勇氣
本物の勇氣をもらう日の地熱
端つこに座して人間まで遙か
ひとしきり耐えて勇氣を引き寄せる

岩美川柳会
石谷美恵子報

暴風雨走る約束ひとつある
雨よ降れ私の罪を流すまで
秋雨に健気コスモス耐えて咲く
血糖値氣遣いながら飲んでる
氣遣われ過ぎて帰つたお婿さん
わたくしを氣遣う人の名は言わぬ
氣遣いは大根だつて知っている
砂丘での別れ砂だけ掌に残る
幹事長ついに円形脱毛症
優しい女になると言う寺参り
進展のない苛だちに無理を言う
少しでも進展すれば御の字だ
孝行をする氣にさせた痛告知
進展のないまま拉致の子はどこへ
沖繩の進展のない基地で泣く
知恵の輪が解けてこれからやる構え
進展は先ず無いだろう難題だ
進展の兆しか霧も晴れてきた
進展の出ない話じゃ歌と酒
泣きまわらもう消しなさいお母さん

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

忠良
圭一郎
孝男
完司
はるお
和枝
葛子
一京
石花菜
螢

変身をしたくてホクロつけてみる
胃の中のほくらカメラに救われた
ほくらから別れた子だと見抜かれる
張りきれば顔のほくらが艶をだす
泣きはくろ一つつけてる夢二の絵
語り部の諺を聞く耳飾り
諺は親の嫉にように似てる
氣遣いをよそに冒險する若さ

岬川柳会

八十田洞庵報

しがらみと絆を分ける愛ひとつ
水害の爪跡深い土へドロ
御用心甘い誘いが牙を研ぐ
散策に話弾んだ秋日和
細心の注意足元見つめてる
荒波を越えて夫婦の絆接ぐ
屈理屈へ言いはある過失致死
絹豆腐よりも木綿と源氏の出
児の笑顔ながめて楽しい夕の膳
糸口を教えてくれた鉦の音
よいお酒席をわかせる人の味
オイとハイびびき合ってるいい夫婦
価値観の違い認めて老夫婦
ぬくもりを残し絆の形見分け
自販機は未成年にも煙草売る
落石に注意古びたままに立ち
虫の音が胸にひびいて秋深む
だんじりの細心とどくやりまわし
一億円価値が記憶にない政治

一 雅 一 和 美 幸 富美子 芳子 孝子 信博 蛙城 桜琴 重人 悦子 倅子 茂平 令子 里子 洞庵 年子 みやこ 貞夫

むらくも川柳会

毛利

幸報

柿なますすしばらくぶりの母の味
語りつつ夫婦で孫へ柿を剥く
寒風が吹いてうれしや柿のれん
柿食つてからすアホウと笑つてる
柿熟しカラスと私にらめっこ
柿食えば田舎の家が温かい
干柿を作る夜なべの母の顔
柿の実がたわなに実る秋旨し
柿八年鳥が先に知つていた
忘れたい思い出ばかり盆の月
強風に戸を閉めこもる一人の夜
いい便りわるい便りに気もめる
盆供養次々浮かぶ人生譜
町村合併トントンびく槌の音
パソコンの変換キーで字を忘れ
とりどりの靴玄関に盆の客
料理人ネタが良けりや味も出る

秀子 清吉 信夫 英男 安男 克子 定子 幸 明朗 惠美子 八重子 ます美 寿 美保 昭子 喜美

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

切り札はハートのエース逢いに行く
定年後すつと自分が薄くなる
山かけた馬券が見事ホームラン
子期しない小遣い入る空財布
紺碧の海を薄めて土下座して
大口をあけてりんごの丸かじり

柳子 誠子 あすなろ きよし 夕香 てる

空を切る居合剣士のうつくしさ
薄もやの中であなたを確かめる
傷口を愛し愛し切り人工弁
日本の美には切り絵の芸がある
切り口の乱れ気になる花鋏
リズムカル母の包丁鋼捌く
秋来ればははの音するみじん切り
銃口が錆びる間がない地球です
裏切りは絶対しない茄子の花
僕だけの風を占う薄い胸
煩惱を断ち切るように蟬時雨
にんまりと厨房で飲む昼の酒
こつこつと溜めて喜ぶコガネムシ
一枚の落ち葉はははの手紙かな
耳薄さえにしか母もその母も

準人 ヒサ子 順風 銀波 ふさゑ 花匠 雅城 井蛙 岳水 黙人 慕情 花峯 一花 五楽庵 彦 吐来 ヨシ枝 耕策 庸佑 みつこ 悦子 たけし 志津 美代子 六一点 真一

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

お薬を時計代りに生きている
人並みの暮しに挑む古稀の汗
生活苦みせぬりっぱな妻の足
平凡な生活飽き足りぬ若さ
くらしの輪縮めて丸く生きている
花一輪少しゆとりが出来ました
警察もあつてはならぬ事もする
警察で一夜過した赤い鼻
鼻の効く犬をワイフが飼っている
この臭い泣いていたのはおむつやな
くんくんと不正の臭いする市長

いつまでも気持ちはヤング楽しもう
ヤングマン西條秀樹も老けはつた
五体みな老化進めど気はヤング
ありがとやヤングに席を譲られる
八月忘若はあの日の若いまま
還暦もまだまだヤング長寿国
ここだけの話へ声を低くする
低姿勢いつかいつかと夢を追う
老母ひつひつかり暮らす低い屋根
ヨン様と走る私をほめている
八起き目に転んでからの回り道
来る秋に笑い袋を縫っている
銘水の里に銘酒の蔵がある
ツルアキラ今の日本をどう見てる
あの騒ぎ今は懐かし蟬しくれ
主役とおす人生という大舞台

川柳ねやがわ

森

物語り遠くで笛が鳴る月夜
満月を眺めて心まるくする
月明かり月下美人の命乞い
驚いられて月夜の蟹のようなすね
晩鐘の音さわやかに月の冴え
口びるを盗まれそうない月夜
風誘う食欲誘う月に酔う
失敗だ笑うしかかない照れ隠し
腹の底から笑うあなたが好きになる
笑う日のために涙と汗流す
につこりとせまられうんというていた

フジ 久仁子 いさお 重人 扶美代 章司 かつみ 一壺 泰子 喜久子 一知 りつえ 猿杵 敏 昭平 ダン吉 西報 とし子 ルイ子 れい子 仁清 たもつ 柳弘 勇太郎 亜成 朝子 忠央

お見合は笑顔にひかれずぐに決め
明日からの夢を笑顔で語り合う
ライバルのうすら笑いが気に障る
笑われるたびに身につくものがある
幸せを追って汗する峠道
み仏に会いたく登る寺の坂
坂道のほどよい位置にある茶店
坂道を転がる総理夢にみる
坂道を斜めにする秋日和
ブレイキの利かぬ坂道からドラマ
坂道は神が造つた悪戯か
気短ですぐ怒るのは生れつき
私が怒るとみそ汁が辛い
世の流れ昨日の部下は今日上司
年金と聞けばダンボの耳になる
体重がまた増えそうなの膳
指切りを指の数だけしてしまふ
甲子園アテネに花火夏終る
雅子さままだ山登り出来ません

西報

川柳塔エスポ

山本

出すぎないよう心して古桶すこす
バスツアー美人同席嬉しいなし
化粧より笑顔にまされる美人なし
ああ先生バツジ外れてまた土下座
何事も時の経緯が解決し
新調に袖を通して老い忘れ
友の煮た里芋おいしい十三夜
コスモスと食べ放題のバスの旅

日出子 日 勲 庸佑 恵子 洋 栄二 弘一 利昭 九好 かつみ 博泉 さち子 西 あやめ てまり 三郎 修 一炊 度

三郎報

托鉢の僧もベンチでひと休み
米盗られ案山子も嘆く秋まつり
人生の落し穴にもしるしほし
八月は散華のみ霊まつる日々
声高でひとり言言う八つ当り
源泉と書く温泉に先ず入り
幸いを探しもとめる老いの坂
戦争のむごさ年毎あぶり出す
活気呼ぶ旗ゆらめいて秋まつり
惜別の握手に残る掌のぬくみ
素通りの金に泣いてる給料日
ファッションは飼い主よりも犬が勝ち
ゴキブリよおれが減ぶか温暖化

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

さち子 星花 一炊 とし子 三郎 任有 高栄 一幸 とよ子 さとし 恵美子 鈍甲 洋々 圭一郎 美恵子 山節子 前三津子 公一 昌鼓 益夫 秀夫 静生 毅 義徳

マイペース通し薄情だと言われ
 メリットはなくてもそばを離れない
 目線替えプラス思考で舞っている
 ほどほどに舞って人生面白い
 苦労した話は言わぬ庭の石
 すり減った骨だけ支えてくれる
 何処へ行く舗装してある森のみち
 薄情な仮面の裏は泣いている
 茶柱のメリット心地よい期待
 一心に生きてメリット考えぬ
 薄情なふりして自分守りぬく
 ストレスもとかす靴はき今日を舞う
 メリットがあるから耐える休肝日
 メリットのない裏方で汗流す
 真実を探して風が舞っている
 親の汗知る子はきつとグレはせぬ

南大阪川柳会

吉川 寿美報

由美子 章子 雅女 金祥 茂登子 富子 善夫 志げ緒 一粹 一京 朋恵 喜子 宗明 良子 無限 孝男

要領の悪さも含めみな私
 時々は叩くと与るテレビです
 このまんま持ち直してもボンコツ車
 持ち直すだろうかキトラの壁画
 マラソンを完走した汗誇りとす
 第九条誇り危うくなつて
 ふるさとの誇り緑と人情と
 添い上げて婦唱夫隨を誇る妻
 千年の大樹を誇る屋久の杉
 商いの低い頭にある誇り
 古都有情だらりの帯も文化財
 誇るものなんにもないがよく笑う
 連れ添うて共に白髪になる誇り
 要領の悪い妻だがいとおしい
 飛鳥路の歴史を誇る彼岸花
 墨壺へ父の誇りがしみた艶
 子の帰省病母は途端によく喋り
 妻の功赤字黒字に持ち直す
 気を持ち直し災い福にする夫婦
 要領がよくて味方からくるつぶて

川柳塔まつえ吟社

三島 澁江報

ひさ乃 なぎさ 修 シマ子 弘泰 直子 楓楽 章久 柳弘 遠野 柳伸 朝子 憲太郎 叡子 志華子 雅文 きらり 欣子 頂留子 千梢

音頭取る人もとられる人も秋
 棟梁の音頭で餅が舞ってくる
 音頭とる男がいけない町になり
 増税の音頭ばかりがよく響く
 反対の音頭いつもの人がとる
 本心を伏せたまんまで音頭とる
 ふるさとを覗く開発様変わり
 壺覗く明日の僕の顔がある
 他人の目で覗くとどんな僕だろう
 それぞれに覗く角度が違います
 節穴を覗くと見える過去未来
 花の芽が覗いて夢をふくらます
 博多帯 女心の秋を着る
 帯締めてばんと叩いて祭り笛
 亡母の帯母の手垢がしみて
 辛い過去知ってる帯が捨てられぬ
 角帯は大和魂もつとつた
 一本の帯にドラマが生きている
 信頼の絆で夫婦旅つづく
 毎日が最後と想う終の旅
 珍珠にも飽きてそろそろ旅終える
 人生の旅秋色が深くなる
 夕暮れは家恋しさの旅の空
 時刻表旅のところが染みている

川柳藤井寺

高田美代子報

治代 幸子 蘭 玲子 茂美 昭二 小生 小鹿 義良 邦代 昌枝 秀子 房子 注湖 桂子 きみえ 芳山 雪代 静恵 多賀子 政子 畔 知恵子 叮紅 龍一 史郎

脳天がまだ揺れている震度7
 地震保険真面目に検討しています

重人 千里

裏切った街角に立つ地蔵さん
 車椅子ゆつくりはくの街角へ
 街角を曲がると尻尾生えてくる
 げんまんをした街角だ忘れない
 街角ののれんに温い風がある
 街角を曲がると僕の裏通り

ちえこ すみこ 喜美子 たけし 浜丘

地殻変動なますの群れが大あくび
 地が揺れた朝もまっ赤な陽が昇る
 ひまわりにソーラーつけたらノーベル賞
 ひまわりに負けじと背筋伸ばす夏
 ひまわりは私に向いて咲いている
 ゴッポにはなれぬひまわり画いている
 ひまわりのパワータまで突き抜ける
 ひまわり柄2Lサイズによく似合い
 ウソはよそつひまわり全部にらんでる
 庭付きへまずひまわりの種を蒔く
 ひまわりも僕も抱いてる黒い核
 宅配の牛乳ビンの音が好き
 出勤へ牛乳だけの二日酔い
 牛乳パックこんな所で活かされる
 熱い牛乳注ぐ平和なマグカップ
 牛乳風呂今は昔の話だね
 牛乳配達した過去もある立志伝
 低脂肪牛乳にした理由があり
 牛乳を飲んで鍛えた金メダル
 再会は薦這う店のミルクテイ
 牛乳を十本よりも酒がよい
 牛乳に失礼だから囁んで飲む
 牛乳が安いチラシへ走り出す
 のっそのっそホルスタインの優しい目
 牛乳を飲んでうっかかり喋り出す
 牛乳もビールの泡も髭に付く
 牛乳を飲んだら腹の虫おこる
 百歳まで生きる気力は何だろう

惠勇 絹歌 淳司 喜代子 アヤ子 悦子 雅枝 登志子 栄一 かつみ 桂子 ヨシ枝 六点 庸佑 耕策 武義 志洋 いさお 弥生 みつこ 瑠美子 鐘造 昭子 井竿 扶美代 一筒 光男 美代子

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

スッポンの生血グラスにのめと言う
 いじめなど知らぬ少女のきれいな瞳
 曇りなくみがくグラスとわが心
 刀には負けぬが笑顔には負ける
 根をおろしかけると寒い風に逢う
 オリビック笑顔泣き顔美しい
 そわそわとするから腹の内読まれ
 オレオレの電話私にかからない
 ほどほどの幸せ余生日々平和
 熊よけの笛吹きながら茸採り
 意に添わぬ妥協に揺れるサングラス
 アフガンの少女に上げたい赤い靴
 流行がやつと巡ってきたドレス
 酔美容一日だけの美を捧げ
 コスモスの花の中なる道祖神
 脳の髪かたくて知恵も出てこない
 旅先で人情厚い町に逢う
 突然の訃報に心凍らせる
 メール打つ少女に怖い恋もある
 元氣弾ける少女の頃の碧い空
 鈍刀は寄り道もせず勤め上げ
 通学路少女の笑いこぼれてる
 やつぱりと妻は今後へ釘をさす
 たからづか春日野八千代まだ少女
 知恵絞る可愛い嘘を信じとく
 犬でさえ嫌いなひとによく吠える

都代子 石舟 巴子 重人 求芽 千津子 庸佑 正坊 和子 英子 (上) 隆 慶子 尚士 高栄 メ骨 祿香 紫香 ルイ子 啓生 郁子 幸雀 知香子 萬的 実 宇乃子 春

淋しくて花一りんを買いに行く
 怒られる回数減ったと笑う次女
 敬老の日かと思紛う昼のバス
 木刀を振るのをやめた敗戦日

いずも川柳会 佐藤 治代報

癖になるオクターブ上げ電話口
 声かけて肩をたたけば知らぬ人
 憧れるレベル届かぬ人を恋う
 十五夜の月に向かつて声がする
 どんぐりのレベルで続く趣味の会
 お出迎え犬が真つ先とんでくる
 予想屋の帽子に穴があいていた
 立ち話声をたたんで夕ぐれる
 予想だにしないまさかの計の知らせ
 予想した美人になった隣の娘
 星のように輝けますかこの地球
 すれすれのレベルにすれば楽になる
 寝こんで星に未来を問うてみる
 わたくしの秘密を星が知っている
 予想では楽な時間であったのに
 箒星私の前に降りて来た
 ごめんねの声がまっすぐ胸の中
 満天の星寝ころんで独り占め
 流れ星少女の恋は欲張り
 胸の象がときどき叫びだす
 星の数もう数えるのやめました
 手作りで迎える椅子の温かさ

蛙 久美子 則彦 見清 英子 みち子 スズコ 和歌子 啓三 多喜 桂子 治代 富輝子 ちえ 幸 昭二 かずこ 玲子 久子 昌枝 寿美 すみこ 満江 歌子

放牧の牛も家路に戻る声

レベルアップついでにはこない土踏ます
星が降る僕の心の中に降る

みな同じレベル新米食うている

予想した命の水は枯れている

魚屋の声に元氣の出るさかな

星流れ過去には触れぬ夢を抱く

ときめいた頃の星座が消えていた

柳柳塔おとと

西原

艶子報

炎の髪を洗って花野駆けてみる

煩惱を洗う冷たい風が吹く

丁寧な足を洗って懺悔する

果物の実り産地の味自慢

ペン洗いた心機一転詩へ挑む

実る秋たわわな柿にまた会えた

病む夫へ豊かな実り瞳に話す

逢うたびに愛まるやかに熟れて来る

引つ張って叩き伸はして顔洗う

ストレスを洗い消したい一行詩

音楽は心を洗う洗剤だ

食欲に歯止めをかけるインシユリン

食欲を宥めて守る腹八分

永田くん眼下棚田の黄金色

生き抜いていけば人生実るはず

預金利子実りの色が淡いまま

実り秋子にも孫にもおすそわけ

ひたすらに耐えれば実る日もあろう

商売は暇でも腹はすいてくる

房子

蘭水

茂美

きみえ

文子

章峰

多賀子

ちかし

雄々

螢

以和乃津

小生

黙光

ヒロ子

登美

舍人

幸次郎

清子

道子

一弘

風花

知恵

真一

和子

富貴子

艶子

由多香

第24回川柳塔鹿野みか月川柳大会

日時 12月5日(日) 午前9時開場

場所 国民宿舎「山紫苑」大広間

☎0857-84-2211

課題と選者 出句締切11時半

「纏める」 河内 天笑選

「いくさ」 森中恵美子選

「仲」 貞岡信太郎選

「矢」 小島 蘭幸選

「滝」 内田 久枝選

「門」 但見石花菜選

「ことば」 白根 ふみ選

席題なし 各題2句

会費 二〇〇〇円(昼食・発表誌・記念品呈)

賞 優秀賞杯(副賞付)ほか

出席者優先とする

12月4日(土) 18時より

大会と同じ会場

問い合わせ先 中原 諷人

☎0857-84-2100

主催 川柳塔鹿野みか月

後援 鳥取県川柳作家協会ほか

第2回全国川柳大会

日時 2月26(土)27(日)

会場 浜村温泉(JR山陰本線「浜村」駅)

参加費 1万5000円

(大会参加費、一泊二食宿泊代を含む)

1日目(26日) 浜村温泉入り

17時—川柳大会(題は事前に通知)

18時30分—懇親会(かに尽くし)

(浜乃家、浜村ビューホテル)

2日目(27日)

9時—発表会、表彰式

11時—解散

賞品 川柳名人1名、温泉招待・句碑・茶羽織

川柳準名人(2名)、鳥取名産・茶羽織

温泉地大賞(3名)、浜村温泉名産

川柳人(全員、記念品・作品集呈)

選者 小林由多香ほか

申込締切 2月10日(定員100名)

申込・問合わせ

〒680-0037 鳥取市東品治117 鳥取市観光案内所内

いなば温泉郷「第2回川柳大会」受付係

TEL 0857-22-3318

FAX 0857-29-1000

主 催 いなば温泉郷協議会

特別協力 鳥取県川柳作家協会

柳界展望

○月形川柳社創立30周年記念大会は8月1日、276名の参加で開催された。当日の本社関係者天位。

ラベンター畑に体臭を捨てる
播本 充子

○つくばね川柳会15周年記念川柳大会は9月12日に153名の参加で開催された。当日の本社関係者特選句。

真っ直ぐに進むと父の背が見える
播本 充子

○第8回川柳展望全国大会は9月18日アウイーナ大阪で開催された。当日の本社関係者秀句。

議事堂の前に置きたい仁王様
高瀬 霜石
僕の立場がありコオロギの立場がある
新家 完司

にんげんを続ける下着取り替えて
新家 完司

いま死ぬと黄色の菊が花ざかり
土橋 螢
扁桃腺のあたりで父が返事する
高瀬 霜石

○第54回岸和田市民川柳大会は、10月17日市立福祉総合センターで、80名の参加を得て開催された。当日の本社関係者受賞句。

（きしせん賞）
肩書に責任とって貰いたい
河内 天笑

（文化協会賞）
遠花火浴衣の母は眠そう
福本 英子

（文化祭奨励賞）
ワイングラスしどころ
長浜 美龍

（文化祭賞）
血圧を忘れバンザイしてしまふ
玉置 重人

○第12回相生市もみじまつり川柳大会は10月17日、84名の参加で開催された。当日の秀句は次のとおり。

（相生市観光協会賞）
辞めろとも言えず真綿で首をしめ
小林 妻子

（兵庫県川柳協会賞）
六法をゆすり圧力ある言葉
古川 奮水

○第55回西宮市民文化祭参加川柳大会は、10月24日138名の参加で開催された。当日の本社関係者の秀句。

抜け殻はまっすぐでした
蛇の皮
北野 哲男

○文化祭吹田市民川柳大会は、10月24日吹田メイシアターで190名の参加を得て開催された。同人の天位は次の通り。

さよならを後ろ姿の消えるまで
左右田泰雄

言訳の抗は深めに掘っておく
川島颯云児

（教育委員会賞）
もの淋し風の音色や茄子の馬
長浜 美龍
○去る5月、大阪知事表彰

新同人紹介

黒田茂代
くろだ しげよ

一みつ子・楓楽・みのり・善信・光推薦

小豆澤歌子
あずさざわ うた こ

一章峰・ちかし・きみえ推薦

川柳塔のぞみ12月句会

日時 12月14日(火)

13時

会場 浜町区民館

電話 03-3668-2354

課題 (各題2句)

「けじめ」津田 暹選

「いよいよ」てじま晩秋選

「クリスマス」五十嵐 修選

「自由吟」1句

投句 12月11日まで

(80円切手3枚)

投句・連絡先 〒193-0832

八王子市散田町2-

31-3 播本充子宛

ンターで開催された。参加は92名。当日の本社関係者秀句は次のとおり。
母さんの無言家庭を凍らせる 籠島 恵子
愛し合う今が永遠だと思 寺川 弘一

□城北川柳会では平成17年1月から、吐田公一氏に代って吉岡修氏が会長を務める。

▽出 版△

○川柳ささやま(遠山可住会長)は、創刊50周年記念句集「川柳ささやまⅢ」を10月吉日付で発刊。B6判186頁。参加者42名。

○NHK大阪文化センター川柳教室では、10月15日付で合同句集「浪華」を発刊。B6判178頁。36名参加。

○川柳ささ百合(出口セツ子会長)では、7年目を記念して「川柳ささ百合」を発刊。A5判36頁。

○井上桂作氏(同人・守口

市)は「たびの川柳」を出版。(B6判・134頁、新業館出版)句集紹介は12月号に掲載予定。

▼計 報▲

□月原宵明元相談役は10月13日、前立腺がんのため死去。95歳(追悼記事96頁)

▽訂 正△

11月号 P85中段24行目、福島↓福嶋 P87上段5行目、五月三十日↓七月十七日 P94中段12行目、意気軒高↓意気軒昂 P86川柳塔80年のあゆみ一欄に記載洩れがあったため、P83に増補版として再掲載。

常任理事会 10月21日(木)出席者20名 ①80周年・まつりの反省 ②常任理事新年度役割分担(当欄参照) ③新同人承認2名 その他 常任理事会 11月8日(月)出

席者20名 ①各地句会代表者会議開催について、開催日程、案内の範囲、名簿の整理その他を検討 ②「川柳」パンフレット作成案 ③その他
次回常任理事会 12月7日(火)9時から アウイーナ

お知らせ

10月21日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたので、お知らせします。(太字は部長です)

原稿募集 (同人)

○エッセー—本文たて20字×70行(1400字)
○ひとこと—本文たて15字×20行(3000字)
(この欄は誌友歓迎)
共にタイトルは別につけて下さい。
○柳界展望に掲載希望の記事(字数不問)
ただし原稿の採否、掲載号については編集部に一任して下さい。編集部

総務部	企画事業部	編集部	句会部	同人・誌友部	渉外部	会計部	発送部
前 たもつ	坊農 柳弘	西出 楓楽	大内 朝子	長浜 美籠	石森 利昭	西内 朋月	鶴田 遠野
村上 玄也	鴨谷瑠美子	山本希久子	村上 玄也	籠島 恵子	西内 朋月	西内 朋月	米田 恭昌
松原 寿子	穴吹 尚士	木本 朱夏	河内 月子	石森 利昭	河内 月子	河内 月子	籠島 恵子

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 尾浜 川柳会	14日(火)午後1時半から 暦・ゆとり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0983 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木)正午から 騒ぐ・結局・罪・貧乏性 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
岸和田 川柳会	18日(土)午後1時半から 布団・便利・誇る・回る	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳 藤井寺	19日(日)午後1時から 包丁・おだてる	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 驕り・調和・東の間・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十洞庵
川柳 ねやがわ	19日(日)1時半締切り 当る・アンコール・気合 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から ケーキ・郵便・むざむざ 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳塔 みぞくち	20日(月)午後7時半から そわそわ・今年の出来事 雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	22日(水)午後6時から 速効・溜る・通訳・偵察	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前10時から 筋・担ぐ・出口・数える	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	25日(土)午後6時から 習う・ページ・一言・愛	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 川柳会	26日(日)午後1時から 時間・すんなり・ミステリー 「名前」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京都 塔の会	27日(月)午後1時から 印(しるし)・貫く・部品	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
城北 川柳会	12月に限り休みます。	〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	2日(木)午後1時から 独り・逆・歳月	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 結ぶ・明日・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 去・コント・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	4日(土)午後1時から さらさら・身体・救う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	5日(日)午後1時から 骨・終る・回想・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 唐津	6日(月)午後1時半から 鐘・反省・終わり	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(木)午後1時から 歩く(共選)・群 め・だ・か(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	11日(土)午後1時から 戸棚・よろよろ・待つ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 予告・誤算・席・振り向く	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島滌丘
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から 返事・古い・にっこり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳 ふうもん 吟社	12日(日)午前9時から 没句供養川柳大会	全労災ビル(11月号P.140参照) 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から パソコン・永遠・来る・「魚」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 責任・リード・始まる・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ
ほたる 川柳 同好会	14日(火)午後1時から 百・急ぐ・なぜ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼

編集後記

☆たび重なる台風と、新潟県中越地震の被害があった今年も、残り1ヵ月となった。同人・誌友の皆さんには被害がなかったようなのでは、ホッとしている。しかし、被害地の様子をメディアで見聞きするたび、僅かばかりの義捐金でしかお役に立てぬ自分がかたし。

☆1月号から1年間、木津川計先生に「川柳塔」欄の句から選んでもらって、エッセー風の選評を執筆いただくことになった。対象句は2ヵ月前のもの、つまり1月号なら11月発表のものとなる。大いに期待して下さい。

☆本社句会の投句締切り時間が30分早くなって午後2時からとなるので、注意をお願いします。

☆11月12・13日、福岡県柳川市で開催された第19回国民文化祭川柳大会に、小中高校生の部の選者として出席した。柳川は詩人・歌人である北原白秋（1885～1942）のふるさととして知られる、落ち着いた風情のある水郷である。

☆到着してすぐに「どんこ舟」で川下りをしたが、川のあるところに歌碑があり、船頭さんと白秋作詞の童謡を歌い、心が和み癒された。

☆名物の鰻のせいろ蒸しを食べる間も、店のBGMは「からたちの花」「ベチカ」「雨」「かやの木山の」などを、オルゴールで聞かせている。地元の人達は、今も白秋先生と呼び尊敬の念を持ち続けているという。

☆当日は高野山合祀と重なり、川柳塔の大会出席者は総勢10人ほどであった。同人の快挙は79頁に。(ふ)

ひとこと

バトンタッチ

今年の七月にNHK大阪文化センター川柳教室の講師が橋高薫風先生から河内天笑先生へ代られました。突然だったので驚いたと同時に、その素早いバトンタッチには呆気にとられてしまいました。

薫風先生が天笑先生に一任された事は、言わず語らずとも天笑先生に対する真意を、目の当りに見せられたのでした。

心の深いところに強い絆があって、安心して勇退されたのだと思います。

お二人の先生の川柳への精神と情熱は厳しさを感じるほどです。三要素の「穿ち」「リズム」「ユーモア」の教えは勿論、文芸川柳の流れは続いて行くでしょう。川柳塔名督主幹に引き続き、川柳塔主幹に御指導していただける喜びを日に日に噛みしめて居ります。

(鴨谷瑠美子)

○いつかこんな日が来ることを案じていたが、九十五歳の母は老人性痴呆症へと進んでしまった。昨年十一月から三ヶ月の間に三回骨折、手術を繰り返して一年近く病院生活が続いたのだから無理もない。

○今年の春、術後肺炎を克服した頃から娘時代へタイムスリップ、私を妹と思込んでくれる。日常会話もするし、その場では理解でき

るのに、日月の推移、時間の観念はあやしくなり、何年間の記憶は、ごっそり抜け落ちていく。

○自分が母親であることも忘れていたのが私には哀しく、情けないと思っていたこともあった。しかし今ではこんなふうと思う。一人息子に先立たれたことも忘れ、生まれ故郷の風景しか思い浮かばず、年齢を忘れていた母は今とても幸せな手になっている。

○目下は期限付きの老健施設へ入所中、片道二時間近くかけて私はできる限り母に会いに行く。そして話相手になつていく。

無期限の施設へは待機者四百人と言われ、束の間の安息ではあるが。…

(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（2月号）」

地名

市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	
年 年			—	
月 月 から から 一年 半年			—	
9 5 8 0 0 0 0 円 円				
<p>該当の方に○をつけて下さい</p>				

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16
 川柳塔社 (電話) 06-6629-6914
 ウエムラ第2ビル202

振替 00980-5-33368

◎この用紙は必要があればご使用下さい



作品募集

初歩教室 「しぶちん」(3句)	課題吟 (3句)	「逃げる」	「準備」	「叶う」
	「短い」	「ポイント」		
「わくわく」	「合併」			
山本福政波奥河 川内天笑 柳塔(8句)	水煙抄(8句)	奥田みつ子選	河内天笑選	
愛染帖(3句)	茵香の花(3句)	波多野五楽庵選		
		政岡日枝子選		
		福本英子選		
		本吉宗光選		
		山川日出子選		

2月号発表(12月15日締切)

3月号

課題吟
初歩教室

本社12月句会

会費	1000円	投句料	500円
席題	1題 当日発表(各題2句以内)		
兼題	「こっそり」	高杉千步選	
	「棒」	桜井千秀選	
	「養う」	都倉求芽選	
	「弘う」	宮口笛生選	
	「バジヤマ」	河内天笑選	
おはなし		山本蛙城	

とき 12月7日(火)午後1時開場・2時締切

開催時間・締切り時間に注意下さい。

ところ アワイナ大阪 4階 金剛東

天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

本社1月句会 11日(火) 午後1時から

兼題 「ふところ」「魔法」「のろける」
「信じる」「祝辞」

第23年度 夜市川柳募集

第7回「怠ける」 西出楓 楽選
ハガキに3句 12月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇四年平成十六年十二月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アクト

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-6914番

振替(00)九八〇一五―三三三六八番

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茵香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限りません。ただし茵香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
 - ・放射線科・ホスピス
 - ・デイサービスセンター
- 診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00

JR 桃谷駅徒歩3分
<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>